第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook Fungi: Threatened wildlife of Japan

菌　類



環境省　編

令和７（2025）年３月

この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja

表紙の写真：アカダマスッポンタケ（左上）、スナタマゴタケ（右上）、マツタケ（左下）、
フジイロアマタケ（右下）

第５次レッドデータブック全体を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：環境省（編）. 2025. 第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　菌類．環境省，東京．529pp.

Citation: Ministry of the Environment, Japan (ed.). 2025. *The 5th Red Databook Fungi: Threatened wildlife of Japan*. Ministry of the Environment, Japan, Tokyo. 529pp.

はじめに

私たちが生きる現代は「第６の大量絶滅時代」ともいわれ、過去５回発生した大絶滅より種の絶滅速度は速く、その主な原因は人間活動による影響と考えられています。2019 年に生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム（IPBES）により公表された「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書」によると、世界の陸地の約 75%は著しく改変され、海洋の 66%は複数の人為的な影響下にあり、1700 年以降湿地の 85%以上が消失するなど、人類史上かつてない速度で地球全体の自然が変化していると報告されています。また、過去 50 年間の地球上の種の絶滅は、過去 1,000 万年平均の少なくとも数十倍、あるいは数百倍の速度で進んでおり、適切な対策を講じなければ、今後更に加速すると指摘されています。

2019 年の国連総会においては、世界中の生態系の劣化を予防し、食い止め、反転させるための努力を支援し、拡大させるために、2030 年までに陸と海の 30%以上を保護・保全する「30by30 目標」が提唱されました。30by30 目標の達成に当たっては、自然保護を目的とした国立公園等の保護地域に加えて、それ以外の場所で生物多様性の保全に資する地域として OECM（Other Effective area-based Conservation Measures）の役割も重視されました。この OECM は、持続可能な生産活動の場を含め、より広範囲における生物多様性保全や生態系回復の動きを後押しできる可能性を有するものであり、我が国においても、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている里地里山、企業緑地、社寺林などの区域を自然共生サイトとして認定する制度が始まりました。

また、2022 年 12 月に採択された新たな生物多様性に関する世界目標である「昆明・モントリオール生物多様性枠組」においては、「人間によって引き起こされる既知の絶滅危惧種の絶滅を阻止し、また絶滅リスクを大幅に減らすための種、特に絶滅危惧種を回復及び保全し、並びに適応能力の維持のために在来種、野生種及び家畜・栽培種の個体群内及び個体群間の遺伝的多様性を維持及び回復するために、生息域内及び生息域外保全や持続可能な管理の実践等を通じて緊急の管理行動を確保するとともに、共存に向けて人間と野生生物との軋轢を最小化するため、人間と野生生物の相互作用を効果的に管理する」ことが位置づけられました。これを受け、令和５年には、自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる「2030 年ネイチャーポジティブ」を掲げ、その実現のためのロードマップとして「生物多様性国家戦略 2023-2030」を策定しました。

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」については、自然とのふれあいや関わりを維持しつつ、積極的な生息地・生育地の保全活動等を推進するため、平成 29 年度に「特定第二種国内希少野生動植物種」制度を創設しました。本制度は、主に里地里山など二次的自然に生息する両生類、淡水魚類、昆虫類などの指定を想定しており、調査研究や環境教育等を目的とした捕獲等の行為については規制されないため、自然との関わりやふれあいを維持しつつ、各地域で積極的な生息・生育地の保全活動等が展開され、対象種の保全が進むことが期待されます。

本書は、平成 24 年に公表した「第４次レッドリスト」並びにその解説版である「レッドデータブック 2014」、平成 29 年に公表した「環境省版海洋生物レッドリスト」及び「第４次レッドリスト」の内容を一部見直して公表した環境省レッドリスト 2020 について、最新の知見を踏まえ改訂を行い、「第５次レッドリスト・レッドデータブック」として編纂したものです。「第５次レッドリスト」では、これまでと異

なり、個別の分類群の事情を超えて統一的な評価を行うために、「レッドリスト作成の手引」を作成し、絶滅のおそれに関する基準をより具体的に規定するとともに、定量的な情報に基づいて評価することを原則とすることで、生息地・生育地の現状をより正確に反映できるよう努めました。また、都道府県レッドリストの作成が充実してきたことに伴う「絶滅のおそれのある地域個体群」（LP）の評価基準の見直しやクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示等による利用のしやすさの改善など、さまざまな見直しを行っております。

レッドリスト・レッドデータブックは、捕獲規制等の直接的な法的効力を生むものではありませんが、社会への警鐘として広く社会に情報を提供することにより、さまざまな場面で多様な活用が図られるものです。環境省においても、環境影響評価法に基づく環境アセスメント等、さまざまな環境政策において基礎資料として活用され、近年、規制を伴う政策との関連がますます強化される傾向にあります。特に、「種の保存法」との関係では、レッドリスト掲載種の中で特に保護の優先度の高い種について、生息状況等に関する詳細な調査の実施等によりさらなる情報収集を行い、その結果や生息地・生育地の自然的・社会的状況等に応じて同法に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を講じていくこととしています。一方で、今回の改訂では、個体数が回復したこと等により絶滅危惧カテゴリーから除外された国内希少野生動植物種もあり、こうした種については、次回の見直しに向けて引き続き生息状況等を注視し、今後の評価結果も踏まえて、必要に応じて指定の解除を検討することとしています。

なお、掲載種の中には、人為による捕獲・採取圧（密猟・盗掘を含む）が主な減少要因となっている種が少なくありませんが、レッドリスト・レッドデータブックに掲載されることにより、かえって商業目的や観賞目的等による乱獲・盗掘等の対象となるおそれが増大することが懸念される種もあります。今回のレッドリスト・レッドデータブックに掲載された種を将来にわたって存続させていくには、国民をはじめ多様な主体が、その種がレッドリスト・レッドデータブックに掲載された意味を真摯に考えることが重要です。環境省としては、こうした観点からの普及啓発・広報や保護措置の充実等の各種対策を一層推進していく考えです。

今回のレッドリスト・レッドデータブック編纂に当たっては、レッドリスト掲載種の選定・評価からレッドデータブックの執筆まで、絶滅のおそれのある野生生物の選定評価検討会及び同分科会の委員各位、その他多くの研究者や専門家の方々から多大なるご指導、ご協力、ご尽力を賜りました。また、種の選定から本書の編纂にわたる過程において、データの整理等は（一財）自然環境研究センターが担当しました。

本書の編纂にご協力いただいた関係各位に対し、ここに改めて厚く感謝申し上げるとともに、本書が今後、行政、事業者、関係団体等、様々な主体による取組に広く活用されることを祈念します。

環境省自然環境局野生生物課
希少種保全推進室

目　次

はじめに i

環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯 iv

第5次レッドリスト作成の検討体制 vii

第5次レッドリスト(菌類)の作成と評価結果 ix

第5次レッドリスト(菌類) xiii

第5次レッドデータブック(菌類)の掲載内容 xvii

第５次レッドデータブック（菌類）各種の解説 1

第５次レッドリスト（菌類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種の解説 . 444

■学名索引 524

■和名索引 527

環境省レッドリスト･レッドデータブック作成の目的と経緯

レッドリスト・レッドデータブックとは

レッドリストとは、日本に生息又は生育する野生生物について、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価した上で絶滅危惧種を選定し、リストにまとめたものであり、おおむね５年ごとに見直しを行っている。絶滅危惧種の保存施策は、生物学的知見に立脚しつつ、時機を失うことなく適切に実施される必要があり、種の保存法に基づく希少野生動植物種保存基本方針に基づいてレッドリストを作成し、施策の推進に必要な各種の調査研究を積極的に推進することとしている。また併せて、レッドリストに掲載された種について、その生息状況等を取りまとめ編纂したレッドデータブックを作成し、おおむね 10 年ごとに見直しを行っている。

これまでのレッドリストの改訂状況

・初版レッドデータブック（平成３年）

野生生物の保全のためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから、環境省では、昭和 61 年度より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行った。その結果を踏まえ、動物については平成３年に環境庁（当時）版レッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編」及び「日本の絶滅のおそれのある野生生物－無脊椎動物編」を取りまとめた。

なお、植物については、平成元年に、日本植物分類学会が中心となって維管束植物を対象として編集した「我が国における保護上重要な植物種の現状」が、我が国で最初のレッドデータブックである。

・第２次レッドリスト・レッドデータブック（平成９年～18 年）

平成７年度には、国際自然保護連合（IUCN）で採択された新しいカテゴリー（ランク）の考え方を踏まえ、動物についてはレッドリストの見直し、植物については新たに環境省版としてレッドリストの作成に着手した。動物では、①哺乳類 ②鳥類、③爬虫類、④両生類、⑤汽水･淡水魚類、⑥昆虫類、⑦陸・淡水産貝類、⑧その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）、植物では⑨植物I（維管束植物）、⑩植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の計 10 分類群ごとに、平成９～12 年度にかけて順次レッドリストを公表した。また、このレッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 12～18 年度に発行した。

・第３次レッドリスト（平成 18 年・19 年）

平成 14 年度より２回目のレッドリストの見直し作業に着手し、平成 18 年 12 月に鳥類、爬虫類、両生類、その他無脊椎動物の４分類群、平成 19 年８月に残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I（維管束植物）、植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の６分類群のレッドリストを公表した（動物については３回目、植物については２回目の公表）。新たにレッドリストに掲載された種や、カテゴリーが変更された種については、現行レッドデータブックの付属説明資料を作成した。

・第４次レッドリスト及びレッドデータブック 2014（平成 24 年～27 年）

平成 20 年度より、上記の見直しに引き続き、３回目のレッドリスト見直し作業に着手した。前回見直し後の生息・生育状況や生息・生育環境の変化等の最新の知見を収集し検討を行ってきた。平成 24 年度に 10 分類群のレッドリストについて見直し作業が終了し、新たな第４次レッドリストを取りまとめ、公表した。

・第４次レッドリストの随時見直し（平成 27 年～令和２年）

第４次レッドリストについては、平成 27 年度から令和２年度まで、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種について、時期を定めず必要に応じて個別に見直しを行った。

平成 27 年に、哺乳類の一部の種及び絶滅のおそれのある地域個体群（ゼニガタアザラシ、カモシカの地域個体群）についてカテゴリー（ランク）を見直したレッドリスト 2015 を公表した。

平成 29 年に、13 分類群の 60 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2017 を公表した。絶滅危惧種は 38 種増加し、合計 3,634 種となった。また、平成 29 年 10 月には、レッドリスト 2017 において新規に掲載された種（亜種、変種等を含む。）及びカテゴリーが変更された種（合計 60 種）を対象に、レッドデータブックに代わる解説資料として、それらの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2017 補遺資料」を公表した。

平成 30 年に、67 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2018 を公表した。絶滅危惧種は 41 種増加（44 種追加、３種削除）し、合計 3,675 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 67 種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2018 補遺資料」を公表した。

平成 31 年に、トキ及びトキウモウダニについてカテゴリーを見直したレッドリスト 2019 を公表した。絶滅危惧種は 1 種増加し、合計 3,676 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記２種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2019 補遺資料」を公表した。

令和２年に、75 種のカテゴリーを見直したレッドリスト 2020 を公表した。絶滅危惧種は 39 種増加し、合計 3,716 種となった。平成 29 年度に公表された海洋生物レッドリストに掲載された種数とあわせると、環境省が絶滅危惧種と評価した種は 3,772 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 75 種について、随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2020 補遺資料」を公表した。

・海洋生物レッドリスト（平成 29 年）

平成 23 年に「海洋生物多様性保全戦略」が策定され「海洋生物の希少性等の評価」の推進が位置づけられるなど、海洋の生物に対する関心の高まりを受け、平成 24 年度より海洋生物レッドリスト作成の作業を開始した。魚類、サンゴ類、甲殻類、頭足類、その他無脊椎動物の５分類群のうち、これまで評価を行っていなかった種について、新たにレッドリストを取りまとめ海洋生物レッドリストとして公表した。海洋生物レッドリストでは絶滅危惧種として 56 種が掲載された。なお、水産庁が資源評価を実施している種や小型鯨類などの 94 種は、水産庁が評価した。

・第５次レッドリスト・レッドデータブック（令和７年～）

令和２年度より、従来のレッドリストと海洋生物レッドリストの検討体制を統合した。令和７年３月に、①維管束植物、②蘚苔類、③藻類、④地衣類、⑤菌類の５分類群について第５次レッドリスト・レッドデータブックを公表した。今後、他の分類群についても令和８年以降に順次公表することとしている。

第5次レッドリスト作成の検討体制

環境省第５次レッドリストの作成に当たっては、専門家による「絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会」を設置し、その下に分類群毎に分科会を設置して検討を進めることとした。

● 第５次レッドリスト検討体制（敬称略。50 音順。所属は原則として令和６（2024）年度現在。）

［絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員］

座　長：	石井 実	大阪府立大学　名誉教授 兼 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所　理事長
委　員：	石井 信夫	東京女子大学　名誉教授
	岩崎 敬二	奈良大学文学部地理学科　教授
	大高 明史	弘前大学　名誉教授
	尾崎 清明	山階鳥類研究所　副所長
	柏谷 博之	国立科学博物館　名誉研究員
	角野 康郎	神戸大学　名誉教授
	木村 清志	三重大学　名誉教授
	白山 義久	京都大学　名誉教授
	田中 次郎	東京海洋大学　名誉教授
	深見 裕伸	宮崎大学農学部海洋生物環境学科　教授
	逸見 泰久	熊本大学　名誉教授
	細谷 和海	近畿大学　名誉教授
	細矢 剛	国立科学博物館植物研究部　部長
	松井 正文	京都大学　名誉教授
	山口 富美夫	広島大学大学院統合生命科学研究科　教授

［分科会］

哺乳類分科会 座長：石井信夫 委員数：５名
鳥類分科会 座長：尾崎清明 委員数：７名
爬虫類・両生類分科会 座長：松井正文 委員数：５名
淡水魚類分科会 座長：細谷和海 委員数：10 名
海水魚類分科会 座長：木村清志 委員数：13 名
サンゴ類分科会 座長：深見裕伸 委員数：５名
昆虫類分科会 座長：石井　実 委員数：12 名
甲殻類分科会 座長：逸見泰久 委員数：12 名
軟体動物分科会 座長：岩崎敬二 委員数：10 名
陸域その他無脊椎動物分科会 座長：大高明史 委員数：６名
海域その他無脊椎動物分科会 座長：白山義久 委員数：10 名

維管束植物分科会 座長：角野康郎 委員数：10 名
蘚苔類分科会 座長：山口富美夫 委員数：５名
藻類分科会 座長：田中次郎 委員数：６名
地衣類分科会 座長：柏谷博之 委員数：５名
菌類分科会 座長：細矢　剛 委員数：５名

第5次レッドリスト(菌類)の作成と評価結果

第５次レッドリスト（菌類）について

菌類はカビ・きのこ・酵母であり、日本には約 1 万種が知られている。その多くは肉眼で直接見ることができない微生物であり、また大型の子実体を形成するきのこ類についても、季節や年によっては子実体の発生が認められないなど、モニタリングの難しい生物群である。このことから、菌類は絶滅危惧種としての評価が困難であり、国際的にも評価が完了した種数が少ないのが現状である。

今回の第 5 次レッドリストでは、定量評価を本格的に取り入れたという点で第 4 次レッドリストと大きく異なっている。従来のレッドリストにおける CR や EN というカテゴリーは用語こそ国際的な評価を行っている IUCN のそれと同一であるが、日本独自の定性評価が広く用いられ、また CR+EN のように複数のカテゴリーがまとめて扱われていた。第 5 次の評価では、個体群の縮小、地理的範囲、成熟個体の数やその減少（厳密には菌類の個体数を算定することは困難であるため、子実体の発生した基質数や面積から推測した個体数などが用いられる）などをもとに、できる限り厳密な定量評価を目指した。それが不可能な場合はやむを得ず定性的な評価となったものもあるが、その場合でも過去のデータや第 5 次レッドリスト作成のための調査結果などに基づいて評価した。また、分類学的実体についても可能な限り文献調査と原記載やタイプ標本に基づく調査を行い、特に冬虫夏草類やマツタケなど特殊な専門的知識を必要とする分類群については、別途専門家に評価やその補助を依頼するなどの対応を行なった。

その結果、多くの種についてその評価が第４次レッドリストから変更され、変更箇所はこれまでの見直しの中で最も多くなった。環境省菌類レッドリストは当初、生育環境や分布が限られた種、ならびに希少種を中心として作成された。しかし、実際にはこうした種の全てが絶滅危惧であるとは限らないことから、レッドリストに掲載されているすべての分類群について、今回、ゼロベースでの評価をしなおした。

一方、評価する過程では、調査者の高齢化による世代交代や、調査を担えるような若手研究者の減少が明らかになった。絶滅危惧の評価が困難な菌類についてより科学的な評価をするには、次世代研究者の育成が極めて重要であることも痛感された。前述のような定量・定性評価が困難な種については情報不足（DD）と評価せざるを得なかったが、今後調査継続が困難な種が増えないことを祈るばかりである。

菌類の総種数は 150 万種という推定値が広く認識されている。しかし、分子情報や従来評価されなかった発生基質などを加味した現在の多様性評価に基づくと、その総種数は 300 万種を超えるという推定値もある。さらに、アジアではまだ未記載の種が多く、世界中の生物のオカレンスデータを集積している GBIF（地球規模生物多様性情報機構）でのデータ数も、アジアでは動植物に比べて菌類のデータは圧倒的に少ない。

今後、ミュゼオミクスによる古い標本からの DNA 情報の取得と解読、絶滅危惧種におけるゲノミクスの実施などの新しい技術によって知見が蓄積され、DNA バーコーディングによる種の識別、メタゲノム的な方法によって環境中における潜在的な存在の認識などが可能になれば、絶滅危惧評価の精度も向上するものと期待される。今回の調査を新しい出発点として、さらに精確かつ定量的な評価を目指しデータの蓄積を図りたい。

令和７年３月

菌類分科会座長 細矢　剛

［菌類分科会委員］

座　長：	細矢　剛	国立科学博物館植物研究部　部長
委　員：	糟谷　大河	慶應義塾大学経済学部　准教授
	服部　力	森林研究・整備機構 森林総合研究所　研究ディレクター
	吹春　俊光	千葉県立中央博物館　元上席研究員
	保坂　健太郎	国立科学博物館植物研究部　研究主幹

協力者一覧（敬称略）

第５次レッドリスト・レッドデータブックは、下記の方々のご協力によって作成されたものです。ご協力いただきました方々のお名前を掲載し、厚く御礼申し上げます。

青木 渉、浅井淑子、荒野民雄、石垣充一、市川浩久、一般財団法人自然環境研究センター、井村悦子、井本敏和、上原妙子、上原裕雄、牛島秀爾、牛山雄二、江口一雄、小川尚志、北村益美、工藤啓子、栗林義弘、黒川悦子、黒木秀一、小山明人、笹 孝、田上祥二、種山裕一、土屋 慧、奈良泰世、成松眞樹、根田 仁、土生茂一、古川雅人、丸山隆史、宮崎惠子、山田明義、山本航平、湯口竹幸、横沢利昭、吉岡直樹

（１）第５次レッドリスト（菌類）作成の手順

第５次レッドリスト（菌類）については、レッドリスト作成の手引の「第一　絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価における基本的事項」及び「第二　各分科会における基本的事項」に従って、評価対象となる種（亜種、変種等を含む、以下同じ）を選定したうえで１種ずつ各対象種の既知情報等を「第三環境省レッドリストカテゴリーと判定基準」の各基準に当てはめてカテゴリー評価を実施した。その他、レッドリスト作成に係る詳細については、レッドリスト作成の手引を参照のこと。

参考：環境省レッドリストのカテゴリー

カテゴリー		定義と基本概念
絶滅 Extinct **(EX)**		我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild **(EW)**		飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧	**絶滅危惧 IA 類** Critically Endangered **(CR)**	深刻な絶滅の危機に瀕している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）
	絶滅危惧 IB 類 Endangered **(EN)**	絶滅の危機に瀕している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、IA 類（CR）ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの）
	絶滅危惧 II 類 Vulnerable **(VU)**	絶滅の危険が増大している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、「絶滅危惧 IA 類（CR）」または「絶滅危惧 IB 類（EN）」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの）
準絶滅危惧 Near Threatened **(NT)**		存続基盤が脆弱な種 （現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの）
情報不足 Data Deficient **(DD)**		カテゴリーを判定するための情報が不足している種 （現時点での絶滅危険度は確定できないが、今後情報が得られれば「絶滅危惧」等になりうるもの）

付属資料

絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population **(LP)**	孤立した地域個体群で、絶滅のおそれが高いもの

出典：環境省レッドリストカテゴリーと判定基準を抜粋して作成

（２）第５次レッドリスト（菌類）掲載種数

今回の見直しの結果による第５次レッドリスト掲載種のカテゴリー内訳と、レッドリスト 2020 からの各カテゴリーにおける種数の変遷は、以下のとおりである。

表１ 第５次レッドリスト（菌類）掲載種のカテゴリー内訳

EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	合計
20	0	2	8	3	8	69	110

表２ 各カテゴリーにおける種数の変遷（レッドリスト 2020 と第５次レッドリストの比較）

		第５次レッドリストにおける評価								
		EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	不掲載	合計
内訳		20	0	2	8	3	8	69	53	163
レッドリスト 2020	EX	20	0	0	0	0	0	3	2	25
	EW	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	CR+EN	0	0	1	1	1	0	15	18	36
	EN（注）	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	VU	0	0	0	2	2	1	9	10	24
	NT	0	0	0	1	0	5	8	7	21
	DD	0	0	0	0	0	2	34	15	51
新規追加		0	0	1	3	0	0	0	0	4

注：随時見直し

（３）第５次レッドリスト（菌類）から明らかになった点

第５次レッドリストには、新たにトガサワラショウロ、フジイロアマタケ、ヤクタネショウロ、ヨコグラサルノコシカケが掲載された。前回の RL2020 と比較すると、絶滅危惧I類（CR,EN）および絶滅危惧II類（VU）を含む絶滅危惧種は、61 種から 13 種に減少した。この減少の主な要因は、第５次レッドリストで初めて定量評価が実施されたことに伴い、前回 CR,EN,VU と評価された種の多くが情報不足（DD）あるいはレッドリスト不掲載となったことによるものである。具体的には、前回 CR,EN,VU と評価された種のうち、アカエノツトノミタケ、キアミズキンタケ、トゲホコリタケなど 24 種が DD と評価され、アブヤドリタケ、ウスキタンポセミタケ、キツネノサカズキなど 28 種がレッドリスト不掲載となった。

また、RL2020 で絶滅（EX）と評価された種のうち、３種が DD に変更された。例として、ニセカンバタケは、国内で 1947 年以来報告がなく RL2020 では EX と評価されていたが、愛媛県などでの再発見を受け、第５次レッドリストでは DD と評価された。さらに、前回 EX あるいは EW（野生絶滅）と評価された種のうち、３種がレッドリスト不掲載となった。例えば、RL2020 で EX と評価されたハハシマアコウショウロは、最新の研究により広域分布種のシノニムであると結論付けられ、レッドリスト不掲載となった。

第5次レッドリスト（菌類）

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
FU0001	絶滅（EX）	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis*
FU0002	絶滅（EX）	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides*
FU0003	絶滅（EX）	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis*
FU0004	絶滅（EX）	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis*
FU0005	絶滅（EX）	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa*
FU0006	絶滅（EX）	ハハノツエタケ	*Collybia matris*
FU0007	絶滅（EX）	ムラサキチャヒラタケ	*Crepidotus subpurpureus*
FU0008	絶滅（EX）	ムニンチャモミウラモドキ	*Entoloma japonense*
FU0009	絶滅（EX）	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor*
FU0010	絶滅（EX）	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora*
FU0011	絶滅（EX）	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata*
FU0012	絶滅（EX）	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus*
FU0013	絶滅（EX）	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii*
FU0014	絶滅（EX）	ムニンチヂミタケ	*Campanella boninensis*
FU0015	絶滅（EX）	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis*
FU0016	絶滅（EX）	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi*
FU0017	絶滅（EX）	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus*
FU0018	絶滅（EX）	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis*
FU0019	絶滅（EX）	ケガワタケ属の１種	*Lentinus lamelliporus*
FU0020	絶滅（EX）	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus*
FU0021	絶滅危惧IA 類（CR）	オオメシマコブ	*Fulvifomes boninensis*
FU0022	絶滅危惧IA 類（CR）	ヨコグラサルノコシカケ	*Fulvifomes imazekii*
FU0023	絶滅危惧IB 類（EN）	フジイロアマタケ	*Baeospora myriadophylla*
FU0024	絶滅危惧IB 類（EN）	ヤチヒロヒダタケ	*Desarmillaria ectypa*
FU0025	絶滅危惧IB 類（EN）	トガサワラショウロ	*Rhizopogon togasawarius*
FU0026	絶滅危惧IB 類（EN）	ヤクタネショウロ	*Rhizopogon yakushimensis*
FU0027	絶滅危惧IB 類（EN）	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani*
FU0028	絶滅危惧IB 類（EN）	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus*
FU0029	絶滅危惧IB 類（EN）	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus*
FU0030	絶滅危惧IB 類（EN）	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontiellum japonicum*
FU0031	絶滅危惧II類（VU）	キリノミタケ	*Chorioactis geaster*
FU0032	絶滅危惧II類（VU）	コナガエノアカカゴタケ	*Lysurus sphaerocephalus*
FU0033	絶滅危惧II類（VU）	カンバタケモドキ	*Favolus pseudobetulius*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
FU0034	準絶滅危惧(NT)	クロムラサキハナビラタケ	*Diplocarpa irregularis*
FU0035	準絶滅危惧(NT)	マツタケ	*Tricholoma matsutake*
FU0036	準絶滅危惧(NT)	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus*
FU0037	準絶滅危惧(NT)	メシマコブ	*Sanghuangporus sanghuang*
FU0038	準絶滅危惧(NT)	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus*
FU0039	準絶滅危惧(NT)	ヌメリアイタケ	*Neoalbatrellus yasudae*
FU0040	準絶滅危惧(NT)	クロカワ	*Boletopsis grisea*
FU0041	準絶滅危惧(NT)	マツバハリタケ	*Phellodon fuligineoalbus*
FU0042	情報不足(DD)	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii*
FU0043	情報不足(DD)	トワダミドリクチキムシタケ	*Metarhizium pseudoatrovirens*
FU0044	情報不足(DD)	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis*
FU0045	情報不足(DD)	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala*
FU0046	情報不足(DD)	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosistipitata*
FU0047	情報不足(DD)	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila*
FU0048	情報不足(DD)	オオボタンタケ	*Trichoderma cerebriforme*
FU0049	情報不足(DD)	ヨコバイタケ	*Ophiocordyceps cicadellidicola*
FU0050	情報不足(DD)	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae*
FU0051	情報不足(DD)	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae*
FU0052	情報不足(DD)	イネゴセミタケ	*Tolypocladium inegoense*
FU0053	情報不足(DD)	タンポエゾゼミタケ	*Tolypocladium toriharamontanum*
FU0054	情報不足(DD)	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis*
FU0055	情報不足(DD)	ホネタケ	*Onygena corvina*
FU0056	情報不足(DD)	トガリフカアミガサタケ	*Morchella semilibera*
FU0057	情報不足(DD)	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis*
FU0058	情報不足(DD)	ヒュウガサラタケ	*Aurophora dochmia*
FU0059	情報不足(DD)	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus*
FU0060	情報不足(DD)	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi*
FU0061	情報不足(DD)	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis*
FU0062	情報不足(DD)	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale*
FU0063	情報不足(DD)	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre*
FU0064	情報不足(DD)	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum*
FU0065	情報不足(DD)	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum*
FU0066	情報不足(DD)	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum*
FU0067	情報不足(DD)	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa*
FU0068	情報不足(DD)	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea*
FU0069	情報不足(DD)	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
FU0070	情報不足（DD）	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum*
FU0071	情報不足（DD）	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis*
FU0072	情報不足（DD）	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta*
FU0073	情報不足（DD）	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina*
FU0074	情報不足（DD）	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae*
FU0075	情報不足（DD）	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica*
FU0076	情報不足（DD）	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius*
FU0077	情報不足（DD）	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius*
FU0078	情報不足（DD）	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus*
FU0079	情報不足（DD）	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus*
FU0080	情報不足（DD）	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina*
FU0081	情報不足（DD）	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense*
FU0082	情報不足（DD）	シモコシ	*Tricholoma auratum*
FU0083	情報不足（DD）	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake*
FU0084	情報不足（DD）	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum*
FU0085	情報不足（DD）	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans*
FU0086	情報不足（DD）	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum*
FU0087	情報不足（DD）	アキノアシナガイグチ	*Aureoboletus viscosus*
FU0088	情報不足（DD）	ヤマドリタケ	*Boletus edulis*
FU0089	情報不足（DD）	トライグチ	*Strobilomyces mirandus*
FU0090	情報不足（DD）	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus*
FU0091	情報不足（DD）	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum*
FU0092	情報不足（DD）	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae*
FU0093	情報不足（DD）	ササナバ	*Phaeoclavulina campestris*
FU0094	情報不足（DD）	エヒメウスバタケ	*Hymenochaete odontoides*
FU0095	情報不足（DD）	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis*
FU0096	情報不足（DD）	ヤエヤマキコブタケ	*Inonotus pachyphloeus*
FU0097	情報不足（DD）	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii*
FU0098	情報不足（DD）	キアミズキンタケ	*Lysurus periphragmoides*
FU0099	情報不足（DD）	ウスキキヌガサタケ	*Phallus luteus*
FU0100	情報不足（DD）	ニカワショウロ	*Protubera borealis*
FU0101	情報不足（DD）	ツガマイタケ	*Osteina obducta*
FU0102	情報不足（DD）	ダイダイサルノコシカケ	*Skeletocutis albomarginata*
FU0103	情報不足（DD）	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus*
FU0104	情報不足（DD）	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis*
FU0105	情報不足（DD）	ニセカンバタケ	*Tomophagus colossus*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
FU0106	情報不足（DD）	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola*
FU0107	情報不足（DD）	フサハリタケ	*Hericium cirrhatum*
FU0108	情報不足（DD）	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis*
FU0109	情報不足（DD）	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis*
FU0110	情報不足（DD）	シシタケ	*Sarcodon imbricatus*

第5次レッドデータブック(菌類)の掲載内容

本書では、上記のレッドリストに掲載された種の概要を示すため、種ごとに以下の項目と内容を記載した。

（１）判定対象種情報

１）評価分科会名

判定対象種を評価した分科会名を記載した。

２）高次分類群名

目名、科名を記載した。

３）和名

標準和名を記載した。

４）学名等

学名を記載した。

５）日本における固有性

日本にのみ生育すると考えられる場合、「日本固有」と記載した。

（２）カテゴリー判定結果

１）カテゴリー区分

カテゴリーの記号と、名称として、「EX（絶滅）」、「EW（野生絶滅）」、「CR（絶滅危惧IA 類）」、「EN（絶滅危惧IB 類）」、「VU（絶滅危惧II類）」、「NT（準絶滅危惧）」、「DD（情報不足）」の、いずれかの区分を記載した。

２）カテゴリー判定基準

環境省レッドリストカテゴリーと判定基準により、どの判定基準によりカテゴリーが決定されたか明示するとともに、各判定基準適用の判断理由を記載した。

（３）概要

種の基礎的情報、我が国における現在の生育状況、存在を脅かす要因、保護対策の現状等、特にその種が現在おかれている状況を要約して記載した。

（４）協力者

レッドデータブックの執筆に際して、情報提供等の協力者がいる場合は、氏名、所属等を記載した。

（５）基礎情報

１）形態

その種の大きさや色など、基本的事項を簡潔に記載した。近縁種がある場合はその識別点も含めた。

２）生活史

出現期や生育環境選択性、生育に必要な条件などについて判明している事項を記載した。

３）生育環境

対象種の一般的な生育環境について簡潔に記載した。ただし、生育環境の現状や悪化状況などに関しては、本項目ではなく「生育地の現況」に記載した。また別表１の「生息・生育環境区分」に該当するカテゴリー及び別表２の「国土地域区分」の該当するカテゴリーを記載した。

４）分布域

個体群が縮小する以前の健全と考えられる時代の分布域を、分かる範囲で記載した。近縁種がある場合は分布域の違いを記述した。

また、島嶼群の名称は原則として自然環境保全基礎調査報告書の分布図に示されている表記を使用し、南西諸島地域では、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、尖閣諸島、大東諸島、等とした。琉球列島は、奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島を含むものとした。

（６）掲載種の基礎情報

１）分布域の現況

基本的に国内の分布域について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の分布域の縮小の変遷、具体的な面積や分布域の分断状況等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

２）生育地の現況

基本的に国内の生育地について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の生育範囲の縮小の変遷等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

３）個体数の現況

基本的に国内の個体数について現在の状況が分かる場合に記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

（７）存続を脅かす要因

対象種の存続を脅かしていると考えられる要因について記載した。また、別表３の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するタイプ区分を過去（2000 年以前）と現在（2000 年以降）で分けて該当するカテゴリーを記載した。

（８）絶滅に至った経緯とその要因

絶滅と判定された種については、対象種が最後まで分布していた地域、絶滅に至るまでの個体数や分布域の推移、絶滅に至った要因（原因）等をまとめて記載した。

絶滅の要因が分かっている場合は、別表３の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するカテゴリーを記載した。

（９）特記事項

特筆すべき学術的重要性や、保護の意義、必要性、具体策等について記載した。また、前回の見直し以降、あるいはレッドリスト公表後に、学名又は和名の変更等につながる分類群の変更（新たな分類体系による科や属等の分類群間の移動、種・亜種の統合・分離等）があった種については、この項目にそ

の旨を記載した。

（10）旧レッドリストカテゴリーと掲載名

過去のレッドリストからのカテゴリー及び学名並びに和名の変更の経過を、公表年次とともに記載した。

（11）都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況

2023 年 3 月時点における 47 都道府県のレッドリスト・レッドデータブックに掲載されているカテゴリーについて記載した。なお、都道府県により対象種の分類体系が異なる場合があるため注意が必要。

（12）保護に係る法令指定状況

2023 年 3 月時点における、種の保存法に基づく国内希少野生動植物の指定状況、保護増殖事業計画策定状況、国指定天然記念物指定状況について記載した。

（13）参考文献

原則として、カテゴリー判定の根拠になった文献（最近の分布や生育地の状況、推移等がわかるもの）を中心に本書を活用する方に役立つと考えられる文献名を掲載した。また、分類について様々な意見のある種や未記載種であっても種・亜種レベルで評価されているものは、学名並びに和名表記の根拠、及び別種とされている根拠となる文献を挙げた。

（14）アセスメントサマリー

カテゴリー判定結果、存続を脅かす要因、生育環境区分及び保護に係る法令指定状況（国指定のみ）について定型の英文を記載した。

（15）解説執筆者

レッドデータブックの執筆者の氏名、所属等を記載した。

別表１　第５次レッドリスト生息・生育環境区分

大区分	中区分	小区分	細区分
陸域	山地・丘陵地	高標高地（約 2500m 以上；高山帯に相当※1）	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			農業用水路
		中標高地（約 500-2500m まで；亜高山帯・山地帯に相当※1）	湿地・湿原・細流
			砂地・風衝地
			岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
			洞窟・地下浅層・地下水域
		低標高地（約 500m 以下；低地帯・丘陵帯に相当※1）	河川源流域
			河川上流域
			河川中流域
			ため池・池沼
			湖・ダム湖
		その他（自由記入）	その他（自由記入）
	台地・平野・盆地・海岸	平地部	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			湿地・湿原
			住宅地
			商業・工業施設
			市街緑地
			砂地・礫地
		海岸部	河川中流域
			河川下流域
			河口域
			ワンド
			農業用水路
			小河川
			ため池・池沼
			潟・湖・ダム湖
			地下水域
			井戸
		その他（自由記入）	洞窟・地下浅層

大区分	中区分	小区分	細区分
			砂浜・礫浜
			海崖・岩浜・岩礁(磯)
			汽水域
			塩沼地・塩性湿地・河口干潟 (マングローブ湿地を含む)
			潟・汽水湖
			陸封潮溜まり (アンキアライン池・洞窟)
			その他(自由記入)
海域	沿岸※2	潮間帯 表層 (低潮線から水深 200m まで) 中深層以深 (水深 200m 以深) その他 (自由記入)	海面
			漂泳界(水柱環境)
			岩礁(磯)
			藻場
			アマモ場
			サンゴ礁
			干潟
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
			その他(自由記入)
	外洋※3	表層 (水深 200m まで) 中深層以深 (水深 200m 以深) その他 (自由記入)	海面
			漂泳界(水柱環境)
			岩底
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
			熱水噴出孔
			冷水湧出帯
			その他(自由記入)

※１：高度帯の区分は、高地植物学（柴田,1985）における区分に基づく。

※２：ここでは海岸線から接続水域まで（0km～約 44km(24 海里)）

※３：ここでは接続水域から排他的経済水域（EEZ）まで（約 45km～約 370km（200 海里））

別表２　「国土の特性に応じたグランドデザイン」における 7 つの地域区分（生物多様性国家戦略 2012－2020 より抜粋）

①奥山自然地域……相対的に自然性の高い地域
②里地里山・田園地域（人工林が優占する地域を含む） ……①と③の間に位置する地域
③都市地域……人間活動が集中する地域
④河川・湿地地域……各地域を結びつける生態系ネットワークの基軸となる水系
⑤沿岸域……海岸線を挟む陸域及び海域
⑥海洋域……沿岸域を取り巻く広大な海域
⑦島嶼地域……沿岸域・海洋域にある島々

別表３　存続を脅かす要因のタイプ区分

	新No	第5次RL	要因の適用範囲に係る説明
A 開発	A01	森林伐採	自然林や二次林を含む伐採による森林の減少や消失に起因する場合に適用する。 樹洞の減少等の森林面積の減少を伴わないような要因を広義に含む。
	A02	湖沼開発	湖沼、ため池等の開発行為に起因する場合に適用する。 水域の消失だけでなく護岸整備や取水施設の設置等の開発行為に係る要因を広義に含む。
	A03	河川開発	全ての河川種別（一級、二級、準用、普通）における開発行為に起因する場合に適用する。 護岸整備、河床の掘削や整備、河道の付け替え等を含む。ダムをはじめとした河川工作物の建設に起因する場合は「ダム・河川工作物建設」の区分に含める。
	A04	海岸開発	海岸や砂浜域の開発行為に起因する場合に適用する。 海岸の埋め立てや護岸整備、港湾整備等に関する要因も広義に含む。
	A05	海砂採取	沿岸域における砂礫の採取に起因する場合に適用する。 周辺での海砂採取に伴う砂浜域の後退等の直接的に確認される要因を広義に含む。
	A06	湿地開発	湿地の開発行為に起因する場合に適用する。 湿地の埋め立てや周辺の湿地を維持するための水源の開発等も広義に含む。
	A07	圃場整備	水田、畑地等の農地整備に起因する場合に適用する。 圃場整備に伴う田面の乾田化や水路、畦の消失及びコンクリート化等の整備による要因を含む。
	A08	草地開発	草地として維持されている環境の開発に起因する場合に適用する。 開発行為に関係するものを広義に含む。
	A09	石灰採掘	石灰の採掘に起因する場合に適用する。 石灰採掘に関わる人為的な影響に関するものを広義に含む。
	A10	洞窟の消失や環境悪化	人為的影響による洞窟の消失、もしくは環境悪化に起因する場合に適用する。 開発行為をはじめレジャー等による環境悪化も含む。
B 建設	B01	ゴルフ場	ゴルフ場の開発に起因する場合に適用する。
	B02	スキー場	スキー場の開発に起因する場合に適用する。
	B03	土地造成	場所を問わず特に土地造成の影響に起因する場合に適用する。 宅地化、リゾート開発等の土地の造成に伴うものを広義に含む。
	B04	交通インフラ建設	道路工事や鉄道工事等の交通インフラの建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 側溝への転落や生息場所の分断化、交通インフラ建設に起因する弊害も含む。自動車や鉄道等による交通事故は含まない。
	B05	ダム・河川工作物建設	ダム建設をはじめ、砂防ダム、堰堤、樋門、頭取工等の河川工作物による影響に起因する場合に適用する。
	B06	発電施設建設	太陽光や風力等の発電施設の建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 発電施設のみではなく、それらに関係する送電設備建設等の影響に起因するものも広義に含む。
C 環境汚染	C01	水質汚濁	河川、水路、ため池等の水域における水質汚濁に起因する場合に適用する。 状況や物質を問わず汚濁が原因と特定可能な全ての要因を含む。
	C02	水温変化	河川、水路、ため池等の水域における水温変化に起因する場合に適用する。 水温変化が原因と特定可能な場合のみ使用する。
	C03	農薬汚染/化学物質汚染	農地（水田、畑、果樹園等）及びその周辺域（水路、畦等）における農薬汚染に起因する場合に適用する。 水質汚濁の場合でも特に農薬汚染と特定できる場合はこちらを選択する。
	C04	感染症/病原菌	病原体に起因するもの。感染症に関わるものを広義に含む。
	C05	大気汚染	大気汚染に起因するもの。大気汚染が原因であると特定できる場合のみ適用する。

	新No	第5次RL	要因の適用範囲に係る説明
D 捕獲・採取	D01	捕獲・狩猟/園芸採取	人による捕獲・採取行為に起因する場合に適用する。 狩猟、ペット業者による商業的採集、園芸採取、研究者による採集等に関係する要因を広義に含む。
	D02	食用・薬用採取	食用や薬用採取に起因する場合に適用する。 食用や薬用を目的の採取に関わる要因を広義に含む。
	D03	違法採集	人による捕獲・採取行為に起因する場合のうち、違法性が疑われる場合に適用する。 D01, D02を選択した場合で、違法なものを含む場合は、本項目もチェックする。
	D04	混獲・錯誤捕獲	他種の捕獲・採取に付随した非意図的な捕獲・採取に起因する場合に適用する。 その他、混獲・錯誤捕獲に関係する要因を広義に含む。
E 生物間相互作用	E01a	シカ食害	シカによる食害に起因する場合に適用する。 食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E01b	その他動物食害	シカ以外の動物による食害に起因する場合に適用する。 食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E02a	捕食(外来種による)	外来種による捕食に起因するものに適用する。 国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物による捕食の影響に関するもの。
	E02b	捕食(在来種による)	在来種による捕食に起因するものに適用する。 環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、自然分布域において在来種による捕食の影響が増大した場合等が該当する。
	E03a	競争/競合(外来種による)	外来種との競争に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との競争による影響が該当する。
	E03b	競争/競合(在来種による)	在来種による競争に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との競争の影響が増大した場合等が該当する。
	E04a	交雑(外来種による)	外来種との交雑に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との交雑による影響に関するもの。
	E04b	交雑(在来種による)	在来種との交雑に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との交雑が生じるようになった場合等が該当する。
	E05	宿主の減少	寄生・共生性の生物において、宿主である生物の減少に起因している場合に適用する。 なお、宿主の存続を脅かす要因がわかる場合には、併せて宿主の要因も選択する。
F その他人為的要因	F01	人の踏みつけ	人による踏みつけ行為に起因するものに適用する。 場所や意図等は問わず、踏みつけに起因するものを広義に含む。
	F02	交通事故	自動車、鉄道等の轢死による直接的な事故のみに適用する。道路工事やトンネル建設等よる間接的な影響は、「交通インフラ建設」に含める。
	F03	人工構造物への衝突	風力発電施設の風車ブレード等への生物の衝突に起因する場合に適用する。 その他、送電線、鉄塔等の人工構造物への衝突に係るものを広義に含む。
	F04	光害	水銀灯等の照明器具の設置方法や配光によって、生物の行動パターン等に変化を与えていることに起因する場合に適用する。光害に関係する間接的な要因も広義に含む。
	F05	管理放棄	人為的な管理により維持されていた二次的自然の管理放棄に起因するもの。草地の遷移、ため池の湿地化、水田の放棄等に起因するものを広義に含む。
G 環境変化	G01	遷移進行・植生変化/自然遷移	河原、草地、森林、湿地等の場所は問わず、遷移進行、植生変化、自然遷移に起因する場合に適用する。
	G02	基質・基物の減少及び消失	対象生物の生息・生育に必要な基質・基物となる生物・無機物の減少や消失に起因する場合に適用する。 なお、基質・基物が生物であり、その生物種の存続を脅かす要因が分かる場合には、併せてその要因を選択する。
	G03	自然災害	集中豪雨による土砂崩れや洪水、地震、津波、火山噴火等のあらゆる自然災害に起因する場合に適用する。
	G04	気候変動	気温や水温の上昇、頻繁な異常気象等の気候変動が原因の可能性が高いと判断される自然現象に起因する場合に適用する。適用に際しては、存続を脅かす要因となる現象の長期的な動向を考慮した上で気候変動の影響か否かを判断する。
Z その他/不明	Z01	分布・産地局限	地史的に生息・生育地が局限しており、環境改変や自然災害等で容易に絶滅する危険を有する場合に適用する。
	Z02	近交弱勢	生息・生息地の局限や個体数の急減等による、近親交配、遺伝的多様性の低下に起因する場合に適用する。
	Z03	その他(自由記入)	上記のいずれにも当てはまらない場合に適用する項目。基本的には上記のいずれかの項目を広義に解釈して当てはめることが望ましい。選択する場合には、具体的な要因の名称を自由記入欄に記述する。なお、第5次レッドリストにおいて全分類群の結果を集計した際に、同じ名称の要因が複数確認された場合には、今後の追加を検討する予定である。
	Z04	不明	存続を脅かす要因が明確ではない場合に適用する。 原因が明確ではないもの、不明なものはこの項目を選択する。

第５次レッドデータブック（菌類）各種の解説

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae　　日本固有

ハハジマモリノカサ

Agaricus hahashimensis

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

林中の地上に生える。傘は黄色から赤黄色で、褐色繊維がある。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は孤生。傘は径約 8 cm、丸山形のち偏平となる。表面は黄色あるいは帯赤黄色で褐色繊維があり、中央部は暗色でやや無毛、周辺は淡色、縁に白色膜片がある。肉は白色で厚く柔軟、におい、味は良い。ヒダは離生、黒褐色となり密で便腹状。柄は約 9×0.8 cm、上方わずかに漸細し基部肥大、白色あるいは帯白色。ツバより上部はほとんど無毛、下部は繊維状小リン片を被り、基部ほとんど無毛、中空。ツバは上位で膜質、やや厚く白色、縁はやや二重、やや永存性。胞子は楕円形、円形あるいは広楕円形で平滑、5～7×3～4.5 µm。胞子紋は黒褐色。

【生活史】

秋に林地に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年に小笠原諸島母島北村～石門山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015：	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S.Ito & S.Imai	EX

第４次:	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第３次:	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S. Ito & S. Imai	EX
第２次:	ハハジマモリノカサ	*Agaricus hahashimensis* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 51.
- 伊藤誠哉，1959．ダイドウベニヒダタケ．日本菌類誌，2 (5): 291-292．養賢堂，東京.

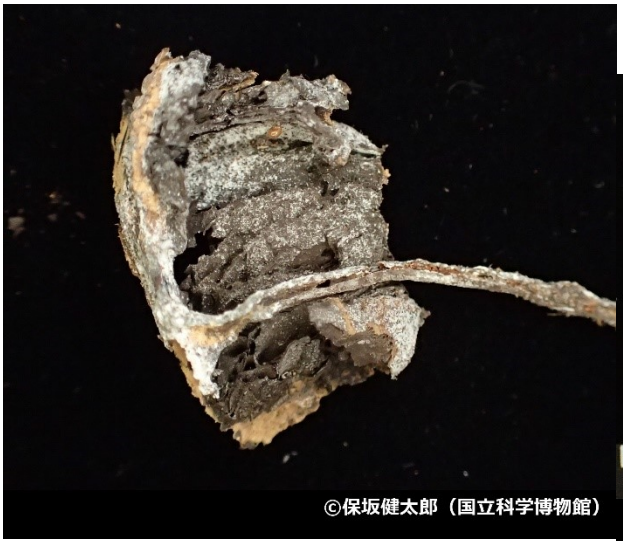
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Agaricus hahashimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Agaricus hahashimensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—





執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

スナタマゴタケ

Chlorophyllum agaricoides

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　②③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生育したことが確認されており､飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

具体的には、以下の事項を満たす。

②信頼できる複数の調査によっても、生育が確認できなかった。

③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。

【判断理由】

1930 年に国内における唯一の分布地である北海道小樽市銭函海岸から採集されて以来、再発見例が皆無である。2017 以降に北海道銭函海岸および周辺地域における複数回の野外調査を実施したものの、再発見には至っていない。海岸環境は植生を含め比較的良好に保たれているため、将来的に再発見される可能性は残されている。現状では標本の有無および近年の複数回調査における結果から、EX とするのが妥当である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

日本ではスナタマゴタケは 1930 年に小樽市銭函海岸の浜で発見されたのが唯一の記録である。生態の詳細については不明であり、その後の採集記録は一切ない。

基礎情報

【形態】

子実体は地上生。子実体の形態は変化に富み卵形～心臓形～円錐形、表面は幼時白色、成熟すると黄褐色から褐色となり、表面に発着した鱗片を持つ。子実体内部に殻皮に達する明瞭な柄（柱軸）を持つが、他のハラタケ類と異なり開傘しない。基本体は白色のち褐色、腔室は多少迷路状。担子胞子成熟後、子実体内部は粉状の胞子塊状となるが、子実層托はひだ状となり残る。担子胞子は類球形から球形、平滑、6.6~8 × 5.5~6.8 μm。胞子紋は淡黄褐色。

【生活史】

不明。

【生育環境】

砂質の海岸域。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】砂浜・礫浜　【海域_潮間帯】砂底・礫底, 泥底
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

1930 年に北海道小樽市銭函海岸で採集されたのが、国内における唯一の発見例である。海外では北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、中国など広い地域から報告されている。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	海岸開発, 分布・産地局限
	(現在)	海岸開発, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides* (Czern.) Vellinga	EX
第４次 2019：	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides* (Czern.) Vellinga	EX
第４次 2018：	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides* (Czern.) Vellinga	EX
第４次 2017：	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides* (Czern.) Vellinga	EX
第４次 2015：	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides* (Czern.) Vellinga [=	EX

		Endoptychum agaricoides Czern.]	
第４次:	スナタマゴタケ	*Chlorophyllum agaricoides* (Czern.) Vellinga [= *Endoptychum agaricoides* Czern.]	EX
第３次:	スナタマゴタケ	*Endoptychum agaricoides* Czern.	EX
第２次:	スナタマゴタケ	*Endoptychum agaricoides* Czern.Syn. *Secotium agaricoides* (Czern.) Hollos	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 本郷次雄，1991．セコチウム型菌について．神奈川きのこの会会報，13: 10-12．
- Imai, S., 1936. Symbolae ad Floram Mycologicam Asiae Orientalis. I. Bot. Mag., Tokyo, 50: 216-224.
- 伊藤誠哉，1961．スナタマゴタケ．日本菌類誌，2 (4): 580．養賢堂，東京．
- 折原貴道・保坂健太郎・山本航平・大前宗之・畠山颯太・糟谷大河，2020．環境省レッドリスト掲載地下生菌（スナタマゴタケ、ハハシマアコウショウロ、シンジュタケ）の再探索と分布の現状について．Truffology，3: 17‐27
- Serasini, M., 2005. *Endoptychum agaricoides* Czern. Gasteromiceti epigei, pp. 36-38. A. M. B. Fondazione Centro Studi Micologici, Vicenza.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chlorophyllum agaricoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chlorophyllum agaricoides* is listed as EX under criteria ②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy beach/Pebble beach 【Marine

	area_Intertidal zone】Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom
Threat types:	Coastal development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae　　日本固有

ムニンヒトヨタケ

Coprinus boninensis

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

腐った草に群生する白色のヒトヨタケ類のキノコ。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は群生。傘は径約 3 cm、開張し、やや中丘がある。表面は湿時わずかに粘性、中盤に渋色（黄褐色）の小リン片があり、周辺に褐色あるいは帯白色の繊維がある。肉は白色ではなはだ薄い。ヒダは離生、はじめ白色のち帯紫灰色あるいは褐黒色となり密ではなはだ薄く、液化する。柄は 5～8×0.3～0.6 cm、上方に漸細、繊維状細リン片を被り、中空。胞子は広楕円形あるいは類球形、平滑、紫褐色、約 7.5×5～6 μm。胞子紋は紫黒色。

【生活史】

秋、腐草上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年 11 月 12 日に小笠原諸島父島大村で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。また、記載が簡単なため、近縁種との異同について判断するための情報が不足している。タイプ標本 1 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX

第４次 2015：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第３次：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S. Ito & S. Imai	EX
第２次：	ムニンヒトヨタケ	*Coprinus boninensis* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 45-56.
- 伊藤誠哉，1959．ムニンヒトヨタケ．日本菌類誌，2 (5): 300．養賢堂，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Coprinus boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Coprinus boninensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

ムニンヒメカラカサタケ

Lepiota boninensis

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

林地に単独で生える。淡い汚桃色から淡黄白色のキノコで、傘の中央には褐色の小リン片があり、柄の基部は肥大する。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

傘は径 3～4 cm、丸山形で中丘がある。表面は乾燥、淡汚桃色から淡黄白色、栗褐色の小リン片を被る。中央部一様にリン片があるが、周辺にはこれを欠き線条がある。肉は白色あるいは灰色、薄い。ヒダは離生、白色のち退色し、密で、前方は広い。柄は 5～6×0.25～0.3 cm、上方にわずかに漸細し、基部は肥大する。柄の色は淡灰褐色～淡桃白色、粉状、中空。ツバは上位、膜質、細く、固定、淡灰褐色。胞子は楕円形、平滑、10～12.5×6～7.5 μm。胞子紋は白色。

【生活史】

秋、林内の地上に発生。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年 11 月 7 日に小笠原諸島父島連珠谷で採集された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015：	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S.Ito & S.Imai	EX

第３次:	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S. Ito & S. Imai	EX
第２次:	ムニンヒメカラカサタケ	*Lepiota boninensis* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands, III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 9-20.
- 伊藤誠哉，1959．ムニンヒメカラカサタケ．日本菌類誌，2 (5): 279．養賢堂，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lepiota boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lepiota boninensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　カヤタケ科 Clitocybaceae　　日本固有

ムニンヒメサカズキタケ

Clitocybe castaneofloccosa

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

暗い林地上に群生する黄褐色～ニッケイ色のキノコ。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体（キノコ）は群生あるいは叢生。傘は径 1～2 cm、丸山形のち開張偏平となり、さらに縁辺は反転する。表面は乾燥、黄褐色あるいは肉桂褐色の繊維状細リン被を被る。肉は水潤状褐色で薄い。ヒダは長く垂生、白色、のち退色、やや密、やや厚く、脆い。柄は 1.5～3×0.1～0.3 cm、多くは下方狭細、傘面とほとんど同色あるいは淡色、上部は白粉があり、下部はほとんど無毛、基部に白色粗毛があり、中実あるいは充塞。胞子は類球形あるいは卵形、平滑、径 3～4 μm。胞子紋は白色。

【生活史】

秋、林内地上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 2 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島扇村～連珠谷、袋沢村～木挽谷で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。また、記載が簡単なため、近縁種との異同について判断するための情報が不足している。タイプ標本 1 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S.Ito & S.Imai	EX

第４次 2017:	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015:	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S.Ito & S.Imai	EX
第４次:	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S.Ito & S.Imai	EX
第３次:	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S. Ito & S. Imai	EX
第２次:	ムニンヒメサカズキタケ	*Clitocybe castaneofloccosa* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands, III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 12.
- 伊藤誠哉，1959．ムニンヒメサカズキタケ．日本菌類誌，2 (5): 111．養賢堂，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Clitocybe castaneofloccosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clitocybe castaneofloccosa* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　カヤタケ科 Clitocybaceae　　日本固有

ハハノツエタケ

Collybia matris

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

暗い林のなかの腐木上に生える黄褐色の傘のキノコ。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体（キノコ）は孤生あるいは群生。傘は径 1.5～3.5 cm、丸山形のち偏平となる。表面は湿時わずかに粘性、周辺は淡黄褐色、中央は暗色、長い線条を有し、無毛、縁は類膜質。肉はやや薄い。ヒダは狭生、淡赤褐色、やや疎、便腹状。柄は約 4×0.3～0.4 cm、ほとんど同幅あるいは基部がわずかに肥大し、根状となって狭細する、黄橙色、紛状あるいはやや粗毛リン被があり、中空。胞子は長方形、平滑、無色、7.5～9×4～5 μm。胞子紋は白色。

【生活史】

暗い林内の腐朽材上から発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 2 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島袋沢村～木挽谷、母島沖村～桑ノ木山で採集され、1939 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。また、記載が簡単なため、近縁種との異同について判断するための情報が不足している。タイプ標本 2 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S.Ito & S.Imai	EX

第４次 2015：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S.Ito & S.Imai	EX
第３次：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S. Ito & S. Imai	EX
第２次：	ハハノツエタケ	*Collybia matris* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands, III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 16.
- 伊藤誠哉，1959．ハハノツエタケ．日本菌類誌，2 (5): 122．養賢堂，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Collybia matris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Collybia matris* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　チャヒラタケ科 Crepidotaceae　　日本固有

ムラサキチャヒラタケ

Crepidotus subpurpureus

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

林中の腐木上に群生する。紫色を帯び、傘はややフェルト状である。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は群生。傘は径 5～10×4～8 mm、半球形、扇形あるいは腎臓形。表面はやや丸山形で帯紫色、やや絨毛状、縁は内捲する。肉は白色、皮下は帯紫色、類肉質。ヒダは垂生あるいは直生、灰褐色、縁はやや紫色を呈し、房毛がある。柄は側生、長さ約 1 mm で厚肉、傘面と同色で絨毛がある。胞子は広楕円形あるいは類長方形、有疣、6～7.5×3.5～5 μm。胞子紋はさび色。

【生活史】

秋に林間腐木上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年に小笠原諸島母島北村～石門山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。近縁種との異同については、今後の研究が待たれる。タイプ標本 1 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムラサキチャヒラタケ	*Pyrrhoglossum subpurpureum* (S.Ito & S.Imai) E.Horak & Desjardin	EX
第４次 2019：	ムラサキチャヒラタケ	*Pyrrhoglossum subpurpureum* (S.Ito & S.Imai) E.Horak & Desjardin	EX
第４次 2018：	ムラサキチャヒラタケ	*Pyrrhoglossum subpurpureum* (S.Ito & S.Imai)	EX

		E.Horak & Desjardin	
第４次 2017：	ムラサキチャヒラタケ	*Pyrrhoglossum subpurpureum* (S.Ito & S.Imai) E.Horak & Desjardin	EX
第４次 2015：	ムラサキチャヒラタケ	*Pyrrhoglossum subpurpureum* (S.Ito & S.Imai) E.Horak & Desjardin [= *Crepidotus subpurpureus* S.Ito & S.Imai]	EX
第４次：	ムラサキチャヒラタケ	*Pyrrhoglossum subpurpureum* (S.Ito & S.Imai) E.Horak & Desjardin [= *Crepidotus subpurpureus* S.Ito & S.Imai]	EX
第３次：	ムラサキチャヒラタケ	*Crepidotus subpurpureus* S. Ito & S. Imai	EX
第２次：	ムラサキチャヒラタケ	*Crepidotus subpurpureus* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

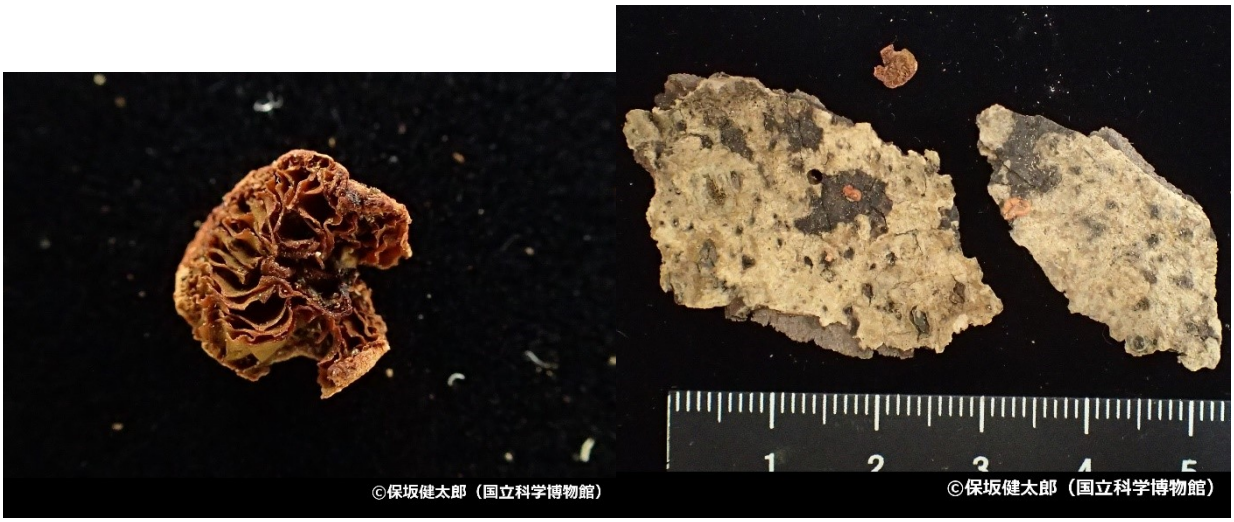
- Horak, E. and D. N. Desjardin, 2004. Two remarkable taxa of *Crepidotus* from Bonin Islands (Japan) and new records from the Hawaiian Islands and Papua New Guinea. In: Cripps CL, (ed.), Fungi in forest ecosystems, diversity and ecology, pp. 61-70. New York: The New York Botanical Garden.
- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 50-51.
- 伊藤誠哉，1959．ムラサキチャヒラタケ．日本菌類誌，2 (5): 429．養賢堂，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Crepidotus subpurpureus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Crepidotus subpurpureus* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct,

including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met. ③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　イッポンシメジ科 Entolomataceae　　日本固有

ムニンチャモミウラモドキ

Entoloma japonense

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

林中の地上に生えるキノコ。傘の表面に褐色の粉状リン被がある。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体（キノコ）は孤生。傘は径約 3 cm、圧低された丸山形で、のち開張する。表面は乾燥、褐色粉あるいは褐色紛状細リン片を被り、縁ははじめはなはだ内捲する。肉は白色、はなはだ薄い。ヒダは直生、はじめ白色のち肉色で疎、やや狭幅。柄は約 5×0.4 cm、ほとんど同幅で白色あるいは帯白色、繊維があり、頂部わずかに紛状、中空。胞子は楕円形で有稜、9～11×6.5～7.5 μm。シスチジアなし。

【生活史】

秋に林地に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年 11 月 12 日に小笠原諸島父島旭山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2019：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2018：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2017：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2015：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第３次：	ムニンチャモミウラモドキ	*Rhodophyllus brunneolus* (S. Ito & S. Imai) S. Ito	EX

第２次:	ムニンチャモミウラタケ	*Rhodophyllus brunneolus* (S. Ito et Imai) S. Ito	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 45-56.
- 伊藤誠哉，1959．ムニンチャモミウラタケ．日本菌類誌，2 (5): 437．養賢堂，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Entoloma japonense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Entoloma japonense* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヌメリガサ科 Hygrophoraceae　　日本固有

フタイロコガサタケ

Camarophyllus microbicolor

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　淡色でヒダがやや垂生するので他の *Camarophyllus* 属のものと区別される。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は群生あるいは孤生。傘は径 1 cm あるいはそれ以上に達し、丸山形のちに開張する。表面は乾燥、乳白色あるいは帯白色、平坦あるいはわずかにしわがあり、肉は白色、厚い。ヒダはわずかに垂生、やや疎、厚く淡肉桂色。柄は 1.5～2.5×0.1～0.15 cm、同幅あるいは基部肥大、白色、頂部白粉状、下部やや光沢がある。胞子は球形から卵形、平滑無色、5～6 μm。胞子紋は白色。

【生活史】

秋、林内地上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 3 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島扇村～連珠谷、袋沢村～木挽谷および母島北村～石門山で採集され、1939 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。また、記載が簡単なため、近縁種との異同について判断するための情報が不足している。タイプ標本 2 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S.Ito	EX
第４次 2019：	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S.Ito	EX
第４次 2018：	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S.Ito	EX
第４次 2017：	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S.Ito	EX
第４次 2015：	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S.Ito	EX

第４次:	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S.Ito	EX
第３次:	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* S. Ito	EX
第２次:	フタイロコガサタケ	*Camarophyllus microbicolor* (S. Ito et Imai) S. ItoSyn. *Hygrophorus bicolor* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 14.
- 伊藤誠哉，1959．フタイロコガサタケ．日本菌類誌，2 (5): 71-72．養賢堂，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Camarophyllus microbicolor has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Camarophyllus microbicolor* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—





執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヌメリガサ科 Hygrophoraceae　　日本固有

オオミノアカヤマタケ

Hygrocybe macrospora

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　傘の色が鮮やかな赤色のアカヤマタケ属のキノコで、胞子がとくに大きい（16～20×7.5～10 μm）のが特徴である。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は孤生あるいはやや群生。傘は径約 4 cm、円錐形、のち開張する。表面は乾燥あるいはやや粘性、中盤は緋色あるいは淡緋色、繊維状小リン片あるいは粗毛を有し、周縁は淡色で繊維があるか、あるいは裸出する。肉は橙黄色で外皮下は緋色、ヒダは湾入あるいは離生、白色、稜は黄色、疎、幅広く厚い。柄は 4～6×0.2～0.7 cm、同幅、白色、のち帯黄色、頂部は紛状、撓曲性、中空。胞子は楕円形から長方形、平滑、無色、16～20×7.5～10 µm。胞子紋は白色。

【生活史】

秋、林内地上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島旭山で採集され、1939 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。また、記載が簡単なため、近縁種との異同について判断するための情報が不足している。タイプ標本 1 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2019：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2018：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2017：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX

第４次 2015：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第３次：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S. Ito & S. Imai) S. Ito	EX
第２次：	オオミノアカヤマタケ	*Hygrocybe macrospora* (S. Ito et Imai) S. Ito	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands, III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 14.
- 伊藤誠哉，1959．オオミノアカヤマタケ．日本菌類誌，2 (5): 75．養賢堂，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hygrocybe macrospora has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hygrocybe macrospora* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヌメリガサ科 Hygrophoraceae　　日本固有

ムニンキヤマタケ

Hygrocybe miniatostriata

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　傘が鮮やかな橙黄色の小型のキノコ。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体（キノコ）は孤生あるいは群生。傘は径 1～2.5 cm、丸山形あるいは広類鐘形、表面は淡橙黄色～鮮橙黄色、粘性、長線条がある。ヒダは広湾生、傘面と同色あるいは淡色、密、厚い。柄は 2～3×0.1～0.3 cm、同幅、やや粘性、淡帯緑黄色～黄色、乾時光沢がある。胞子は楕円形から長方形、平滑、無色、7.5～10×5～6.5 µm。胞子紋は白色。

【生活史】

秋に、林内落葉間の地上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	（7）島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島袋沢村～木挽谷で採集され、1939 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。また、記載が簡単なため、近縁種との異同について判断するための情報が不足している。タイプ標本 1 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2019：	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2018：	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2017：	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2015：	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次：	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX

第３次:	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S. Ito & S. Imai) S. Ito	EX
第２次:	ムニンキヤマタケ	*Hygrocybe miniatostriata* (S. Ito et Imai) S. Ito	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, Ⅲ Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16:15.
- 伊藤誠也，1959．ムニンキヤマタケ．日本菌類誌，2(5): 85．養賢堂，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hygrocybe miniatostriata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hygrocybe miniatostriata* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヒメノガステル科 Hymenogasteraceae　　日本固有

オガサワラツムタケ

Gymnopilus noviholocirrhus

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　ムニンエノキの枯幹上に群生する。さび色で傘の中央に小刺がある。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は密に叢生。傘は径 4～10 cm、丸山形のち開張し、偏平あるいはやや中丘がある。表面は乾燥、湿時さび色、乾時淡色となる。中央に小刺を密布し、縁に繊維がある。肉は黄色あるいは帯黄色で厚く、においはなく、味は苦い。ヒダは広く狭生、後方広幅で密、広幅、類肉桂色。柄は 4～10×0.5～1 cm、同幅、基部はしばしば肥大する、肉桂色あるいは褐色で繊維があり、やや弾性があり曲性、充塞。胞子は楕円形で 6.5～8.5×5～6 μm、細疣があり、しばしば嘴状の突起がある。胞子紋はさび色。

【生活史】

秋に、ムニンエノキ枯幹上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）。1936 年に小笠原諸島母島沖村～桑ノ木山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	不明

特記事項

最初の採集（1936 年）後の採集記録はない。採集点数が少なく、形態、生理、生態的特徴の調査・記載が乏しい。近縁種との異同については、今後の研究が待たれる。タイプ標本 1 点の所在（北海道大学）が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S.Ito & S.Imai	EX

第４次 2015：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S.Ito & S.Imai	EX
第３次：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S. Ito & S. Imai	EX
第２次：	オガサワラツムタケ	*Gymnopilus noviholocirrhus* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 49.
- 伊藤誠哉，1959．オガサラワツムタケ．日本菌類誌，2 (5): 410-411．養賢堂，東京．

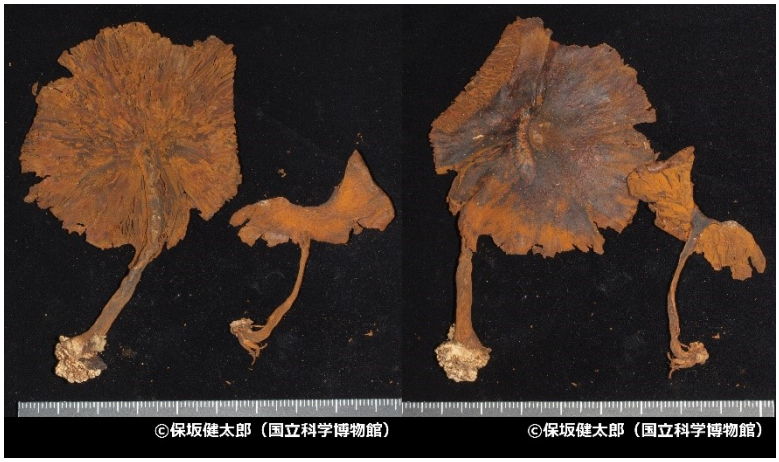
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gymnopilus noviholocirrhus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gymnopilus noviholocirrhus* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ホコリタケ科 Lycoperdaceae

コメツブホコリタケ

Lycoperdon henningsii

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　②③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生育したことが確認されており､飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
②信頼できる複数の調査によっても、生育が確認できなかった。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。
【判断理由】
日本では 1936 年に小笠原諸島の父島で採集されて以降、標本や、信頼しうる野外での生育の情報が得られていない。また、2000 年代以降、本菌の既知の産地である父島を含む小笠原諸島では、信頼しうる菌類相の調査が集中的に継続して、複数回行われているにもかかわらず、本菌の野外での生育に関する情報は得られていない。小笠原諸島以外の日本各地における信頼できる菌類相の調査によっても同様に、本菌の野外での生育に関する情報は得られていない。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は樹皮上に発生する微細なホコリタケ属菌で、1936 年に小笠原諸島の父島で採集されたが、その後の信頼しうる継続的な調査によっても発見例はない。

基礎情報

【形態】

子実体は小型で径 2.5～4.5 mm。表面は小さな疣または軟毛からなる白髪状の外皮に覆われ、成熟すると外皮が剥落して黄土色となり、紙質の内皮が露出する。胞子は球形、オリーブ褐色、平滑、1 油球を含み、3.2～3.5 μm、短い小柄を有する。

【生活史】

不明。

【生育環境】

父島で発見された子実体体はムニンヒメツバキ（*Schima mertensiana* (Siebold & Zucc.) Koidz.）の樹皮上より採集されたが、詳しい生育環境は不明。

生育環境区分：	【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では小笠原諸島の父島のみで 1936 年に採集されている。国外ではインドネシア（ジャワ島）、アフリカから知られている。

絶滅に至った経緯とその要因

土地造成や道路建設による発生適地の減少に加え、元々の局所的な分布が絶滅の原因であると考えられる。

要因の区分：	（過去）	土地造成, 交通インフラ建設, 分布・産地局限
	（現在）	土地造成, 交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P.Syd.	EX
第４次 2019：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P.Syd.	EX
第４次 2018：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P.Syd.	EX
第４次 2017：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P.Syd.	EX
第４次 2015：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P.Syd.	EX
第４次：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P.Syd.	EX
第３次：	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. & P. Syd.	EX

第２次:	コメツブホコリタケ	*Lycoperdon henningsii* Sacc. et P. Syd.	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series B, Botany, 44: 53-66.
- Kobayasi, Y., 1937. Fungi Austro-Japoniae et Micronesiae. II. Botanical Magazine, Tokyo, 51: 797-804.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lycoperdon henningsii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lycoperdon henningsii* is listed as EX under criteria ②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Land development, Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ホウライタケ科 Marasmiaceae　　日本固有

ムニンチヂミタケ

Campanella boninensis

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

膜質のヒラタケ型の小型のキノコで縮れた放射状のヒダを持っている。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は木材上に群生、束生ないし重生。傘は 5～14×5～8 mm、半球形、やや腎臓形、やや扇形、上方ないし側方で基物につく。凸形で放射状に脈があり、基部は髪茶色で、しばしば紛状、周縁部は淡色。肉は膜質、やや肉質、薄い。ヒダは、やや全体が同一色、放射状、やや直生で疎、縁は鈍角、基部は脈でつながる。胞子紋は白色、胞子は亜球形、平滑、6×5 μm。

【生活史】

秋、林内の枯幹上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島扇村～連珠谷で採集され、1939 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito & Imai) Imazeki & Hongo nom. nud.	EX
第４次 2019：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito & Imai) Imazeki & Hongo nom. nud.	EX
第４次 2018：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito & Imai) Imazeki & Hongo nom. nud.	EX
第４次 2017：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito & Imai) Imazeki	EX

		& Hongo nom. nud.	
第４次 2015：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito & Imai) Imazeki & Hongo nom. nud.	EX
第４次：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito & Imai) Imazeki & Hongo nom. nud.	EX
第３次：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S. Ito & Imai) Imazeki & Hongo nom. nud.	EX
第２次：	ムニンチヂミタケ	*Leptoglossum boninense* (S.Ito et Imai) Imazeki et Hongo (nom. nud.) Syn. Dictyolus *boninensis* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- 細矢剛・埋橋志穂美・保坂健太郎・工藤伸一，2016．日本産固有菌類目録の作成に向けて　生物多様性データベースを利用した日本固有のきのこリスト作成の試み．日本菌学会会報，57: 77-84.
- 今関六也・本郷次雄，1987．ムニンチジミタケ．原色日本新菌類図鑑 I，p. 85．保育社，大阪.
- Ito, S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands, III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 20.
- Parmasto, E., 1981. On the Asian species of the genus *Campanella* (Tricholomataceae: Collybieae). Nova Hedwigia, 34: 437-447.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Campanella boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Campanella boninensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met. ③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　チャダイゴケ科 Nidulariaceae　　日本固有

ムニンチャダイゴケ

Cyathus boninensis

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 1936 年に小笠原諸島父島で採集されて以来、再発見例がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

本種は 1936 年に小笠原諸島父島で採集されたが、その後の発見例はない。

基礎情報

【形態】

子実体は細長く、類円筒形か類釣り鐘型で、短い柄を有し、大きさ約 1 cm。外皮は暗褐色の毛状リン被からなり、小塊粒は黒みを帯び、径約 2 cm、平滑で光沢があり、通常は外皮に菌紐で付着。胞子は広楕円形か亜球形、平滑、15～25×12.5～22.5 µm、無色、厚壁。ハタケチャダイゴケ（*C. stercoreus*）と近縁と考えられるが、濃色でやや長軟毛を持つ外皮と被膜があり、胞子が小さめであることなどから別種にされている。

【生活史】

不明。

【生育環境】

腐朽木上に発生する以外には、詳しい生育環境は不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 草地　【陸域_海岸部】森林, 草地
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有。東京都小笠原諸島父島。

絶滅に至った経緯とその要因

土地造成、道路建設による発生適地の減少に加え、元々の局所的な分布が絶滅の原因であると考えられる。

要因の区分：	（過去）	土地造成, 交通インフラ建設, 分布・産地局限
	（現在）	土地造成, 交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

近縁種のカバイロチャダイゴケは同様の分布地で長らく絶滅種とされてきたが、2015 年に母島から再発見された。本種もタイプ地である父島および母島に広く分布している可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015：	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX

第４次:	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第３次:	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S. Ito & S. Imai	EX
第２次:	ムニンチャダイゴケ	*Cyathus boninensis* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- 細矢剛・埋橋志穂美・保坂健太郎・工藤伸一，2016．日本産固有菌類目録の作成に向けて　生物多様性データベースを利用した日本固有のきのこリスト作成の試み．日本菌学会会報，57: 77-84.
- Ito, S. and S. Imai, 1937. Fungi of the Bonin Islands, I. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 15: 8.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

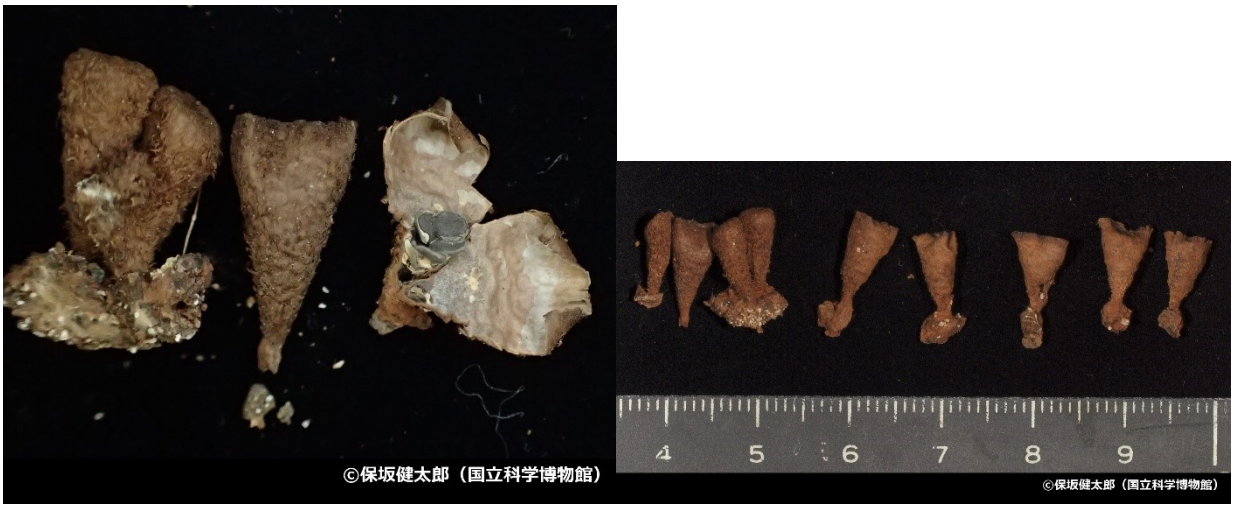
Cyathus boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyathus boninensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest, Grassland
Threat types:	Land development, Transportation infrastructure construction, Limited distribution

Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館） Kentaro Hosaka

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ウラベニガサ科 Pluteaceae　　日本固有

ダイドウベニヒダタケ

Pluteus daidoi

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

林中の地上に生える黄色のキノコで周辺部にオリーブ褐色の繊維がある。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は孤生。傘は約 7 cm 内外、丸山形のち開張、鈍頭な中丘がある。表面は湿時やや粘性、中央部帯黄色、無毛、周辺はオリーブ褐色の繊維がある。肉は白色、厚く、においおよび味なし。ヒダは離生から隔生、肉色で密。柄は約 7×0.6 cm、上方にわずかに漸細し基部わずかに肥大、白色で光沢があり、ほとんど無毛、中実。担子胞子は広楕円形、卵形あるいは球形、平滑、径 7.5～10 μm、あるいは 7.5～10×7.5～9 μm。胞子紋は肉色。シスチジアは類紡錘形あるいは便腹状。先端に鉤があって星芒状、無色、厚膜。

【生活史】

秋に林地に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年に小笠原諸島母島桑ノ木山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 管理放棄, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	（現在）	不明, 管理放棄, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015：	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S.Ito & S.Imai	EX

第３次:	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S. Ito & S. Imai	EX
第２次:	ダイドウベニヒダタケ	*Pluteus daidoi* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 45-56.
- 伊藤誠哉，1959．ダイドウベニヒダタケ．日本菌類誌，2 (5): 260．養賢堂，東京.
- Kobayashi, T. 2002. Type studies of the new species of *Pluteus* described by Seiya Ito and Sanshi Imai from Japan. Mycoscience, 43: 411-415.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pluteus daidoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pluteus daidoi* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	Unknown, Abandonment of management, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ウラベニガサ科 Pluteaceae　　日本固有

フサベニヒダタケ

Pluteus horridilamellus

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　傘は褐色の粉をふいたような淡黄色のキノコで、柄はよじれている。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は孤生。傘は径約 4 cm、丸山形のち偏平となり、やや中丘がある。表面は淡黄色、褐色粉を密布し、中心部に不規則のしわがある。縁に膜片あるいはやや粗豪の房毛がある。肉は白色、縁薄い。ヒダは離生、白色のち肉色で密、縁は黄褐色。柄は約 11×0.4 cm、上方にわずかに漸細、やや繊維があり、捩曲、鈍黄色。胞子は広楕円形、平滑、5～7.5×3～5 μm。胞子紋は肉色。シスチジアは便腹状、尖頭、無色から帯黄褐色。

【生活史】

秋に陰林腐木上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 点のみ。1936 年 11 月 18 日に小笠原諸島母島桑ノ木山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S.Ito & S.Imai	EX
第４次:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S.Ito & S.Imai	EX
第３次:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S. Ito & S. Imai	EX

第２次:	フサベニヒダタケ	*Pluteus horridilamellus* S. Ito et Imai	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 45-56.
- 伊藤誠哉，1959．フサベニヒダタケ．日本菌類誌，2 (5): 262．養賢堂，東京．
- Kobayashi, T. 2002. Type studies of the new species of *Pluteus* described by Seiya Ito and Sanshi Imai from Japan. Mycoscience, 43: 411-415.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pluteus horridilamellus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pluteus horridilamellus* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ナヨタケ科 Psathyrellaceae　　日本固有

オガサワライタチタケ

Psathyrella boninensis

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1936 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　地上に群生する。褐色のナヨタケ属のキノコ。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体は群生あるいはやや叢生。傘は径 3～5 cm、円錐形のち開張する。表面は吸水性、中部赤褐色、周辺湿時栗褐色、しわがあり粗面、縁は波状。肉は薄く、皮下淡小豆色で他は白色、においおよび味なし。ヒダは直生から狭生で密、狭幅、小豆色のち黒褐色。柄は 4～8×0.4～0.8 cm、同幅で帯白色から帯褐色の繊維状、捩曲、中空。胞子はレモン形から偏桃形、疣があり、8～10×5～6 μm。胞子紋はほとんど黒色。

【生活史】

秋、林地上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 1 地点のみ。1936 年 11 月 20 日に小笠原諸島母島石門山で採集され、1940 年に報告された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2019:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2018:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2017:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次 2015:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第４次:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito	EX
第３次:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S. Ito & S. Imai) S. Ito	EX

第２次:	オガサワライタチタケ	*Psathyrella boninensis* (S. Ito et Imai) S. Ito	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 45-56.
- 伊藤誠哉，1959．オガサワライタチタケ．日本菌類誌，2 (5): 307．養賢堂，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Psathyrella boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Psathyrella boninensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　タマチョレイタケ科 Polyporaceae　日本固有

ケガワタケ属の１種

Lentinus lamelliporus

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種 具体的には、以下の事項を満たす。 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。 【判断理由】 最初の採集（1902 年）後の採集記録がない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

1902 年に東京で記載されて以来採集されていないキノコ。絶滅したと考えられる。

基礎情報

【形態】

傘は、径 30～45 mm、丸山形で中央がくぼみ、表面は白色から淡紅褐色で平滑。ひだは蜜で垂生し、柄に近い部分では連絡脈ができて浅い菅孔状になる。柄は偏心生で短く 13～18 mm×8～10 mm、中実、表面は黄色みを帯びる。傘肉は薄い。菌糸組織は、生殖菌糸と結合菌糸からなる。担子胞子は円筒形、4.2～7×2.2～3 μm で、同属の他の菌よりも小さい。Hyphal peg は多い。

【生活史】

木材上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

1902 年に東京で採集され、新種記載されたが、それ以後の採集記録はない。絶滅したと考えられる。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

タイプ標本が確認された。疑問種ではない。所属、近縁種との異同については、今後の研究が待たれる。国内分布については文献データのみ。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX
第４次 2019：	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX
第４次 2018：	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX
第４次 2017：	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX
第４次 2015：	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX
第４次：	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX

第３次:	和名なし	*Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.	EX
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hariot, M. M. and N. Patouillard, 1902. Liste des champignons recoltes au Japon par M. le Dr. Harmand. Bull Mus. Nat. Hist., 8: 129-133.
- Pegler, D. N., 1983. The genus *Lentinus* : a world monograph, 52-53, HMSO, London.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lentinus lamelliporus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lentinus lamelliporus* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　ニンギョウタケモドキ科 Albatrellaceae　　日本固有

アミラッパタケ

Albatrellus cantharellus

カテゴリー判定結果　絶滅（EX）　③

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
具体的には、以下の事項を満たす。
③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。
【判断理由】
1914 年に宮城県から採集された標本に基づいて新種として記載された。その後の採集記録はない。外部形態から、一般に採集されづらい種とは言えず、絶滅したと判定される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種はニンギョウタケモドキ属の小型種で、漏斗型の子実体が特徴的である。仙台市内で採集された標本に基づいて記載された日本固有種であるが、新種記載以降の採集例がない。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄、漏斗型、全体の高さは 2～4.5 cm。傘は径 1.5～4 cm、円形、傘表面は淡黄色～淡褐色、乾燥後帯灰色、ビロード状。傘肉は白色、薄く脆い。子実層托は管孔状、孔口面は類白色。柄は中心性、円筒形、表面は類白色、長さ 1.5～3 cm、径 4～10 mm。担子胞子は短楕円形、アミロイド、4.7～6.6×4～5 µm。

【生活史】

子実体は一年生で短命と思われるが詳細は不明。

【生育環境】

林内の地上に発生。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

宮城県仙台市において 1914 年に採取された。

絶滅に至った経緯とその要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第４次 2019:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第４次 2018:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第４次 2017:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第４次 2015:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第４次:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第３次:	アミラッパタケ	*Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar	EX
第２次:	－	－	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano, M. A., T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 44: 53-66.
- 伊藤誠哉，1955．アミラッパタケ．日本菌類誌，2(4)，p331．養賢堂，東京.
- Pouzar, Z., 1975. Two rare Japanese species of the genus *Albatrellus* (Polyporaceae). Folia Geobot. Phytotax., Praha, 10: 197-203.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Albatrellus cantharellus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Albatrellus cantharellus* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae　日本固有

オオメシマコブ

Fulvifomes boninensis

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 100 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

現在の主要な発生基質であるオガサワラグワの古い切株の分解が進行しており、これらからの発生減少が継続していると推定される。その結果、本種の分布は「まとまったオガサワラグワ壮齢木が分布する地域」に集約しつつあり、個体群が交流できないほどに細分化されている状況にある。

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

宿主であるオガサワラグワが移入種であるアカギによって著しく減少した。現在の主要な発生基質である古い伐根は今後分解によって継続的に減少する。

評価分科会：　菌類分科会

概要

オオメシマコブはオガサワラグワ（絶滅危惧 IA 類）に特異的に発生し、小笠原諸島に分布が局限される。宿主の減少に伴い、本種も絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

子実体は多年生で、無柄。傘は半円形、丸山形～馬蹄形、表面はほぼ無毛、褐色～黒色、古くなるとひび割れる、幅は最大 15 cm、厚さは最大で 9 cm 程度。裏面は管孔状、孔口は 4～6 個/mm、黄褐色でやや金属様光沢をもつ。担子胞子の大きさは 5～6.5×3.5～4.5 μm。

【生活史】

子実体は多年生で数年に渡り成長する。生木の心材内や切株中で数十年生息すると見られる。

【生育環境】

小笠原諸島固有で、オガサワラグワに特異的に発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島の父島および母島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

小笠原諸島の父島および母島に分布する。現在、オガサワラグワの古い伐根上に見られる。

【生育地の現況】

宿主であるオガサワラグワが減少しており、今後も減少が予測される。

【個体数の現況】

減少していると考えられるが不明。

存続を脅かす要因

外来植物の移入に伴う宿主（オガサワラグワ）の減少、分布の局限。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, 宿主の減少
	（現在）	森林伐採, 分布・産地局限, 宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilát	CR+EN
第４次 2019：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilát	CR+EN
第４次 2018：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilát	CR+EN
第４次 2017：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilát	CR+EN
第４次 2015：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilát	CR+EN
第４次：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilát	CR+EN
第３次：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilat	CR+EN
第２次：	オオメシマコブ	*Phellinus rimosus* (Berk.) Pilat	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hattori T., Y. Ota, K. Sotome, 2022. Two new species of *Fulvifomes* (Basidiomycota, Hymenochaetaceae) on threatened or near threatened tree species in Japan. Mycoscience, 63: 131–141.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fulvifomes boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fulvifomes boninensis* is listed as CR under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Limited distribution, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae　日本固有

ヨコグラサルノコシカケ

Fulvifomes imazekii

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－
D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 現在、数本の宿主のみから確認されている。木材腐朽菌の成熟個体数は 1 宿主あたり 2 個体と概算される。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

本種はヨコグラノキに特異的に発生し、高知県横倉山のみから知られている。現存する個体数は極めて少ないと考えられる。

基礎情報

【形態】

子実体は多年生で、無柄。傘は半円形～不定形、平坦～丸山形、表面は黄褐色で短毛を持つが老熟すると褐色でほぼ無毛、幅は最大 20 cm、厚さは最大で 7 cm 程度。裏面は管孔状、孔口は 6～7 個/mm、黄褐色でやや金属様の光沢を持つ。担子胞子の大きさは 4.5～6.5×3.5～5 μm。

【生活史】

子実体は多年生で数年に渡って成長を続ける。生木の心材内で数十年生存すると考えられる。

【生育環境】

ヨコグラノキに特異的に発生する。材の白腐れを起こす。高知県越知町横倉山のみから分布が確認されている。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

最初の報告以降約 80 年間、横倉山以外からの記録はないが、横倉山からは継続的に分布が確認されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

高知県横倉山のみに分布する。現在、数本のヨコグラノキ上のみから確認されている。

【生育地の現況】

生育地は比較的安定している。

【個体数の現況】

数本の宿主のみから記録されており、成熟個体数は 50 以下と推定される。

存続を脅かす要因

分布が局限されており、さらに現存個体数が極端に少ないと見られる。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限，その他（極端に個体数が少ない）
	(現在)	分布・産地局限，その他（極端に個体数が少ない）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hattori T., Y. Ota, K. Sotome, 2022 Two new species of *Fulvifomes* (Basidiomycota, Hymenochaetaceae) on threatened or near threatened tree species in Japan. Mycoscience, 63: 131–141.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fulvifomes imazekii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fulvifomes imazekii* is listed as CR under criteria D.

D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Limited distribution, Other（極端に個体数が少ない）
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

ハラタケ目 Agaricales　フウリンタケ科 Cyphellaceae

フジイロアマタケ

Baeospora myriadophylla

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本菌は、特に関東地方では、暖温帯と冷温帯の移行域である中間温帯に立地するブナ・イヌブナ等からなる林内に局所的に分布するが、このような環境は森林伐採、植生遷移の進行、気候変動、ニホンジカの採食圧による植生への被害等の影響を受けやすく、生育地面積やその質、地点数について、継続的な減少が予測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

北海道、青森県、茨城県、神奈川県、奈良県の夏緑樹林において、これらの腐朽した材上に発生することが知られているが、各地域における分布は局所的で、かつ森林伐採や植生遷移の進行等による生育地の環境悪化に伴い、分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

かさは幼時は藤色を帯び、成熟するにつれて淡褐色を帯び、表面に白色のかすり状の模様を現し、条線を有する。かさの縁は幼時、内側に巻く。柄は藤色を帯びた淡褐色、表面に白色の微毛があり、基部には白色で綿毛状の菌糸塊が付着する。ひだは密、幼時藤色を帯び、のちに退色して淡褐色～ほぼ白色となる。担子胞子は広卵形～広楕円形で表面は平滑。

【生活史】

秋～冬（9～12 月）に子実体が発生する。

【生育環境】

ブナやイヌブナ等からなる夏緑樹林内において，これらの腐朽した材上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では北海道、青森県、茨城県、神奈川県、奈良県で記録があり、国外ではヨーロッパと北アメリカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道（支笏湖周辺），青森県（八甲田山），茨城県（八溝山地），神奈川県（丹沢山地）では 2000 年代以降に確認されている。奈良県（大台ケ原）の分布域の現況は不明である。本菌が主に生育する中間温帯域の夏緑樹林の多くは生育環境の消滅が懸念され、生存が著しく脅かされていると推察される。

【生育地の現況】

ブナやイヌブナ等からなる夏緑樹林内において、これらの腐朽した材上に発生する。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

本種はブナやイヌブナなどの腐朽木上を選好して発生するが、我が国における既知の分布域は北海道、青森県、茨城県、神奈川県、奈良県の夏緑樹林に局在しており、また本種の主要な生育地は森林伐採や植生遷移の進行等により継続的に減少・悪化していることから、本種は絶滅の危機に瀕している。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

	（現在）	森林伐採，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

茨城県[情報不足] 神奈川県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo T., 1974. Notes on Japanese larger fungi (21). Journal of Japanese Botany, 49: 294-305.
- 西村幹雄・藤澤示弘，2005．丹沢大山地域の大型菌類について．神奈川自然誌資料，26: 39-41．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Baeospora myriadophylla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Baeospora myriadophylla* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　タマバリタケ科 Physalacriaceae

ヤチヒロヒダタケ

Desarmillaria ectypa

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本菌は北日本や本州の冷涼な地域の休耕田や湿原に限定して発生するが、このような環境は開発、土地造成、交通インフラ建設、気候変動や植生遷移に伴う乾燥化等により継続的に減少・悪化しており、本種の生育地の面積や質は脆弱で、継続的な消失の危機に瀕している。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体の形態はナラタケに類似するが、柄につばを欠き、柄の基部が棍棒状に膨らみ、根状菌糸束を欠く。北海道と本州（青森県、新潟県、群馬県、京都府）の湿原や休耕田に特異的に発生することが知られているが、各地域における分布は局所的で、かつ開発、植生遷移に伴う乾燥化や気候変動等による生育地の環境悪化に伴い、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

かさは幼時はまんじゅう形、のちに開いて丸山形からほぼ平らとなり、表面は褐色から暗褐色の小鱗片に密におおわれて暗色、縁に向かうにつれて橙褐色、淡褐色あるいは黄白色、湿時は多少の粘性があり、半透明の条線を有する。かさの縁は幼時、内側に巻き、かさが開くと多少波打ち、時に多少反り返る。柄はかさとほぼ同色、繊維状、中空、しばしば屈曲し、時にねじれ、つばを欠き、基部は棍棒状に膨らみ、根状菌糸束を欠く。ひだはやや密、柄に直生あるいは湾生、時にやや垂生、ほぼ白色あるいは淡黄色～淡褐色。担子胞子は卵形～楕円形で表面は平滑、厚壁。

【生活史】

秋に子実体が発生する。日本（北海道、青森県、新潟県、群馬県、京都府）、ヨーロッパに分布するが、国内では現在は北海道と新潟県内の休耕田や湿原のみから知られている。

【生育環境】

北日本あるいは本州の冷涼な地域のミズゴケ属、スゲ属やヨシ等の植物を伴った湿原や水田跡地に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】湿地・湿原・細流　【陸域_平地部】耕作放棄地, 湿地・湿原
国土地域区分：	（1）奥山自然地域,（2）里地里山・田園地域,（4）河川・湿地地域

【分布域】

国内では北海道、青森県、新潟県、群馬県、京都府で記録があり、国外ではヨーロッパに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

既存の生息地は北海道函館市（科博収蔵標本）、青森県青森市、五所川原市、六ケ所村（工藤・長澤、2003）、新潟県上越市の 2 地点（糟谷ら、2017）、新潟県妙高市（丸山・糟谷、未発表データ）、群馬県尾瀬（Hongo, 1959）、京都府八丁平（折原、2007）である。このうち、青森県では 2020 年以降に実施された現地調査の結果、開発等により発生環境が消失したことが確認された。また、過去に標本が得られている京都府の生育地点では、近年の生育状況に関する調査の結果、新たな標本記録が得られていない。群馬県の生育地点からも近年の標本記録はなく、発生環境の現況も不明である。現存する生育地は北海道函館市、新潟県上越市、妙高市であるが、いずれの生息地も分断され局在している。

【生育地の現況】

北日本あるいは本州の冷涼な地域のミズゴケ属、スゲ属やヨシ等の植物を伴った休耕田や湿地に限定して発生する。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

本種は北日本や本州の冷涼な地域の休耕田や湿原に限定して発生するが、我が国における既知の分布域は局在しており、またその主要な生育地である湿地は開発、土地造成、交通インフラ建設や植生遷移の進行に伴う乾燥化等により継続的に減少・悪化しており、本種は絶滅の危機に瀕している。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤチヒロヒダタケ	*Desarmillaria ectypa* (Fr.) R.A. Koch & Aime	VU
第４次 2019：	ヤチヒロヒダタケ	*Desarmillaria ectypa* (Fr.) R.A. Koch & Aime	CR+EN
第４次 2018：	ヤチヒロヒダタケ	*Desarmillaria ectypa* (Fr.) R.A. Koch & Aime	CR+EN
第４次 2017：	ヤチヒロヒダタケ	*Desarmillaria ectypa* (Fr.) R.A. Koch & Aime	CR+EN
第４次 2015：	ヤチヒロヒダタケ	*Armillaria ectypa* (Fr.) Lamoure	CR+EN
第４次：	ヤチヒロヒダタケ	*Armillaria ectypa* (Fr.) Lamoure	CR+EN
第３次：	ヤチヒロヒダタケ	*Armillaria ectypa* (Fr.) Lamoure	CR+EN
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[最重要希少野生生物（A ランク）] 京都府[絶滅寸前種]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 糟谷大河，丸山隆史，布施公幹，保坂健太郎，箕輪一博，2017．新潟県で新たに発見された湿原生きのこ，ヤチヒロヒダタケ *Desarmillaria ectypa*．柏崎市立博物館館報，31: 99-108．
- Kobayasi Y, 1954. Sphagnicolous fungi found in the Ozegahara moor. In Scientific researches of the Ozegahara moor. Edited by Y. Ogura., pp. 553-560.
- 長沢栄史，工藤伸一，2003．青森県で再発見されたヤチヒロヒダタケ *Armillaria ectypa* について．菌蕈研究所研究報告，41: 26-34．
- 折原貴道，2007．京都市八丁平湿原とその集水域における大型菌類の分類，種組成，および季節的発生消長．日本菌学会第 51 回大会講演要旨集，p. 47，日本菌学会，つくば．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Desarmillaria ectypa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Desarmillaria ectypa* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Abandoned farmland, Wetland
Threat types:	Wetland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　ショウロ科 Rhizopogonaceae　　日本固有

トガサワラショウロ

Rhizopogon togasawarius

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

本菌は、集団間での遺伝的分化係数（G'st）は 0.3 以上であり、集団間での遺伝子流動がほとんどないことが示されている。本菌は胞子分散を小動物による摂食に依存しているため、長距離の分散には強い制限があり、隔離された小集団内で近親交配が進行し、絶滅に至るリスクが増大していると推定される。

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

本菌はトガサワラと特異的に菌根を形成し、宿主特異性が高い。その宿主樹木であるトガサワラは日本固有で、紀伊半島（三重県・奈良県・和歌山県）と四国東部（高知県）の一部にのみ局所分布し、現存するその総個体数は約 2000 本と推定されている。本菌の分布も宿主樹木であるトガサワラの分布に強く依存するが、トガサワラは更新・成長が遅く、かつ老木が衰退傾向にあり、その生育地においては継続的に減少し続けていると推定されている。このため、宿主樹木の継続的な減少に伴って、本菌の生育数の継続的減少が推測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は地下生～半地下生で、球形～扁球形。殻皮は白色～灰褐色で、触れたりこすったりすると赤色に変化する。殻皮の表面の一部には褐色の菌糸束が付着する。三重県、奈良県、和歌山県、高知県のトガサワラが自生する地点に局所的に分布し、トガサワラと特異的に外生菌根を形成して共生する。宿主樹木であるトガサワラの継続的な減少に伴い、本菌の分布域や生育数も継続的に減少することが懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体は地下生～半地下生で、球形～扁球形、基部に褐色の菌糸束を有する。殻皮は幼時白色、成長に伴い灰褐色となり、表面を指で触れたりこすったりした部分は赤色に変化し、変色した部分は緑がかった茶色～赤褐色に変化し、斑点状となる。殻皮の表面は乾燥すると赤ワイン色になる。殻皮表面の一部には褐色を帯びる菌糸束が付着する。基本体は子実体の内部に充満し、微細な腔室からなり、幼時は白色、成熟するにつれて黄褐色～さび褐色となる。担子胞子は楕円形～長楕円形で表面は平滑。

【生活史】

詳細については不明であるが、本菌は胞子分散を小動物による摂食に依存しているため、長距離の分散は強く制限される。トガサワラ林では、本菌の埋土胞子が土壌中に優占して存在することが明らかになっており、本菌は埋土胞子により長期間生存するとともに、トガサワラの実生にいち早く菌根を形成し、実生の更新に中心的な役割を果たしていると考えられている。夏（6～7 月）に子実体が発生する。

【生育環境】

トガサワラと特異的に外生菌根を形成して共生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

三重県、奈良県、和歌山県、高知県。トガサワラが自生する地点にのみ局所的に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

三重県、奈良県、和歌山県、高知県のトガサワラ自生地にのみ局所的に分布する。

【生育地の現況】

三重県、奈良県、和歌山県、高知県のトガサワラ自生地にのみ分布するが、いずれの生育地においても、宿主樹木であるトガサワラは更新や成長が遅く、老木が衰退傾向にある。

【個体数の現況】

詳細については不明であるが、集団間での遺伝子流動がほとんどないことが示されており、遺伝的多様性の乏しい小集団が地理的に隔離されることで近親交配が進行し、個体群の維持を困難にしつつあると推定される。

存続を脅かす要因

過去の森林伐採、現在も継続している老木の衰退の進行や、更新や成長が遅いことに伴う宿主樹木の減少。さらに、宿主樹木の分布が局在していることに伴う分布・産地局限。		
要因の区分：	（過去）	分布・産地局限，宿主の減少
	（現在）	森林伐採，分布・産地局限，宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	―	―	―
第４次 2019：	―	―	―
第４次 2018：	―	―	―
第４次 2017：	―	―	―
第４次 2015：	―	―	―
第４次：	―	―	―
第３次：	―	―	―
第２次：	―	―	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

和歌山県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mujic, A. B., Hosaka, K., Spatafora, J. W., 2014. *Rhizopogon togasawariana* sp. nov., the first report of *Rhizopogon* associated with an Asian species of *Pseudotsuga*. Mycologia, 106: 105-112.
- Murata, M., Nagata, Y., Nara, K., 2017. Soil spore banks of ectomycorrhizal fungi in endangered Japanese Douglas-fir forests. Ecological Research, 32: 469-479.
- 奈良一秀，2020．絶滅危惧樹木の保全に不可欠な菌根菌の系統分類と菌株コレクションの構築．発酵研究所研究報告，34: 3-15．

- 折原貴道，2019．トガサワラショウロ *Rhizopogon togasawariana* の和歌山県における初記録．Truffology，2: 18-19．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rhizopogon togasawarius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rhizopogon togasawarius* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest
Threat types:	Limited distribution, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　ショウロ科 Rhizopogonaceae　　日本固有

ヤクタネショウロ

Rhizopogon yakushimensis

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

本菌は、集団間での遺伝的分化係数（G'st）が宿主樹木であるヤクタネゴヨウのものよりもさらに高い値を示し、集団間での遺伝子流動がほとんどないことが示唆されている。本菌は胞子分散を小動物による摂食に依存しているため、長距離の分散には強い制限があり、隔離された小集団内で近親交配が進行し、絶滅に至るリスクが増大していると推定される。

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

本菌はヤクタネゴヨウと特異的に菌根を形成し、宿主特異性が高い。その宿主樹木であるヤクタネゴヨウは日本固有で、鹿児島県（屋久島・種子島）の一部にのみ局所分布し、現存するその総個体数は約 2300 本（屋久島に 2000 本，種子島に 300 本）と推定されている。本菌の分布も宿主樹木であるヤクタネゴヨウの分布に強く依存するが、ヤクタネゴヨウはマツ材線虫病の蔓延による枯死の進行や、近親交配の進行による更新の停滞に伴い、その生育地においては個体数が激減している。このため、宿主樹木の継続的な減少に伴って、本菌の生育数の継続的減少が推測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は地下生で、類球形～長楕円形。殻皮は幼時白色、成熟すると黄褐色～褐色となり、水酸化カリウム水溶液を滴下すると暗赤色に変化する。殻皮の表面には橙色～暗褐色の分枝した菌糸束が密に付着する。鹿児島県（屋久島・種子島）のヤクタネゴヨウが自生する地点に局所的に分布し、ヤクタネゴヨウと特異的に外生菌根を形成して共生する。宿主樹木であるヤクタネゴヨウの継続的な減少に伴い、本菌の分布域や生育数も継続的に減少することが懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体は地下生で、類球形～長楕円形、基部に褐色の菌糸束を有する。殻皮は幼時白色、成長に伴い黄褐色～褐色となり、表面に水酸化カリウム水溶液を滴下すると暗赤色に変化する。殻皮の表面には橙色～暗褐色を帯びる分枝した菌糸束が密に付着する。基本体は子実体の内部に充満し、微細な腔室からなり、幼時は白色、成熟するにつれて黄土色～褐色となる。担子胞子は類球形～狭楕円形で表面は平滑。

【生活史】

詳細については不明であるが、本菌は胞子分散を小動物による摂食に依存しているため、長距離の分散は強く制限される。ヤクタネゴヨウ林では、本菌の埋土胞子が土壌中に優占して存在することが明らかになっており、本菌は埋土胞子により長期間生存するとともに、ヤクタネゴヨウの実生にいち早く菌根を形成し、実生の更新に中心的な役割を果たしていると考えられている。夏（6 月）に子実体が発生する。

【生育環境】

ヤクタネゴヨウと特異的に外生菌根を形成して共生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

鹿児島県（屋久島、種子島）。ヤクタネゴヨウが自生する地点にのみ局所的に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

鹿児島県（屋久島、種子島）のヤクタネゴヨウ自生地にのみ分布する。

【生育地の現況】

鹿児島県のヤクタネゴヨウ自生地にのみ分布するが，いずれの生育地においても、宿主樹木であるヤクタネゴヨウはマツ材線虫病の蔓延による枯死の進行や、近親交配の進行による更新の停滞に伴い個体数が激減している。

【個体数の現況】

詳細については不明であるが、集団間での遺伝子流動がほとんどないことが示されており、遺伝的多様性の乏しい小集団が地理的に隔離されることで近親交配が進行し、個体群の維持を困難にしつつあると推定される。

存続を脅かす要因

過去の森林伐採や、現在も継続しているマツ材線虫病の蔓延による枯死の進行、近親

交配の進行による更新の停滞に伴う宿主樹木の個体数の激減。さらに、宿主樹木の分布が局在していることに伴う分布・産地局限。		
要因の区分：	（過去）	分布・産地局限，宿主の減少
	（現在）	森林伐採，分布・産地局限，宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 奈良一秀，2020．絶滅危惧樹木の保全に不可欠な菌根菌の系統分類と菌株コレクションの構築．発酵研究所研究報告，34: 3-15．
- Sugiyama, Y., Murata, M., Nara, K., 2018. A new *Rhizopogon* species associated with *Pinus amamiana* in Japan. Mycoscience, 59: 176-180.
- Sugiyama, Y., Murata, M., Kanetani, S., Nara, K., 2019. Towards the conservation of ectomycorrhizal fungi on endangered trees: native fungal species on *Pinus amamiana* are rarely conserved in trees planted ex situ. Mycorrhiza, 29: 195-205.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rhizopogon yakushimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rhizopogon yakushimensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Limited distribution, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

スッポンタケ目 Phallales　スッポンタケ科 Phallaceae

アカダマスッポンタケ

Phallus hadriani

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
北海道石狩市では風力発電施設建設、北海道斜里町では港湾施設建設の影響により、生育地の面積や質が継続的に減少する可能性がある。

評価分科会：　菌類分科会

概要

北海道および新潟県の砂浜海岸に発生することが知られているが、各地域における分布は局地的で、かつ土地開発などによる生育地の環境悪化が進行し、それに伴い分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

菌蕾は類球形～卵形、初め白色、空気に触れると紫色～赤褐色に変色する。成熟するにつれて高さ 11～22 cm 程度で、類白色～クリーム色、海綿状の托が伸長する。托の上部に円錐形～釣鐘形で、高さ 3～4 cm の傘を備え、傘の表面は網目状で頂部は截断状。傘の表面にはオリーブ色～黒褐色の粘液状のグレバが付着し、刺激臭を発する。属の基種であるスッポンタケとは、菌蕾が紫色～赤褐色を帯びるか否かにより明確に区別できる。

【生活史】

夏～秋（6～11 月）、特に 6～7 月と 9～11 月の 2 回、子実体が発生する。

【生育環境】

ハマニンニク、コウボウムギやハマニガナなどの海浜植物が繁茂する砂浜海岸に、夏～秋に単生～群生する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	（5）沿岸域

【分布域】

日本では東京都の小石川植物園で初めて発見され、その後新潟県長岡市、および北海道石狩市、斜里町の砂浜海岸から記録されている。国外ではヨーロッパ、北アフリカ、アジア、北アメリカなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布が局在しており、北海道石狩市では風力発電施設建設、北海道斜里町では港湾施設建設の影響により、自然で良好な砂浜海岸の環境が減少、悪化していることに伴い、今後消滅する可能性が危惧される。

【生育地の現況】

海浜植物が繁茂する自然で良好な砂浜海岸に分布が限られるが、そのような環境は開発や海岸侵食などによる影響を受けており、現在知られている発生地の環境が継続的に改変され失われれば消滅が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成、植生遷移の進行や植生変化、基質となる海岸植物の減少などに起因した産地局限。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限，基質・基物の減少及び消失
	（現在）	海岸開発，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限，基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	EN
第４次 2019：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	CR+EN
第４次 2018：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	CR+EN
第４次 2017：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	CR+EN
第４次 2015：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	CR+EN
第４次：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	CR+EN
第３次：	アカダマスッポンタケ	*Phallus hadriani* Vent.	CR+EN
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 糟谷大河・竹橋誠司・山上公人，2007．日本から再発見された 3 種のスッポンタケ属菌．日本菌学会会報，48: 44-56.
- 糟谷大河・内田暁友・保坂健太郎，2015．北海道東部の海浜から新たに発見されたアカダマスッポンタケ．知床博物館研究報告，37: 13-19.
- 糟谷大河・丸山隆史・布施公幹・保坂健太郎・箕輪一博，2016．新潟県の海浜より再発見されたアカダマスッポンタケ．柏崎市立博物館館報，30: 97-104.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phallus hadriani has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phallus hadriani* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—





執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

スッポンタケ目 Phallales　スッポンタケ科 Phallaceae

アカダマノオオタイマツ

Phallus rubicundus

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
福島県の生育地は、防潮堤の建設により今後消滅する可能性が高いと推測される。静岡県や富山県の生育地においても、海岸侵食が進んでおり、救済策をとらなければ継続的な減少が推定される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は赤色の托（高さ 15～28 cm）を持つ。福島県、茨城県、静岡県や富山県などの砂浜海岸に分布するが、各地域における分布は局地的で、かつ土地開発や海岸侵食などによる生育地の環境悪化による分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

菌蕾は卵形～長楕円形、表面は平滑、類白色～クリーム色であるが、空気に触れると赤色となる。托は伸長すると高さ 15～28 cm で円筒状、表面は海綿状で濃赤色～淡い赤色、基部はクリーム色～黄白色。托の上部に釣鐘形で高さ 3～4.5 cm の傘を備え、傘の頂部は尖るかやや截断状、托上部とほぼ同色。傘の表面にはオリーブ色～黒褐色の粘液状のグレバが付着し、強い刺激臭を発する。

【生活史】

日本においては主に海岸の砂地に初夏～秋（5～11 月）に発生するが、国外では森林内などの腐植上からも報告があり、詳しい生活史は不明。

【生育環境】

コウボウシバやコウボウムギなどの海浜植物が繁茂する砂浜海岸に、初夏～秋に単生～散生する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

日本では福島県、茨城県、静岡県、富山県などのごく限られた地域の砂浜海岸に分布する。国外では北アメリカ、アフリカ、オセアニア、パキスタン、タイ、台湾、中国などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布が局在しており、自然で良好な砂浜海岸の開発や海岸侵食による急激な減少、悪化に伴い消滅が懸念される。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は開発や海岸侵食による影響を受けており、現在知られている発生地の環境が継続的に改変され失われれば消滅が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成などに起因した産地局限。

要因の区分：	（過去）	海岸開発, 土地造成, 分布・産地局限
	（現在）	海岸開発, 土地造成, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第４次 2019:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第４次 2018:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第４次 2017:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第４次 2015:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第４次:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第３次:	アカダマノオオタイマツ	*Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.	VU
第２次:	－	－	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 大阪府[CR+EN]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 糟谷大河・竹橋誠司・山上公人，2007．日本から再発見された 3 種のスッポンタケ属菌．日本菌学会会報，48: 44-56.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phallus rubicundus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phallus rubicundus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy
(iii) area, extent and/or quality of habitat
(iv) number of locations or subpopulations
(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　タマチョレイタケ科 Polyporaceae　日本固有

ワニスタケ

Microporus ochrotinctus

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B1．出現範囲が 5000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
主要な生育地は、父島中央部および母島中央部の湿潤な森林であるが、これらの地域ではアカギの侵入による原生植生の劣化、及びアカギ駆除による林内環境の変化（乾燥）が認められ、今後も継続的な減少が予測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は現時点で小笠原諸島の固有種と考えられている。父島および母島の湿潤な森林内で比較的普通に見られるものの、これら地域では生育環境の劣化が進んでいる。

基礎情報

【形態】

子実体は一年生で側面に柄を持つ～ほとんど無柄。傘表面は淡褐色～茶色でやや光沢がある。傘肉はコルク質で類白色。

【生活史】

子実体は一年生。比較的小径の枯枝などに発生することが多く、基質からの子実体発生継続は数年程度までと見られる。

【生育環境】

小笠原諸島父島および母島の比較的湿潤な老齢林を中心に分布する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

基準標本は小笠原諸島において 19 世紀に採取されたものである。1910 年代より小笠原諸島で継続的に採取されている。南西諸島から採取された類似標本もワニスタケとされてきたが、予備的な調査の結果これらは別種に属することがわかった。現時点ではワニスタケは小笠原諸島のみに分布するものと判断する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

小笠原諸島父島、母島の比較的湿潤な老齢林などに分布する。父島中央山付近、母島境が岳や石門などでは比較的普通に見られる。

【生育地の現況】

主要分布地、特に母島ではアカギの侵入により著しい環境劣化が進んでいる。本種の宿主範囲は現時点で不明であり、移入種であるアカギなどを宿主とするかは不明。

【個体数の現況】

湿潤な老齢林の劣化により減少している可能性があるが、不明。

存続を脅かす要因

移入種であるアカギ林の拡大、アカギ伐採による森林の乾燥。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限，宿主の減少
	（現在）	森林伐採，分布・産地局限，宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M.A.Curtis) Kuntze	NT
第４次 2019：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M.A.Curtis) Kuntze	NT
第４次 2018：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M.A.Curtis) Kuntze	NT
第４次 2017：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M.A.Curtis) Kuntze	NT
第４次 2015：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M.A.Curtis) Kuntze	NT
第４次：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M.A.Curtis) Kuntze	NT
第３次：	ワニスタケ	*Microporus ochrotinctus* (Berk. & M. A. Curtis) Kuntze	NT
第２次：	ワニスタケ	*Coriolus ochrotinctus* (Berk. et M. A. Curtis) Aoshima (nom. nud.) Syn. *Trametes marianna* (Pers.) Ryv.	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 文献なし

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Microporus ochrotinctus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Microporus ochrotinctus is listed as EN under criteria B1ab. B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c: a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Limited distribution, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　マンネンハリタケ科 Echinodontiaceae

コウヤクマンネンハリタケ

Echinodontiellum japonicum

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab C2a (i)

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　EN	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
ダム建設による生育地破壊が認められる。カシ枯れによるカシ類大径木の減少、衰弱が強く予測される。

C．個体群の成熟個体数が 2500 未満であると推定され、且つ
【推定根拠】
木材腐朽菌は 1 基質を 2 成熟個体で概算する（DahlBerg and Mueller, 2011）。今後調査が進んでも 1250 以上の基質から確認されるとは考えにくい。
2．成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、
【判断理由】
近年ダム建設により確実な生育地破壊が行われた。該当地域においてナラ枯れによる宿主の枯死・衰弱が認められ、今後も継続が危惧される。

かつ次に該当
a) 個体群構造が次に該当
i)250 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。
【判断理由】
既知の生育地ではいずれも数本の宿主しか記録されておらず、いずれも 250 以上の成熟個体は存在しないと推測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

1933 年に奈良県（春日神社裏山）で発見され、1938 年に宮崎県でも採集された。奈良県では 1976 年に再発見されたが、それ以降の記録はない。2000 年以降、宮崎県内で分布が確認されているが、しかし、その後は 1976 年にタイプ産地で再度採集されたのみであ

り、極めてまれな種である。国外では 1977 年にインド北西部に分布していることが報告され、日本とヒマラヤとの生物地理学的関連を示す菌として注目される。

基礎情報

【形態】

カシ類の枯れ枝上にほとんど背着生のキノコを生じる。不規則に拡がり、周縁部はしばしば反転して狭い傘を作る。傘の表面は黒色、肉は木質で肉桂色、子実層面は針状で灰白色、針は長さ 4～10 mm である。コメツガ、ツガおよびモミの生立木に寄生するマンネンハリタケ（*Echinodontium tsugicola* (Henn. &. Shirai) Imazeki）と類似するが、基質の違いによって容易に区別できる。

【生活史】

不明。

【生育環境】

アラカシ、ツクバネガシなどのカシ類の枯れ木上に発生し、材の白腐れを起こす。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内の確実な記録は、奈良県春日山、宮崎県小林市、綾町。京都府からの記録は再検討の必要がある。国外ではインドおよび中国（福建省武夷山）からの報告があるが、少なくともインドからの報告の一部は誤同定の可能性がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

現在、宮崎県小林市および綾町内の、狭い範囲のツクバネガシ、アカガシなどの生育する照葉樹老齢林から記録されている。奈良県では 1976 年以降の採集記録がない。

【生育地の現況】

2000 年以降確認された生息地のうち 1 箇所はダム建設によって破壊された。宮崎県ではナラ枯れ被害が拡大しており、生息地近辺でもカシ類大径木の枯損が発生している。

【個体数の現況】

近年の記録は宮崎県下の 3 箇所。それぞれ 1 から数本の倒木などが宿主として確認されている。成熟個体数は 2500 未満と推測される。

存続を脅かす要因

カシ類が生育している森林の伐採などによる生育環境の悪化および生育場所の減少。

要因の区分：	（過去）	ダム・河川工作物建設, 宿主の減少
	（現在）	森林伐採, ダム・河川工作物建設, 宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第４次 2019:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第４次 2018:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第４次 2017:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第４次 2015:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第４次:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第３次:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第２次:	コウヤクマンネンハリタケ	*Echinodontium japonicum* Imazeki	CR+EN
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也，1989．コウヤクマンネンハリタケ．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 II，p110-111．保育社，大阪．
- Liu S. L., Y. Zhao, Y. C. Dai, K. N. Nakasone, and S. H. He, 2017. Phylogeny and taxonomy of *Echinodontium* and related genera. Mycologia, 109: 568-577.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Echinodontiellum japonicum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Echinodontiellum japonicum* is listed as EN under criteria B2ab C2a (i).

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and either:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals AND at least one of the following (a-b):

a. Population structure in the form of one of the following:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 250 mature individuals, OR

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Dam/River structures construction, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	―

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

チャワンタケ目 Pezizales　キリノミタケ科 Chorioactaceae

キリノミタケ

Chorioactis geaster

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本菌は、自然林内のイチイガシ倒木に発生する。本種の発生地はいずれも開発や環境保守によって改変される可能性が高く、生育環境の減少が予測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

今関（1938）によって宮崎県西諸県郡で採集された 1 個の未熟子実体が日本新産の *Chorioactis geaster* と同定されたが、その後本菌は 35 年後の 1973 年まで採集されなかった。イチイガシ（*Quercus gilva* Bl.）の倒木上に発生。本菌は日本以外ではアメリカ合衆国（テキサス州）にも産するとされるが、本菌との同一性には疑問もある。

基礎情報

【形態】

子実体（キノコ）は短い柄を持ち、はじめ球形で次第に紡錘形、25～40×50～70 mm となる。子実体の成長にともない頂部に切れ込みが入り、4～7 裂片を持つヒメツチグリのように開裂し、径 100～120 mm。子嚢は円筒形で 600～750×17.5～20 μm、8 個の胞子を含む。子嚢胞子は紡錘形、55～67.5×10～12.5 μm。

【生活史】

発生季節は秋。人工培養できる。

【生育環境】

イチイガシ（*Quercus gilva* Bl.）の倒木上に発生。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

今関（1938）によって宮崎県西諸県郡で採集された 1 個の未熟子実体が日本新産の *Chorioactis geaster* と同定されたが、その後本菌は 35 年後の 1973 年まで採集されなかった。その後、山口県、奈良県、高知県でも知られるようになった。ただし、生育環境は限られる。また、アメリカ合衆国（テキサス州）にも産するとされるが、本菌との同一性には疑問もある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県内の発生地は、1999 年に確認された。その後、山口県、高知県、奈良県でも採集されたが、2012 年以降発見されておらず、伐採や地域の開発（ダム開発）にともなう環境の変化により絶滅が危惧される。

【生育地の現況】

不明である。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

発生地の開発およびダム開発にともなう生育場所の森林伐採や環境の変化。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，ダム・河川工作物建設
	（現在）	森林伐採，ダム・河川工作物建設

特記事項

本菌は培養が可能で、人口栽培下で子実体の誘導もなされている（牧野ら 2023）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	VU
第４次 2019：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	VU
第４次 2018：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	VU
第４次 2017：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	VU
第４次 2015：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	VU
第４次：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	VU
第３次：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Kupfer ex Eckblad	CR+EN
第２次：	キリノミタケ	*Chorioactis geaster* (Peck) Eckblad	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠＢ類(EN-g)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Imazeki, R. and Y. Otani, 1975. Rediscovery of *Chorioactis geaster* (Peck) Eckblad in Kyusyu, Japan. Transactions of the Mycological Society of Japan, 16: 22 2-229.
- 今関六也，1938．奇菌 *Urnula* Geaster Peck 九州二産ス．植物研究雑誌，14: 680-684．
- 黒木秀一・長尾英幸・清田悦司，2002．絶滅危惧菌類「キリノミタケ」の発生状況とその環境調査．宮崎県総合博物館研究紀要，23: 23-45．
- 牧野　純・中束賢譲・根津郁実・石栗　太・中澤武，2023．絶滅危惧種キリノミタケの木材腐朽特性と原木栽培による子実体形成．日菌報 64: 41-55．
- Nagao, H., S. Kurogi, E. Kiyota, and K. Sasatomi, 2009. Kumanasamuha *geaster* sp. nov., an anamorph of *Chorioactis geaster* from Japan. Mycologia, 101: 871-877.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chorioactis geaster has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chorioactis geaster* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—

執筆者:	細矢剛（国立科学博物館）
Author:	Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

スッポンタケ目 Phallales　ツマミタケ科 Lysuraceae

コナガエノアカカゴタケ

Lysurus sphaerocephalus

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
現存する生育地のうち、特に茨城県、千葉県や静岡県の生育地では防潮堤の建設や海岸の侵食によって、生育環境の継続的な減少が認められるため、救済策がとられなければ将来的に本菌の減少が継続することが推測される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は薄紅色～橙色で海綿状の托（高さ 5～10 cm）と、桃色～橙色で網目状の頭部を持つ。茨城県、千葉県、静岡県、愛知県、香川県の砂浜海岸に発生するが、各地域における分布は局所的で、かつ土地開発や海岸侵食などによる生育地の環境悪化に伴い分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

菌蕾は類球形～卵形、白色。成熟すると高さ 5～10 cm で、薄紅色～橙色を帯びる海綿状の托を伸ばす。托の上部には桃色～橙色で網目を持ったカゴ状での頭部を持つ。頭部には暗緑色～緑褐色の粘液状のグレバが付着し、強い刺激臭を発する。本種については、基準標本産地であるアルゼンチン産の標本と日本産標本では系統的な位置に明らかな違いがあることから、分類学的な再検討が必要である。

【生活史】

日本においては主に砂浜海岸に初夏～冬（5～12 月）に発生するが、国外では森林内などの腐植上からも報告があり、詳しい生活史は不明。

【生育環境】

初夏～冬に、砂浜海岸の波打ち際に近い海浜植生の周囲、特にコウボウムギやケカモノハシなどの周囲に、単生～散生する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

日本では茨城県、千葉県、静岡県、愛知県、香川県のごく限られた地域の砂浜海岸にのみ、まれに発生する。国外では、南北アメリカ、アフリカ、アジア、オセアニアに分布するが、日本産標本が国外のものと分類学的に同一種であるか否かは再検討が必要である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布が局在しており、自然で良好な砂浜海岸の開発や海岸侵食による急激な減少、悪化に伴い消滅が懸念される。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は開発や海岸侵食による影響を受けて海浜植生が減少しており、現在知られている発生地の環境が継続的に改変され失われれば消滅が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成などに起因した産地局限。

要因の区分：	（過去）	海岸開発, 土地造成, 分布・産地局限
	（現在）	海岸開発, 土地造成, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第４次 2019:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第４次 2018:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第４次 2017:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第４次 2015:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第４次:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第３次:	コナガエノアカカゴタケ	*Simblum sphaerocephalum* Schltdl.	VU
第２次:	－	－	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 千葉県[最重要・重要保護生物（A-B）] 静岡県[絶滅危惧ⅠＢ類(EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Caffot, M. L. H., K. Hosaka, L. S. Domínguez and C. Urcelay, 2018. Molecular and morphological data validate the new combination of *Lysurus sphaerocephalum* from Argentina, with some additional records on *Phallales* (Agaricomycetes). Mycologia, 110: 419-433.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lysurus sphaerocephalus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lysurus sphaerocephalus* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　タマチョレイタケ科 Polyporaceae

カンバタケモドキ

Favolus pseudobetulius

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される 【推定根拠】 本種の発生した宿主数は限定的であり、成熟個体数は 1000 未満と推測される。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

北海道大雪山系の数ヶ所のヤナギ上で確認されているキノコ。現地は世界的に見た本種の分布最南端にあたり、温暖化の影響が懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体は短い柄を有するか、または、ほとんど無柄。傘は幅 15 cm に及ぶ、傘表面は淡黄色～淡褐色で繊維状紋を持つ。傘肉は強靭な肉質で白色。子実層托は類白色、管孔状。担子胞子は円筒形、7～10×2.5～3.5 μm。北半球の寒冷地域に分布する。

【生活史】

不明。

【生育環境】

日本国内では、ヤナギ科樹木の生木または枯木上に生じる。海外ではヤマナラシ属に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道上川町赤岳周辺のヤナギの上からのみ知られており、発生は稀である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内における生息地は世界的に見た本種の分布最南端に当たっており、温暖化による生息地の縮小が懸念される。また、生息地が極限的であり、北海道上川町赤岳周辺のヤナギの上からのみ知られる。

【生育地の現況】

生育地は保全されており、宿主となるヤナギ類の顕著な減少は認められない。

【個体数の現況】

本種の発生した宿主数は限定的であり、成熟個体数は 1000 未満と推測される。

存続を脅かす要因

産地が局限的であるが、減少状況の詳細は不明。

要因の区分：	（過去）	気候変動
	（現在）	気候変動

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カンバタケモドキ	*Favolus pseudobetulius* (Murashk. ex Pilát) Sotome & T. Hatt.	CR+EN
第４次 2019：	カンバタケモドキ	*Favolus pseudobetulius* (Murashk. ex Pilát) Sotome & T. Hatt.	CR+EN
第４次 2018：	カンバタケモドキ	*Favolus pseudobetulius* (Murashk. ex Pilát) Sotome & T. Hatt.	CR+EN
第４次 2017：	カンバタケモドキ	*Favolus pseudobetulius* (Murashk. ex Pilát) Sotome & T. Hatt.	CR+EN
第４次 2015：	カンバタケモドキ	*Polyporus pseudobetulinus* (Murashk. ex Pilát) Thorn, Kotir. & Niemelä	CR+EN
第４次：	カンバタケモドキ	*Polyporus pseudobetulinus* (Murashk. ex Pilát) Thorn, Kotir. & Niemelä	CR+EN
第３次：	カンバタケモドキ	*Polyporus pseudobetulinus* (Murashk. ex Pilat) Thorn, Kotir. & Niemela	CR+EN
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Sotome, K., T. Hattori and Y. Ota, 2011. Taxonomic study on a threatened polypore, *Polyporus pseudobetulinus*, and a morpholigcally similar species, *P. subvarius*. Mycoscience, 52: 319-326.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Favolus pseudobetulius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Favolus pseudobetulius* is listed as VU under criteria D1.

D. Population size estimated to number fewer than 1000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest

Threat types:	Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ビョウタケ目 Helotiales　クロハナビラタケ科 Cordieritidaceae

クロムラサキハナビラタケ

Diplocarpa irregularis

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 本種は、冷温帯老齢渓畔林の材上に発生する。同様の環境は温暖化などの影響をうける可能性があり、注意を要するが、一部の環境はよく保全されており、絶滅に至る可能性が高いとはいえない。発生環境はそれほど珍しくないと推測され、さらに証拠標本に基づく検討が必要である。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　国内で広く分布するようだが、採集例は多くないため、さらに分布を検討する必要がある。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄、直径 6 cm、高さ 4 cm の花弁状、縁が不規則波打つ。数個が束生する。胞子は 7-9×3-4 μm、長楕円形、2 個の油球を有する。側糸は糸状で先端は槍型、隔壁を有する。

【生活史】

主に 9～10 月に発生。

【生育環境】

ブナ・ミズナラ・トチ・サワグルミ等、冷温帯老齢渓畔林にある ブナ等の倒木上。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

北海道・青森県・新潟県・長野県・鳥取県。

現在の生育状況

【分布域の現況】

不明。

【生育地の現況】

一部はよく保全されている。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

森林伐採など。

要因の区分：	（過去）	森林伐採
	（現在）	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：　クロムラサキハナビラタケ　*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J.Durand　NT

第４次 2019：	クロムラサキハナビラタケ	*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J.Durand	NT
第４次 2018：	クロムラサキハナビラタケ	*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J.Durand	NT
第４次 2017：	クロムラサキハナビラタケ	*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J.Durand	NT
第４次 2015：	クロムラサキハナビラタケ	*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J.Durand	NT
第４次：	クロムラサキハナビラタケ	*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J.Durand	NT
第３次：	クロムラサキハナビラタケ	*Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J. Durand	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 工藤伸一・長澤栄史・手塚豊，2000．日本産クロムラサキハナビラタケ属（*Ionomidotis*）の 1 新種について．日本菌学会第 44 回大会講演要旨集，p. 22.
- 工藤伸一，2017．青森県産きのこ図鑑．p. 468.
- 奈良泰世，2022．クロムラサキハナビラタケ．日本菌学会ニュースレター，2022-1: 1.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Diplocarpa irregularis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diplocarpa irregularis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae

マツタケ

Tricholoma matsutake

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生育条件が悪化している。
【判断理由】
農林水産省が公表している特用林産物生産統計調査の結果報告書によれば、マツタケの生産量は過去 50 年間で 90%以上減少している。この減少は、主要な採取場所である低地のアカマツ林がマツ枯れ等により悪化・減少していることや、里山の管理不足等によって林床環境が悪化していること等が原因であると考えられ、今後さらに悪化・減少するおそれがある。
一方で、本種は低地の里山であるアカマツ林以外の、マツ科樹林（シラビソ、ハイマツ、ツガ、コメツガ等）にも生育しているが、自然環境保全基礎調査によれば、これらの植生は現在減少傾向にない。以上より、現時点で本種の絶滅の危険度は小さいと判断する。

評価分科会：　菌類分科会

概要

日本のきのこを代表するマツタケは、アカマツなどマツ科植物に依存し共生する外生菌根菌である。本種が依存する植生である低地の里山林におけるアカマツ林の激減（管理された里山の減少、松枯れ等）により、生産量はこの 50 年ほどで激減している。この生産量は低地のアカマツの里山林における発生量の指標となると考えられる。一方、本種のもう一つの分布域と考えられる高山・亜高山帯のマツ科樹林（モミ属、ツガ属など）においては、発生量に大きな変化はないと考えられ、現時点で本種の絶滅の危険度は小さいと判断する。

協力者:　成松眞樹（岩手県林業技術センター）・糟谷大河（慶應義塾大学）・服部力（森林総合研究所）・保坂健太郎（国立科学博物館）・細矢剛（国立科学博物館）・山田明義（信州大学）・（一財）自然環境研究センター

基礎情報

【形態】

傘は径 8-20(30) cm、柄は 10-20(30) cm×15-30(50) mm。傘表面は淡黄褐色～くり褐色、最初繊維状、のち表皮は裂けて繊維状鱗片となる。柄はほぼ上下同大、つば（内被膜）より上部は白色粉状、下部は傘と同様の繊維状鱗片に覆われる。特有のマツタケの匂いを持つ。

本種と同様にマツ科の樹木と共生する類縁種のマツタケモドキとは、匂いの有無や形態で区別できる。また同様に近縁種であるバカマツタケやニセマツタケとは、本種の子実体がより大形であること、本種はマツ科と共生（バカマツタケとニセマツタケはブナ科と共生）することなどで区別できる。

【生活史】

マツ科の樹木（宿主）と共生し、宿主の根に外生菌根をつくる。菌根は菌糸および土と塊を形成するが、マツタケの場合、この塊は深く巨大で、肉眼でも確認可能なため、「シロ」と称されてきた。「シロ」を構成する菌糸は、宿主や近隣の樹木（マツ科）の根に菌根を作り続ける。この結果「シロ」は水平方向には最初は円形に拡大し、多くの場合ドーナツ形となるが、徐々にその形態は不明瞭になる。マツタケは、子実体形成をとおして担子胞子を形成・散布する。胞子の落着地点が適切な条件を有すれば、元の「シロ」とは遺伝的に異なる新たな「シロ」が形成され、結果的に個体群が維持される。また、「シロ」によっては、遺伝的に異なる複数の「ジェネット」で構成されることも知られており、その生活様式の全貌は、現在でも解明の途上にある。

【生育環境】

主にアカマツ、あるいは、シラビソ、トドマツ、ハイマツ、ツガ、コメツガ、アカエゾマツなどと共生し、その林内に夏から秋にかけて発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道から鹿児島まで千葉県を除くほぼすべての地域に分布する。国外では、韓国、北朝鮮、中国、ブータン、ウクライナ、フィンランド、スウェーデン等に分布するユーラシア分布種である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種が依存するマツ科の樹林のうち、江戸時代以降に日本列島各地で里山林として植栽・育成・管理されてきたアカマツ林は、本種の第一の分布域であるが、マツ枯れや里山林の管理不足による林床環境の悪化等により戦後激減している。そのため、本種の第一の分布域は縮小していると考えられる。一方、本種のもう一つの分布域は、高山・亜高山帯

のマツ科（モミ属、ツガ属など）樹林にあると考えられているが、自然環境保全基礎調査によれば、これらの植生は現在減少傾向にないことが分かっている。したがって、本種のもう一つの分布域に関して大きな変化はないと考えられる。なお、本種の高い経済的価値により生育情報が秘匿される傾向にあるため、分布域の現況の把握は困難である。

【生育地の現況】

本種の生育地はマツ科樹林であるが、第一の分布域である人里のアカマツ林では、里山の管理不足やマツ枯れにより生息環境が悪化・減少している。本種のもう一つの分布域と考えられる高山・亜高山帯のマツ科（モミ属、ツガ属など）樹林の生育環境について詳細は不明である。

【個体数の現況】

農林水産省の特用林産物生産統計調査によると、日本のマツタケの統計出荷量は過去50年間で90%以上減少している。この統計は本種の第一の分布域と考えられる低地のアカマツの里山林における発生量の指標となると考えられる。一方、本種のもう一つの分布域と考えられる高山・亜高山帯のマツ科樹林（モミ属、ツガ属など）における個体数の現況は情報が限られている。ただし、高山・亜高山帯のマツ科樹林は減少傾向にないため、本種のもう一つの分布域では発生量に大きな変化はないと考えられる。なお、本種の高い経済的価値により生育情報が秘匿される傾向にあり、本種の発生量の把握は困難である。

存続を脅かす要因

本種が依存する植生である低地の里山林におけるアカマツ林の激減（管理された里山の減少、松枯れ等）により、生産量はこの50年ほどで激減している。一方、もう一つの生育地である高山・亜高山帯のマツ科樹林（シラビソ、ハイマツ、ツガ、コメツガなど）においても、各種開発行為や将来危惧される更なる地球温暖化等により、生育地の存続がおびやかされている状況にあると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, スキー場, 土地造成, 交通インフラ建設, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 食用・薬用採取, 気候変動
	（現在）	森林伐採, スキー場, 土地造成, 交通インフラ建設, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 食用・薬用採取

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S.Ito & S.Imai) Singer	NT
第４次 2019：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S.Ito & S.Imai) Singer	NT

第４次 2018：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S.Ito & S.Imai) Singer	NT
第４次 2017：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S.Ito & S.Imai) Singer	NT
第４次 2015：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S.Ito & S.Imai) Singer	NT
第４次：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S.Ito & S.Imai) Singer	NT
第３次：	マツタケ	*Tricholoma matsutake* (S. Ito & S. Imai) Singer	NT
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 埼玉県[準絶滅危惧（NT）] 神奈川県[情報不足（DD）] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 静岡県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 三重県[絶滅危惧 IB 類(EN)] 京都府[準絶滅危惧種] 大阪府[VU] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 広島県[準絶滅危惧（NT）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 福岡県[準絶滅危惧] 佐賀県[絶滅危惧Ⅱ類種] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-g)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Aoki, W., N. Bergius, S. Kozlan, F. Fukuzawa, H. Okuda, H. Murata, T. A. Ishida, L. -M. Vaario, H. Kobayashi, E. Kalmis, T. Fukiharu, S. Gisusi, K. Matsushima, Y. Terashima, M. Narimatsu, N. Matsushita, K. H. Ka, F. Yu, T. Yamanaka, M. Fukuda and A. Yamada, 2022. New findings on the fungal species *Tricholoma matsutake* from Ukraine, and revision of its taxonomy and biogeography based on multilocus phylogenetic analyses. Mycoscience, 63: 197-214.
- 青木　渉，2023．カキシメジ類を含む日本産 *Tricholoma* 属の資源探索とその利用可能性に関する研究．信州大学審査学位論文．2023 年 3 月．
- 浜田　稔,1964．マツタケおよび類縁菌の菌糸純粋培養法.マツタケ―研究と増産―．マツタケ研究懇話会，京都．223 pp.
- Ito S. and S. Imai, 1925. On the taxonomy of shii-take and matsu-take. The Botanical Magazine, Tokyo 39: 319–328.
- 成松眞樹，2017．寒冷地域におけるマツタケの生態と栽培．岩手県林業技術センター研究報告，25: 1-132.
- 農林水産省，2024．特用林産物生産統計調査．https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/tokuyo_rinsan/（2024 年 11 月 6 日閲覧）
- 小川　眞，1991．マツタケの生物学 補訂版．築地書館，東京．326 pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholoma matsutake has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholoma matsutake* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Ski resort development, Land development, Transportation infrastructure construction, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Harvesting of biological resources for food and medicinal use, Climate change
Law designation status for conservation	—



©吹春俊光（元千葉県立中央博物館）

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae

カバノアナタケ

Inonotus obliquus

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　③				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 【判断理由】 北海道などの分布地において業者等によると思われる乱獲によって減少が見られる。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　北半球の寒冷地に広く分布し、主にカンバ類の幹に発生する。国内ではカンバ類の分布地で比較的普通に見られたが、生育地の多くで菌核が乱獲されて減少している。黒色の菌体は菌核であり、子実体は樹皮下などに形成される。

基礎情報

【形態】

通常見られる菌体は菌核。菌核は塊状で硬く、表面は黒色で粗面。内部は黄褐色。子実体は樹皮下などに形成され、薄く広がる。

【生活史】

菌核は数年に渡って成長する。子実体は一年生で短期間で消失する。

【生育環境】

シラカバやダケカンバなどのカンバ類、稀に他の広葉樹の幹上に発生。生木上に発生することが多い。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・岩手県・福島県・栃木県・群馬県・山梨県・静岡県・長野県・徳島県など。国内の寒冷な地域や高標高地に広く分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北半球の寒冷な地域を中心に広く分布する。国内ではカンバ類の分布する寒冷な地域や高標高地に広く分布しており、生育地の環境自体は概ね安定している。

【生育地の現況】

生育地の環境は概ね安定している。

【個体数の現況】

主要な分布地である北海道などで減少している。

存続を脅かす要因

薬用等を目的とした菌核の採取

要因の区分：	（過去）	食用・薬用採取
	（現在）	食用・薬用採取

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát	NT
第４次 2019:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát	NT
第４次 2018:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát	NT
第４次 2017:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát	NT
第４次 2015:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát	NT
第４次:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát	NT
第３次:	カバノアナタケ	*Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilat	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 福島県[準絶滅危惧（NT）] 栃木県[要注目] 静岡県[要注目種（N-Ⅲ 部会注目種）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也．1988．カバノアナタケ．今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編），日本のきのこ，p492．山と渓谷社，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Inonotus obliquus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Inonotus obliquus* is listed as NT under criteria ③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Harvesting of biological resources for food and medicinal use

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae

メシマコブ

Sanghuangporus sanghuang

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 宿主となるクワの老齢木が減少していることから、少なくとも本州、四国、九州の栽培クワに発生していたものは減少していると判断できる。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　クワ属の樹木に特異的に発生する多年生のサルノコシカケの一種。国内の暖温帯を中心に広く分布するが、クワ老齢木の減少に伴い減少している。民間薬としても広く知られる。

基礎情報

【形態】

子実体は多年生、全体に木質で硬い。傘表面は黒褐色で粗面、傘下面には細かい管孔が形成され、鮮黄色～黄褐色、孔口は 6～8 個/mm。担子胞子は淡黄褐色で大きさは 4～5×3～4 μm。

【生活史】

子実体は多年生で、数年に渡り成長する。生木の心材内や枯木上で数年～数十年生育するとみられる。

【生育環境】

ヤマグワなどクワ属の壮齢～老齢の生木または倒木に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林, 田地・畑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

関東・北陸地方から九州地方にかけて、広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

関東・北陸地方から九州地方にかけて、広く分布する。本州、四国、九州産の標本のうち相当数は、養蚕用に植栽されたクワの古木に発生したものと判断される。一方、伊豆諸島では自生種のハチジョウグワの老齢木などに発生すると見られる。

【生育地の現況】

養蚕用の桑植栽面積は 1970 年代の約 50 万 ha から 2020 年代の約 2000 ha と激減しており、これに伴い宿主となる栽培クワの本数も大幅に減少しつつあると推測される。伊豆諸島のハチジョウグワ古木は現在も伐採利用が続いている。

【個体数の現況】

宿主の減少により、減少していると思われる。

存続を脅かす要因

宿主の減少により、減少していると思われる。

要因の区分：	（過去）	宿主の減少
	（現在）	宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	メシマコブ	*Inonotus sanghuang* Sheng H.Wu, T.Hatt.& Y.C.Dai	NT
第４次 2019：	メシマコブ	*Inonotus sanghuang* Sheng H.Wu, T.Hatt.& Y.C.Dai	NT
第４次 2018：	メシマコブ	*Inonotus sanghuang* Sheng H.Wu, T.Hatt.& Y.C.Dai	NT
第４次 2017：	メシマコブ	*Inonotus sanghuang* Sheng H.Wu, T.Hatt.& Y.C.Dai	NT
第４次 2015：	メシマコブ	*Inonotus sanghuang* Sheng H.Wu, T.Hatt.& Y.C.Dai	NT
第４次：	メシマコブ	*Inonotus sanghuang* Sheng H.Wu, T.Hatt.& Y.C.Dai	NT
第３次：	メシマコブ	*Phellinus linteus* (Berk. & M.A. Curtis) Teng	VU
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 愛媛県[準絶滅危惧（NT）] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA 類(CR-g)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也．1989．メシマコブ．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 II，p189．保育社，大阪．
- Wu S. H, Y. C. Dai, T. Hattori, T. W. Yu, D. M. Wang, E. Parmasto, H. Y. Chang, and S. Y. Shih, 2012. Species clarification for the medicinally valuable '*sanghuang*' mushroom. Botanical Studies, 53: 135-149.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sanghuangporus sanghuang has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th

edition. *Sanghuangporus sanghuang* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland
Threat types:	Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　ニンギョウタケモドキ科 Albatrellaceae

ニンギョウタケモドキ

Albatrellus ovinus

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生育条件が悪化している。
【判断理由】
東北南部以西の生育地では、マツ枯れ及び自然遷移の影響で生育地であるマツ林が減少、劣化している。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　マツ林やトウヒ林地上に発生する菌根菌。多くの地域でマツ枯れなどの影響により減少している。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄で円形～不整形の傘と円筒形の柄を持つ。傘表面は類白色で黄色の亀裂状紋を表す。傘肉は白色、柔軟な肉質。子実層托は管孔状で孔口面は類白色、接触により黄変～褐変。担子胞子は類球形、無色、4～5×3～3.5 μm。

【生活史】

マツ属、トウヒ属などの針葉樹と菌根を形成すると考えられる。子実体は短命であるが、数年～10 数年にわたって継続的に発生する。

【生育環境】

トウヒ属、マツ属、モミ属の針葉樹林内に発生する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道、福島県、茨城県、栃木県、埼玉県、千葉県、東京都、埼玉県、石川県、長野県、静岡県、三重県、京都府、鳥取県、広島県、愛媛県などから記録がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内に広く分布すると見られる。

【生育地の現況】

東北南部以西での主要な生育地となるマツ林はマツ枯れや遷移により生育環境が劣化・減少している。北海道内やトウヒ属林、モミ属林に発生する個体群の多くについては、現時点で生育環境の顕著な劣化は認められない。

【個体数の現況】

北海道を除く多くの地域において、子実体の発生は稀である。

存続を脅かす要因

マツ枯れ及び自然遷移によるマツ林の減少。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少
	(現在)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	NT
第４次 2019：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	NT
第４次 2018：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	NT
第４次 2017：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	NT
第４次 2015：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	NT
第４次：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	NT
第３次：	ニンギョウタケモドキ	*Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

福島県[準絶滅危惧（NT）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 埼玉県[準絶滅危惧（NT）] 長野県[情報不足（DD）] 三重県[絶滅危惧 II 類(VU)] 京都府[準絶滅危惧種] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也・本郷次雄，1989．ニンギョウタケモドキ．原色日本新菌類図鑑(II)，pp. 130．保育社，大阪

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Albatrellus ovinus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Albatrellus ovinus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Decrease in

	hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　ニンギョウタケモドキ科 Albatrellaceae

ヌメリアイタケ

Neoalbatrellus yasudae

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 東北南部以西の多くでは生育地であるマツ林の多くがマツ枯れや自然遷移の影響で劣化、減少している。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

マツ混交林地上に発生する菌根菌。マツ枯れなどの影響により減少している。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄、傘は径 2～7 cm、ほぼ円形～不定形で表面は灰青色～濃藍色、湿時は強い粘性を持つが乾燥すると縮んで光沢を示し暗色になる。傘肉は類白色、柔軟な肉質。子実層托は管孔状、孔口面は類白色。柄は中心生～やや偏心生、円筒形で類白色。担子胞子は楕円形、4.5～5×3.5～4.5 μm。

【生活史】

マツと菌根を形成すると考えられる。子実体は短命であるが、数年以上にわたって継続的に発生する。

【生育環境】

マツを交えた雑木林の地上に群がって発生、菌根を形成すると考えられる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本、中国に分布。国内に広く分布するものの、安定した生育地は少ない。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では宮城県、福島県、山形県、東京都、茨城県、千葉県、栃木県、山梨県、長野県、静岡県、兵庫県、鳥取県、島根県、愛媛県などから知られるが、多くの地域で希少になっている。

【生育地の現況】

東北南部以西で生息地となるマツ林がマツ枯れや遷移により劣化・減少している。

【個体数の現況】

多くの地域で発生は稀である。

存続を脅かす要因

マツ枯れの影響によるホストの減少や自然遷移により発生が減少している。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少
	(現在)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第４次 2019:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第４次 2018:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第４次 2017:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第４次 2015:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第４次:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第３次:	ヌメリアイタケ	*Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

福島県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類（B ランク）] 静岡県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 三重県[情報不足（DD）] 兵庫県[B ランク] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 島根県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也・本郷次雄，1989．ヌメリアイタケ．原色日本新菌類図鑑(II)，pp. 129-130．保育社，大阪.
- Pouzar, Z., 1975. Two rare Japanese species of the Genus *Albatrellus* (Polyporaceae). Folia Geobot. Phytotax., Praha, 10: 197-203.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Neoalbatrellus yasudae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neoalbatrellus yasudae* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest

	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

イボタケ目 Thelephorales　マツバハリタケ科 Bankeraceae

クロカワ

Boletopsis grisea

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 東北南部以西の生育地では、マツ枯れ及び自然遷移の影響で生育地であるマツ林が減少、劣化している。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

マツ林地上に発生する菌根菌。マツ枯れなどの影響により減少している。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄、傘は径 5～20 cm、ほぼ円形、傘表面は灰色～黒褐色または赤褐色、表面はやや皮状。傘肉は白色で肉質、傷つけると褐変、独特の苦味を持つ。子実層托は管穴状、孔口面は類白色。柄は円筒形で灰色～黒褐色。胞子は類球形でイボ状の突起を持つ。

【生活史】

マツと菌根を形成する。子実体は短命であるが、数年にわたって継続的に発生する。

【生育環境】

マツ林地上に群がって発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

依然国内に広く分布している。

【生育地の現況】

東北地方南部以西のマツ林はマツ枯れの影響などによって既に面積が減少または環境が劣化している。近年では中部地方の高標高地や岩手県などでもアカマツ林の減少が続いている。

【個体数の現況】

マツ林の減少に伴い、個体数減少が続いていると考えられる。マツ枯れや遷移によりマツ林が極端に減少した地域では希少化している。

存続を脅かす要因

マツ枯れ及び自然遷移によるマツ林の減少。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少
	(現在)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第４次 2019：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第４次 2018：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第４次 2017：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第４次 2015：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第４次：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第３次：	クロカワ	*Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 茨城県[絶滅危惧Ⅱ類] 栃木県[情報不足] 埼玉県[準絶滅危惧（NT）] 富山県[情報不足] 静岡県[準絶滅危惧（NT）] 三重県[EN] 京都府[準絶滅危惧種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 福岡県[情報不足] 佐賀県[準絶滅危惧種] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也・本郷次雄，1989．クロカワ．原色日本新菌類図鑑(II)，pp. 128．保育社，大阪．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Boletopsis grisea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Boletopsis grisea* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Decrease in hosts

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

イボタケ目 Thelephorales　マツバハリタケ科 Bankeraceae

マツバハリタケ

Phellodon fuligineoalbus

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 東北南部以西では、マツ枯れ及び自然遷移の影響で生育地であるマツ林が劣化・減少している。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

マツ林内に発生する菌根菌。マツ枯れなどの影響により減少している。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄、傘は径 5～1 cm、ほぼ円形で表面は薄茶色～赤茶色、鱗片は持たず皮状。傘肉は類白色～汚白色で柔軟な肉質。子実層托は針状で類白色。柄は太く短い。胞子は類球形、表面に細かい棘状突起を持ち無色。

【生活史】

マツと菌根を形成する。子実体は短命であるが、数年以上にわたって継続的に発生する。

【生育環境】

アカマツ林の地上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・宮城県・福島県・茨城県・千葉県・石川県・三重県・滋賀県・大阪府・兵庫県・鳥取県・島根県・岡山県・福岡県・佐賀県・宮崎県など広い範囲で確認されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内の広域に分布している。

【生育地の現況】

本種はアカマツ林に生育するが、東北南部以西のアカマツ林はマツ枯れや遷移により劣化・減少している。一部の生育地では安定的な発生も認められる。

【個体数の現況】

多くの地域で発生はやや稀である。

存続を脅かす要因

マツ枯れ及び自然遷移に伴うアカマツ林の劣化、減少。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少
	(現在)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C.Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第４次 2019:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C.Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第４次 2018:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C.Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第４次 2017:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C.Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第４次 2015:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C.Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第４次:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C.Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第３次:	マツバハリタケ	*Bankera fuligineoalba* (J.C. Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 三重県[絶滅危惧 IB 類(EN)] 大阪府[DD] 兵庫県[B ランク] 広島県[準絶滅危惧（NT）] 福岡県[情報不足] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也・本郷次雄，1989．マツバハリタケ．原色日本新菌類図鑑(II)，pp. 123．保育社，大阪．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phellodon fuligineoalbus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phellodon fuligineoalbus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat

status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue. ②Habitat conditions are deteriorating.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ユーロチウム目 Eurotiales　コウジカビ科 Aspergillaceae

エダウチホコリタケモドキ

Dendrosphaera eberhardtii

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①③

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

希少性が高く、採集例が不足している。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

国内での既存分布地は鹿児島以南であり、森林土壌の腐植層から生じる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　基本的にカビの形態をとる科の中で、例外的に巨視的な子実体を形成する特徴的な菌。熱帯産の菌であり、日本では希少種。

基礎情報

【形態】

高さ 5～12 cm、時に 17 cm に達し、長い柄の上部が数回密に分枝し、各枝の上に 1～数個の子嚢果を房状に生じる。子嚢はグレバに不規則に埋没して生じ、不稔の菌糸盤によって隔てられる。類球形で 8 胞子性、壁は早期に溶解。子嚢胞子は 12.5-14 μm、油球 1 個を含み、表面は著しく粗面。透明な弾糸あり。

【生活史】

無性生殖時代は penicillium 型（*Penicillium eberhardtii*）として知られる（Kobayasi and Yokoyama 1981）。

【生育環境】

森林土壌の腐植層（シイ林土壌）から生じる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

鹿児島県、沖縄県（屋久島以南とされる）。海外はインドネシア、ベトナムなど。

現在の生育状況

【分布域の現況】

不明。

【生育地の現況】

現状の一部はよく保全されている。

【個体数の現況】

国内現存は、科博の数点の標本と神奈川県博の 1 標本で、日本の国内の自然界の現存個体の評価ができない。

存続を脅かす要因

森林伐採など。

要因の区分：	（過去）	不明, 森林伐採
	（現在）	不明, 森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第４次 2019:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第４次 2018:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第４次 2017:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第４次 2015:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第４次:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第３次:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardtii* Pat.	DD
第２次:	エダウチホコリタケモドキ	*Dendrosphaera eberhardti* Pat.	VU
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 小林義雄，1975．エダウチホコリタケモドキ属について．植物研究雑誌，50: 243-248.
- Kobayasi, Y. and T. Yokoyama, 1981. On the genus *Dendrosphaera* and its conidial state. Bull. Nat. Mus. Nat. Sci. ser. B, 7: 15-22.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dendrosphaera eberhardtii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dendrosphaera eberhardtii* is listed as DD under criteria ①③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest

Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　バッカクキン科 Clavicipitaceae　　日本固有

トワダミドリクチキムシタケ

Metarhizium pseudoatrovirens

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

青森県十和田地域の落葉広葉樹林のみに生育し、その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有する。しかし、2008 年以降、分布域における調査がほとんど行われておらず、カテゴリーを判定するに足る情報が足りないため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。コウチュウ目の幼虫に寄生する。1979 年に奥入瀬で採集され、その後同地域のみで発見されている。

基礎情報

【形態】

子座は宿主上に 1～2 本生じ、タンポ型、朽木上の高さは 1-2 cm。柄は歪みのある円柱状、淡黄緑色、繊維状肉質、朽木中では白色となり、宿主に直結する。結実部は先端部に位置し、円錐形～卵形、高さ 5-11 mm、径 2-7 mm、淡蒼緑色。子嚢殻は卵形、520-550×250-320 µm、結実部に埋生する。子嚢の先端部は径 4-5 µm。子嚢胞子は紡錘形、50×2.5 µm、8 個の隔壁で分裂し、部分胞子となる。

【生活史】

発生期は 7～9 月。

【生育環境】

ブナ、ミズナラ、トチノキ、ホオノキなどが生育する林内の腐朽木に発生。宿主は腐朽木内のコウチュウ目の幼虫。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

青森県十和田地域（奥入瀬）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

基準産地である奥入瀬では、1979 年の発見以降、2007 年まで継続して発生が確認されている。

【生育地の現況】

近年は十分な調査が行われていないが、発生地の環境に大きな変化はないと思われる。

【個体数の現況】

発生地は限定され、今後環境の悪化が進むと消滅する可能性が高い。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	（現在）	不明, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

清水（1997）では、本種を含むミドリクチキムシタケの仲間について、宿主をゴミムシダマシ科と記載している。しかし日本冬虫夏草の会（2014）では、ミドリクチキムシタケの宿主をホソクシヒゲムシ科と再同定しており、トワダミドリクチキムシタケの宿主も同様である可能性が高い。

本種は分子系統学的にミドリクチキムシタケの姉妹系統に位置する近縁種であり（Kepler et al. 2012）、ミドリクチキムシタケの産地では、結実部が円錐形で、外見上トワダミドリクチキムシタケと酷似する子実体がしばしば混生する。また、トワダミドリクチキムシタケの子嚢胞子は部分胞子に分裂し、ミドリクチキムシタケはしない点で区別できるとされてきたが（日本冬虫夏草の会、2014）、一方で、両種ともに子嚢胞子は分裂しないという観察結果もある（Kepler et al. 2012）。したがって、これら 2 種が同種である可能性もあるため、今後の検証が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トワダミドリクチキムシタケ	*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G-.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2019：	トワダミドリクチキムシタケ	*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G-.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2018：	トワダミドリクチキムシタケ	*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G-.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2017：	トワダミドリクチキムシタケ	*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G-.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2015：	トワダミドリクチキムシタケ	*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G-.H.Sung & Spatafora	DD
第４次：	トワダミドリクチキムシタケ	*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G-.H.Sung & Spatafora	DD
第３次：	トワダミドリクチキムシタケ	*Cordyceps pseudoatrovirens* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kepler, R. M., G. H. Sung, S. Ban, A. Nakagiri, M. J. *Chen*, B. Huang, Z. Li, J. W. Spatafora. New teleomorph combinations in the entomopathogenic genus *Metacordyceps*. Mycologia, 104:182-197.
- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1982. *Cordyceps* species from Japan 5. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany 8: 111-123.
- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Metarhizium pseudoatrovirens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Metarhizium pseudoatrovirens* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Unknown, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	―

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　ノムシタケ科 Cordycipitaceae　　日本固有

チチブクチキムシタケ

Cordyceps nanatakiensis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 1 度しか発見されていない種であり、その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有するものの、カテゴリーを判定するに足る情報がないため、DD と評価した。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。ゴミムシダマシ科の幼虫に寄生する。1950 年に埼玉県両神山で採集され、その後再発見されていない。日本固有種。

基礎情報

【形態】

子座は宿主の頭部または尾部から 2-4 本生じ、棍棒型、高さ 4-15 mm。柄は全体が半透明質、強靭な肉質、径 0.8-3 mm、腐朽木内で細根状に分岐する。結実部は上端に位置し、高さ 1.2-9 mm、径 0.8-1.6 mm、淡桃紅色。子嚢殻は卵形、300×200 μm、結実部に半裸生し、孔口は細かく突出。子嚢は径 3.5-4 μm、先端部は径 3 μm。部分胞子は 3-4×1 μm。

【生活史】

発生期は 7〜8 月。

【生育環境】

サワグルミ、カツラ、トチノキ、ミズナラ、フサザクラなどが生育する河畔林の腐朽木に発生。宿主は腐朽木内のゴミムシダマシ科の幼虫。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

埼玉県。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1950 年に埼玉県秩父市の両神山で基準標本が採集されて以降、再発見されていない。

【生育地の現況】

基準産地である両神山の七滝沢では近年、自然災害（崩落）が起こっており、環境が変化した可能性がある。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

基準産地である両神山の七滝沢では近年、自然災害（崩落）が起こっており、環境の変化が生育に影響する可能性がある。

要因の区分：	（過去）	不明, 自然災害, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	（現在）	不明, 自然災害, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

2007 年に両神山での記録（宇梶、2007）があるが、形態や標本の所在などの情報を欠くため、今回の判定には用いなかった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2019：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2018：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2017：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2015：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第３次：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次：	チチブクチキムシタケ	*Cordyceps nanatakiensis* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

埼玉県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 小林義雄・清水大典，1983．冬虫夏草菌図譜．保育社，大阪．280pp.
- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1983. *Cordyceps* species from Japan 6. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany 9: 1-21.
- 清水大典，1994．原色冬虫夏草図鑑．誠文堂新光社，東京．381pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.
- 宇梶清一，2008．2007 年 福島県他の冬虫夏草調査記録．冬虫夏草，28: 70-73.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cordyceps nanatakiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cordyceps nanatakiensis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Unknown, Natural disasters, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　ノムシタケ科 Cordycipitaceae　　日本固有

ヒメハルゼミタケ

Cordyceps polycephala

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

西表島の 3 河川沿いのみで生育が確認されており、その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有するものの、類似種との識別が難しいため、近年の調査では確実に本種と同定できる標本が得られていない。よって、カテゴリーを判定するに足る情報がないため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。イワサキヒメハルゼミの幼虫に寄生する。1975 年に西表島の後良川で採集され、その後、同島の他所で発見されている。日本固有種。

基礎情報

【形態】

子座は宿主の頭部から単生し、やや不規則なタンポ型、地上部の高さは 2-2.5 cm。柄はやや不規則にゆがんだ円柱形、上方で 2-3 分岐し、淡褐色、径 2-3 mm、繊維状肉質、基部は暗色を帯び宿主に直結する。結実部は上端に集中し、柄との境は明瞭、淡桃黄色または肌色、高さ 1-2 mm、径 2-3 mm。子嚢殻は卵形、850-880×600-650 µm、結実部に裸生し、孔口は突出。子嚢の先端部は径 3 µm。子嚢胞子は径 1 µm、部分胞子に分裂する。部分胞子は長さ 3-4 µm。

【生活史】

発生期は 6～8 月。

【生育環境】

スダジイ、オキナワウラジロガシ、フカノキ、モクタチバナ、アカメイヌビワ、コミノクロツグ、オニヘゴ、リュウビンタイなどが生育する河畔林の地上に発生。宿主は地中のイワサキヒメハルゼミの幼虫。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域, 河川中流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄県（西表島）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1975 年に西表島の後良川で、1989 年に同島の仲間川で確認された（清水、1997）。1990 年には相良川でも本種と思われる未熟個体が確認されている（日本冬虫夏草の会、1991）。

【生育地の現況】

上記の 3 河川では、現在も多数の冬虫夏草類の発生が確認されていることから、環境の顕著な悪化はないと思われるが、詳細は不明である。

【個体数の現況】

詳細は不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限
	（現在）	不明, 森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限

特記事項

本種は、西表島を中心に分布するカンザシセミタケと形態が類似しており、共にイワサキヒメハルゼミを宿主とし、不規則に歪んだ柄の先端にタンポ型の結実部を形成する。カンザシセミタケでは子嚢殻が埋生するが、ヒメハルゼミタケでは裸生する点が両種の違いとされる。しかし、ヒメハルゼミタケの基準産地である後良川で採集された、多数のカンザシセミタケを観察した結果、半裸生～裸生の子嚢殻を形成する子実体が複数確認されており（貝津・宇梶、2010）、両種の差異は必ずしも明確ではない。今後、これらが同種である可能性について検証を要す。なお、カンザシセミタケは 2013 年に分子系統解析の結果に基づき *Polycephalomyces* 属に転属されたが（Kepler et al. 2013）、ヒメハルゼミタケは解析されておらず、現在も *Cordyceps* 属に据え置かれている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次：	ヒメハルゼミタケ	*Cordyceps polycephala* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 貝津好孝・宇梶清一，2010．第 6 回奄美大島調査及び第 30 回西表島調査．冬虫夏草，30: 32-36.

- Kepler, R, S. Ban, A. Nakagiri, J. Bischoff, N. Hywel-Jones, C. A. Owensby, J. W. Spatafora. The phylogenetic placement of hypocrealean insect pathogens in the genus *Polycephalomyces*: an application of One Fungus One Name. Fungal Biology, 117:611-622.
- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1983. *Cordyceps* species from Japan 6. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany, 9: 1-21.
- 日本冬虫夏草の会，1991．西表島冬虫夏草調査報告．冬虫夏草，11: 124-131．
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cordyceps polycephala has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cordyceps polycephala* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, River development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　ノムシタケ科 Cordycipitaceae　　日本固有

アカエノツトノミタケ

Cordyceps rubiginosistipitata

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

西表島、沖縄本島の特定の沢沿いのみに生育し、その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有するものの、散発的にしか確認されておらず減少傾向にあるか判断できない。また、南西諸島の他島における調査が不足しており、カテゴリーを判定するに足る情報がない。これらの背景より、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。コメツキムシ科の幼虫に寄生する。1980 年に西表島の後良川で採集され、その後同島の他所や沖縄島（国頭村）で発見されている。日本固有種。

基礎情報

【形態】

子座は宿主の胸部から 1-2 本生じ、ツトの実型、地上部の高さ 3.6-4.8 cm。柄は革質、ときに環紋状の亀裂を生じ、赤みを帯びた茶褐色、長さ 19-55 mm、径 0.6-1 mm、宿主に直結する。結実部は上部に位置し、膨らみのある円筒形、高さ 5-8 mm、径 1-1.8 mm、淡焦褐～淡赤褐色、上端に尾状、白色～白黄橙色の不稔部を生じる。子嚢殻は倒洋梨形～卵形、310-450×150-200 µm、結実部に完埋生～埋生し、孔口は低い疣状に微突出。子嚢は円柱状、長さ約 200 µm、先端部は径 4-4.8 µm。子嚢胞子は糸状、190-227×1.4-1.6 µm、32 個または 16 個の部分胞子に分裂する。部分胞子は円筒形、長さ 4-6.8 µm、稀に 12.5 µm に達する。

【生活史】

発生期は 6～7 月。

【生育環境】

スダジイ、コミノクロツグ、クロヘゴ、リュウビンタイなどが生育する河畔林の地上に発生。宿主は地中のコメツキムシ科の幼虫。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域, 河川中流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄県（西表島、沖縄島）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

西表島では 1980 年に採集された基準産地の他に、少なくとも 2 か所の河川沿いで発見されており（Kobayasi & Shimizu, 1983；小林・清水、1983；清水、1994、1997）、その後近年（2018 年）まで散発的に発見されている（宇梶、2006；東、2018；山本、2020）。2020 年には沖縄島で新たな発生地が 1 箇所見つかった（盛口、2021）。現在のところ、分布域は日本国内の亜熱帯域の高温多湿な環境に限られる。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限
	（現在）	不明, 森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限

特記事項

小林・清水（1983）には、アカエノツトノミタケの他に、アカエノコメツキムシタケとの別名の記述もある。また、原記載における種小名の綴り"rubiginosostipitata"は、訂正されるべき正字法上の異形体とみなされており、現在は"rubiginosistipitata"が用いられる。本種の分子系統解析は行われていないが、形態的特徴から *Ophiocordyceps* 属に帰属すると推測される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次：	アカエノツトノミタケ	*Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 東勇太，2018．第五次レッドリスト調査の進捗状況について 2（西表島冬虫夏草調査報告）． 冬虫夏草，38: 38-44.
- 小林義雄・清水大典，1983．冬虫夏草菌図譜．保育社，大阪．280pp.
- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1983. *Cordyceps* species from Japan 6. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany, 9: 1-21.
- 盛口満，2021．琉球列島の冬虫夏草（その 12）．冬虫夏草，41: 27-35.
- 清水大典，1994．原色冬虫夏草図鑑．誠文堂新光社，東京．381pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.
- 宇梶清一，2006．日本冬虫夏草の会 25 周年記念事業 第 28 次西表島調査報告．冬虫夏草，26: 19-24.
- 山本航平，2020．日本各地の調査記録．冬虫夏草，40: 57-69.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cordyceps rubiginosistipitata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cordyceps rubiginosistipitata* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, River development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©山本航平（栃木県立博物館）

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　ノムシタケ科 Cordycipitaceae

シロアリタケ

Cordyceps termitophila

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

西表島の 3 河川に生育地があるが、いずれの産地においても、1985 年以降の再発見がない。ただし、詳細な調査を行えば発見できる可能性があるため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。シロアリ類に寄生する。1971 年に西表島の仲良川で採集され、その後 1984 年に同島で発見されて以降、日本では再発見されていない。

基礎情報

【形態】

子座は宿主の胸部背面、頸部、または腹部に 1 本、まれに 2 本生じ、ツトの実型、地上部の高さ 4-13 cm。柄は円柱形、白っぽい淡紅紫色、径 1-1.5 mm。結実部は上半部に位置し、高さ 1.5-4 mm、径 1.2-2 mm、淡黄白色、上端に不稔部を生じる。子嚢殻は卵形、250-270×150-160 µm、結実部に埋生し、淡黄褐色の孔口が微突出する。子嚢は長さ 130-150 µm、径 8.5-10 µm。子嚢胞子は 75-95×3-3.5 µm、9-16 個の隔壁があるが、部分胞子に分裂しない。

【生活史】

発生期は 6～7 月。

【生育環境】

スダジイ、オキナワウラジロガシなどが生育する河畔林の地上に発生。宿主は地中のシロアリ類。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域, 河川中流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

西表島（仲良川、仲間川、後良川）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1971 年に仲良川で発見され、その後、仲間川と後良川でも確認された。しかし、仲間川と後良川での 1984 年の記録（清水、1985）を最後に、その後 10 回以上の調査が行われたにもかかわらず再発見されていない。

【生育地の現況】

仲良川の基準産地は伐採の影響を受けた可能性があるが詳細は不明。仲間川と後良川の発生地は、植生の遷移や大雨の影響を受けているが、現在も他の冬虫夏草類は多く発生している。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然

		災害, 分布・産地局限

特記事項

本種の分子系統解析は行われていないが、形態的特徴から *Ophiocordyceps* 属に帰属すると推測される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	シロアリタケ	*Cordyceps termitophila* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 小林義雄・清水大典，1983．冬虫夏草菌図譜．保育社，大阪．280pp.
- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1978. *Cordyceps* species from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany 4: 43-63.
- 清水大典，1985．冬虫夏草の窓　84 年．冬虫夏草，5: 4-16.
- 清水大典，1994．原色冬虫夏草図鑑．誠文堂新光社，東京．381pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cordyceps termitophila has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cordyceps termitophila* is listed as DD under criteria ①. The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, River development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　ボタンタケ科 Hypocreaceae

オオボタンタケ

Trichoderma cerebriforme

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 主にブナの倒木に発生するとされ、基質選択性が高い傾向がある。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

日本では多くの場合、ブナの巨大倒木の表面に分散して生じ、他地域の採集品に比べて子座（子実体すなわちキノコ）が大きい（他地域の採集品は直径 1 cm 以内、日本のブナから生じる採集品は 4 cm に達する）が、子実体の組織構造、子嚢胞子、分生子型などはほぼ同じである。

基礎情報

【形態】

子実体（子座）は半球形で黄土色、表面に脳の表面のような凹凸がある。子座の表面近くに子嚢殻が 1 列に並んで埋まり、その中に子嚢が多数できる。子嚢の中には 16 個の二次子嚢胞子が作られる。日本のブナ巨木倒木から得られるものは、他地域の採集品に比べて子実体が大きい。

【生活史】

本種の分生子型は trichoderma（*Trichoderma longibrachiatum*）型の緑色トリコデルマであり、*Hypocrea schweinitzii* 群に分類される。日本では 7 月～9 月に主としてブナの巨大倒木の表面に分散して生ずる。

【生育環境】

広葉樹（ブナ）倒木上に発生。発生地が限定されているが、目立った環境の変化は見られない。渓畔林のブナの倒木に見られるところから、温暖乾燥化が危険性の要因となる可能性がある。発生は比較的稀。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

最初オーストラリアで発見され、ついで日本、ソロモン群島、ボルネオ、インドネシア（スラウェシ）、ペルーなどで発見された。

現在の生育状況

【分布域の現況】

生育条件は安定しているようだが、近年の採集頻度は低い。2016、2018 年には青森・北海道で採集されている。

【生育地の現況】

発生地の一部はよく保全されている。

【個体数の現況】

近年は採集頻度が低く、評価できない。

存続を脅かす要因

生育地のブナ林の伐採や地域の開発によるホストの減少。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，基質・基物の減少及び消失
	（現在）	森林伐採，基質・基物の減少及び消失

特記事項

本種の無性生殖時代はその生長速度が遅く、形態学的特徴だけでは分類が困難な本群の分子系統学的な研究には比較の基準種として貴重である。日本産の本種は子実体（子座）が大型で主としてブナから生える点で、種内分類群を分けるべきかもしれない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第４次 2019：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第４次 2018：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第４次 2017：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第４次 2015：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第４次：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第３次：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.	VU
第２次：	オオボタンタケ	*Hypocrea cerebriformis* Berk.Syn. *H. grandis* Imai	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Berkeley, M. J., 1873. Australian fungi, recieved principally from Baron F. von Mueller and Dr. R. Schomburgk. J. Linn. Soc. London, 13: 155-177.
- Doi, Y., 1975. Revision of the Hypocreales with cultural observations VIII. *Hypocrea peltata* (Jungh.) Berk. and its allies. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 1: 126-129.
- Imai, S., 1935. Studies on the Hypocreaceae of Japan II. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 14: 114-118.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Trichoderma cerebriforme has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Trichoderma cerebriforme* is listed as DD under criteria ②. The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　オフィオコルジケプス科 Ophiocordycipitaceae　日本固有

ヨコバイタケ

Ophiocordyceps cicadellidicola

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 採集例が限られているため、その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有するものの、カテゴリーを判定するに足る情報が足りないため、DD と評価する。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　ヨコバイタケは、特徴的な子嚢胞子をもつ冬虫夏草の一種。過去の採集例から比較的広域に分布すると考えられ、ホストの分布からも広域な分布が推察されるが、採集例が限られており、増減に関する情報が不足している。

基礎情報

【形態】

葉裏上のヨコバイ虫体が白色の菌糸で覆われる。卵型、淡黄色の子嚢殻が子座あるいは菌糸体状に生じ、大きさ 370-400×220-280 μm。子嚢は 150-180×10-15 μm、8 胞子性。子嚢胞子は 35-48×4-5 μm、8-12 隔壁をもち、稀に分断する。

【生活史】

夏にオオヨコバイ科の幼虫に発生する。

【生育環境】

ヨコバイの虫体に寄生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

宮城県・三重県。潜在的には各地に分布と推定される。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域が変化したということを示す証拠はない。

【生育地の現況】

オオヨコバイ科の幼虫に生じ、空中湿度の高い地のシシウド、オオイタドリ、ヨブスマソウ、イヌドウナなどの葉裏や枝に発生する。

【個体数の現況】

標本としては極めて数が限られている。

存続を脅かす要因

森林伐採、環境破壊など。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2019：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2018：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2017：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2015：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第４次：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第３次：	ヨコバイタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi & Shimizu) Kobayasi & Shimizu	NT
第２次：	ヨコバエタケ	*Podonectrioides cicadellidicola* (Kobayasi et Shimizu) Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

京都府[絶滅寸前種]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kobayasi Y. and D. Shimizu, 1977. Two new species of *Podonectria* (Clavicipitaceae). Bull. natn. Sci. Mus., Tokyo, B 3 (3): 93-97.
- Spatafora, J. W., C. A. Quandt, R. M. Kepler, G-H. Sung, B. Shrestha, N. L. Hywel-Jones and J. J. Luangsa-ard, 2015. New 1F1N species combinations in Ophiocordycipitaceae (Hypocreales). IMA Fungus, 6: 357-362.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ophiocordyceps cicadellidicola has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ophiocordyceps cicadellidicola* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　オフィオコルジケプス科 Ophiocordycipitaceae

ケラタケ

Ophiocordyceps gryllotalpae

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

本種は冬虫夏草類の研究者・愛好家の探索対象となりにくい水田の畦という極めて特殊な環境に生育する。1950 年代に宮崎県、鹿児島県および熊本県で確認されているが、その後半世紀以上の間、他所からの記録がない。しかし、今後調査を行えば発見できる可能性があるため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。水田の畦に生息するケラに寄生する。1950 年代に宮崎県、鹿児島県、熊本県で相次いで確認されたが、その後半世紀以上の間、国内での再発見はない。多くの冬虫夏草類は森林環境に生育するが、本種は水田の畦という極めて特殊な生育環境が特徴。

基礎情報

【形態】

子座は宿主の胸部と腹部の境に 1-4 本生じ、太針型、地上部の高さ 3.5-8 cm。柄はややしまった繊維肉質、基部がわずかに太まり、淡ネズミ色か淡黄灰色、先端は灰白色、径 1.8-2 mm。結実部は中央部に位置する。子嚢殻は卵形、210-255×130-140 µm、結実部に裸生～半裸生する。子嚢は円柱状、長さ 50-70 µm、径 7-9 µm。子嚢胞子は 40-63×2-2.5 µm、7-8 個の隔壁があるが部分胞子に分裂しない。

【生活史】

発生期は 6～8 月。

【生育環境】

水田地帯の畦地の地上に発生。宿主は地中のケラ。

生育環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

宮崎県、鹿児島県、熊本県

現在の生育状況

【分布域の現況】

1955 年に宮崎県日南市細田町塚田の水田の畔で発見され（粟谷、1990）、同県都城市（1955 年）、鹿児島市 (1957 年)、熊本県内で相次いで確認されたが (Kobayasi, 1981；清水、1994)、その後半世紀以上の間、国内での再発見はない。現在のところ、日本国内における分布域は九州南部の水田地帯に限られる。

【生育地の現況】

1955 年に発見された宮崎県日南市の産地では、その後 1956 年と 1957 年にも調査が行われたが再発見されなかった。この発生地はその後、スギ植林地となり失われた（粟谷、1981）。その他、1950 年代に生育が確認された場所では、調査が行われておらず不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 圃場整備, 土地造成, 分布・産地局限, 宿主の減少
	(現在)	不明, 圃場整備, 土地造成, 分布・産地局限, 宿主の減少

特記事項

多くの冬虫夏草類は森林環境に生育するが、本種は水田の畦という極めて特殊な生育環境が特徴で、これまでの記録は主に水田作業中の偶発的な発見による。冬虫夏草類の研究者・愛好家の探索対象となりにくい環境のため、1950 年代以降再発見がなされていない。ただし 2015 年および 2016 年に、沖縄島（国頭村）の住宅地にある畑の地中から、ケラに生じた未成熟の冬虫夏草類の一種が発見されている（盛口、2017）。本菌がケラタケであるか否か、今後の検証が望まれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae* Petch	DD
第４次 2019：	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae* Petch	DD
第４次 2018：	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae* Petch	DD
第４次 2017：	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae* Petch	DD
第４次 2015：	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae* Petch [= *Cordyceps koreana* Kobayasi]	DD
第４次：	ケラタケ	*Ophiocordyceps gryllotalpae* Petch [= *Cordyceps koreana* Kobayasi]	DD
第３次：	ケラタケ	*Cordyceps koreana* Kobayasi	DD
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[情報不足(DD-1)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 粟谷寿郎，1981．ケラタケ発見の経緯．昆虫と自然，16: 33-34.
- 粟谷寿郎，1990．日南市の冬虫夏草について．タテハモドキ，26: 61-62.
- 小林義雄・清水大典，1983．冬虫夏草菌図譜．保育社，大阪．280pp.

- Kobayasi, Y., 1981. Revision of the genus *Cordyceps* and its allies 1. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany 7: 1-13.
- 盛口満，2017．琉球列島の冬虫夏草（その 8）.冬虫夏草，37: 20-27.
- 清水大典，1994．原色冬虫夏草図鑑．誠文堂新光社，東京．381pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ophiocordyceps gryllotalpae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ophiocordyceps gryllotalpae* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland
Threat types:	Unknown, Field preparation, Land development, Limited distribution, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　オフィオコルジケプス科 Ophiocordycipitaceae　日本固有

クロミノクチキムシタケ

Ophiocordyceps uchiyamae

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

カミキリムシ類の幼虫に寄生する。現在確実な生育地は 2 カ所が知られている。ただし、確実な同定はできていないが、未熟個体らしきものが他 1 カ所で報告されており、基質や生育環境を鑑みると、生育地点数はさらに増える可能性もある。そのため、カテゴリーを判定するに足る情報がないため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。カミキリムシ類の幼虫に寄生する。最初 1977 年に東京都八王子市で採集され、近年、宮城県仙台市でも発見された。日本固有種。

基礎情報

【形態】

子座は宿主上に 1～数本生じ、突き抜き型～ツブタケ型、あるいは小型のタンポ型、腐朽木上の高さ 10-16 mm。柄は不規則に歪んだ円柱状、暗オリーブ褐色～黒色、白色～黄白色の菌糸膜に覆われた宿主に直結する。結実部は先端部に位置し、不規則な楕円形、高さ 4-6 mm、径 1-3 mm、柄と同色、ときに上端に不稔部を生じる。子嚢殻は卵形、320-550×190-330 µm、結実部に裸生する。子嚢は棍棒状、長さ 140-170 µm、先端部は径 5 µm。子嚢胞子は円筒形～長紡錘形、65-100×2-3 µm、12-14 個の不明瞭な隔壁があり、成熟すると中央付近で分裂し、2 個の部分胞子となる。

【生活史】

発生期は 8～9 月。

【生育環境】

沢沿いの湿った林内の腐朽木に発生。宿主は腐朽木内の小型のカミキリムシ類の幼虫。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

東京都八王子市、宮城県仙台市。

現在の生育状況

【分布域の現況】

東京都八王子市で 1977 年に見出された基準産地では、大雨等による環境の変化により発生が確認されていないが、2010 年に同じ山域の別の沢で発生が確認された（内山、2019）。また、2018 年には宮城県での生育が確認された（栗田、2019）。

【生育地の現況】

東京都にある基準産地付近は国定公園として管理されており、目立った悪化は見られない。宮城県の産地の現況は不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 自然災害, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	（現在）	不明, 自然災害, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

本種は冬虫夏草と総称されるボタンタケ目の昆虫病原菌の仲間で、その中でも極めてまれな種であり、野外での発見・採集は容易ではない。Sung et al.（2007）は、形態的特徴に基づき、本種を *Cordyceps* 属から *Ophiocordyceps* 属に転属させたが、分子系統解析による裏付けはなされなかった。その後、内山・清水（2013）は、詳細な形態観察と分子系統解析を行い、本種が *Harposporium*（=*Podocrella*）に属することを示唆したが、正式な分類学的措置は行われていない。

なお、2022 年に茨城県笠間市において、本種と思われる菌が採集されたが、未熟であったため同定は保留された（安田、2023）。そのため、今回のカテゴリー判定には用いなかった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2019：	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2018：	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2017：	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2015：	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次：	クロミノクチキムシタケ	*Ophiocordyceps uchiyamae* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第３次：	クロミノクチキムシタケ	*Cordyceps uchiyamae* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次：	クロミノクチキムシタケ	*Cordyceps uchiyamae* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 小林義雄・清水大典，1983．冬虫夏草菌図譜．保育社，大阪．280pp.
- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1980. *Cordyceps* species from Japan 3. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany, 6: 125-145.
- 栗田康慎，2019．宮城県産クロミノクチキムシタケ．冬虫夏草，39: 17-18.
- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.
- 清水大典，1994．原色冬虫夏草図鑑． 誠文堂新光社，東京．381pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.
- 内山茂，2019．クロミノクチキムシタケについて．冬虫夏草，39: 19-21.
- 安田守，2023.長野県他の調査記録．冬虫夏草，43: 51-56.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ophiocordyceps uchiyamae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ophiocordyceps uchiyamae* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest, River headwater
Threat types:	Unknown, Natural disasters, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　オフィオコルジケプス科 Ophiocordycipitaceae

イネゴセミタケ

Tolypocladium inegoense

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

北海道から兵庫県の、冷温帯の落葉広葉樹林および亜寒帯針葉樹林の約 10 地点のみに生育する。その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有するものの、本種の主な生育環境である可能性がある亜寒帯針葉樹林における調査が不足しており、カテゴリーを判定するに足る情報がないため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。コエゾゼミ、エゾゼミ、またはミンミンゼミの幼虫に寄生する。1958 年に宮城県七ヶ宿町で採集され、その後北海道～近畿地方の少数の地点で発見されている。

基礎情報

【形態】

子座は菌糸に厚く覆われた宿主の頭部または胸部から通常単生し、棍棒型、地上部の高さは 5 cm 以内。柄は円柱状、白色、径 5-6 mm、宿主に直結する。結実部は上半部に位置し、柄との境はやや明瞭、高さ 5 cm 以内、柄よりわずかに太く、緑灰色～暗いオリーブ色。子嚢殻は倒洋梨形、520-550×260-280 µm、結実部に半裸生し、孔口は突出。子嚢は円柱状、長さ 400-450 µm、先端部は径 5-6.5 µm。子嚢胞子は糸状、径 2 µm 、通常 128 個の部分胞子に分裂する。部分胞子は円筒形、長さ 2.5-3 µm。

【生活史】

発生期は 8～9 月。

【生育環境】

ブナやミズナラが優占する温帯広葉樹林、コメツガやシラビソが優占する亜高山帯針葉樹林に発生。北海道ではトドマツ造林地に発生。宿主は地中のコエゾゼミ、エゾゼミ、またはミンミンゼミの幼虫。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

1958 年に宮城県七ヶ宿町稲子で採集され、その後北海道、山形県、栃木県、長野県、兵庫県でも採集された。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

宮城県にある基準産地では 1960 年代以降に伐採が行われ、その後同地では発生が確認されていない（清水、1997；井上、2011）。その他の生育地の生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

長野県の産地では現在も比較的安定した発生が確認されている（安田、2023）。栃木県、山形県、兵庫県では発生量も少なく、今後環境の悪化が進むと消滅する可能性が高い。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 森林伐採, 気候変動

	（現在）	不明，森林伐採，気候変動

特記事項

イネゴセミタケの発生地では、子座が棍棒型の典型的なものと、ややタンポ型で、柄と結実部の境が比較的明瞭なものが混生する。後者はタンポエゾセミタケと類似しているため、イネゴセミタケとタンポエゾゼミタケが同種である可能性について検証を要す。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イネゴセミタケ	*Elaphocordyceps inegoensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2019：	イネゴセミタケ	*Elaphocordyceps inegoensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2018：	イネゴセミタケ	*Elaphocordyceps inegoensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2017：	イネゴセミタケ	*Elaphocordyceps inegoensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2015：	イネゴセミタケ	*Elaphocordyceps inegoensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次：	イネゴセミタケ	*Elaphocordyceps inegoensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第３次：	イネゴセミタケ	*Cordyceps inegoensis* Kobayasi	CR+EN
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 井上義彰，2011．日本冬虫夏草の会 第 30 回記念虫草祭．冬虫夏草，31: 55-62．

- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1963. Monographic studies of *Cordyceps* 2. Group parasitic on *Cicadidae*. Bulletin of the National Science Museum, 6: 286-314.
- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.
- 安田守，2023．長野県他の調査記録．冬虫夏草，43: 51-56.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tolypocladium inegoense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tolypocladium inegoense* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, Climate change
Law designation status for conservation	—



©山本航平
（栃木県立博物館）

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ボタンタケ目 Hypocreales　オフィオコルジケプス科 Ophiocordycipitaceae　　日本固有

タンポエゾゼミタケ

Tolypocladium toriharamontanum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

北海道および山形県の、冷温帯の落葉広葉樹林および亜寒帯針葉樹林の約 5 地点のみに生育する。その希少性から絶滅危惧カテゴリーへ移行し得る属性は有するものの、本種の主な生育環境である可能性がある亜寒帯針葉樹林における調査が不足しており、カテゴリーを判定するに足る情報がないため、DD と評価した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

冬虫夏草と総称される昆虫病原菌の一種。エゾゼミまたはコエゾゼミの幼虫に寄生する。1960 年に山形県朝日連峰で採集され、その後同県の他所や北海道の一部で発見されている。日本固有種。

基礎情報

【形態】

子座は宿主の頭部から通常単生し、倒洋梨形のタンポ型、地上部の高さは約 5 cm。柄は円柱状、白色、淡橙黄色の染みがあり、径 3-7 mm、宿主に直結する。結実部は先端に位置し、柄との境は明瞭、高さ 2-3 cm、径 1 cm、黒っぽい青藍色。子嚢殻は長卵形～倒洋梨形、590-740×240-340 µm、結実部に埋生～裸生し、孔口は突出。子嚢は円柱状、長さ 410-475 µm、先端部は径約 5 µm。子嚢胞子は糸状、315-410×1-2 µm、128 個、稀に 64 個の部分胞子に分裂する。部分胞子は円筒形、長さ 2-4 µm。

【生活史】

発生期は 8～9 月。

【生育環境】

本州ではブナ林、北海道ではカラマツ造林地などに発生。宿主は地中のエゾゼミまたはコエゾゼミの幼虫。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

山形県、北海道。

現在の生育状況

【分布域の現況】

山形県朝日連峰の鳥原山で 1960 年に採集され、2015 年にその近く（朝日町内）で再発見された（佐藤、2016）。北海道では利尻島や知床などで発見例がある（西原、2000、2008）。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

発生地は限定され、山形県では発生量も少なく、今後環境の悪化が進むと消滅する可能性が高い。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 分布・産地局限, 気候変動
	（現在）	不明, 分布・産地局限, 気候変動

特記事項

タンポエゾゼミタケと同属のイネゴセミタケは、子座の形態がタンポエゾセミタケと類似することがあり、両種が同種である可能性について検証を要す。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タンポエゾゼミタケ	*Elaphocordyceps toriharamontana* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2019：	タンポエゾゼミタケ	*Elaphocordyceps toriharamontana* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2018：	タンポエゾゼミタケ	*Elaphocordyceps toriharamontana* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2017：	タンポエゾゼミタケ	*Elaphocordyceps toriharamontana* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2015：	タンポエゾゼミタケ	*Elaphocordyceps toriharamontana* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次：	タンポエゾゼミタケ	*Elaphocordyceps toriharamontana* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第３次：	タンポエゾゼミタケ	*Cordyceps toriharamontana* Kobayasi	CR+EN
第２次：	タンポエゾゼミタケ	*Cordyceps toriharamontana* Kobayasi	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kobayasi, Y. and D. Shimizu, 1963. Monographic studies of *Cordyceps* 2. Group parasitic on *Cicadidae*. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, 6(3): 286-314.
- 西原羊一，2000．北海道の冬虫夏草覚書　セミ生冬虫夏草について．冬虫夏草菌研究会通信，6: 119-126.
- 西原羊一，2008．平成 19 年度・北海道室蘭地方の冬虫夏草記録．冬虫夏草，28: 56-60.

- 佐藤育子，2016．山形県で発生したタンポエゾゼミタケの形態．冬虫夏草，36: 12.
- 清水大典，1997．カラー版冬虫夏草図鑑．家の光協会，東京．446pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tolypocladium toriharamontanum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tolypocladium toriharamontanum* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	山本航平（栃木県立博物館） Kohei Yamamoto

公表年月：2025 年 3 月

ミクロチリウム目 Microthyriales　ミクロチリウム科 Microthyriaceae　日本固有

ヒュウガハンチクキン

Asterinella hiugensis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②④

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

本菌は、1930 年代の標本以外に証拠標本や観察情報がなく、絶滅したと考えられていたが、2010 年に新たな標本が採集され、絶滅していないことだけが確認された。本菌の過去の報告は、宮崎県に限定されており、マダケに限定されていることから希少性は明らかである。しかしながら、その後の採集例・観察例はなく、積極的な減少や増加を議論するためのデータがない。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

基質はマダケに限定されている。

評価分科会：　菌類分科会

概要

江戸時代から知られていた宮崎県産斑竹の 1 種に坪井伊助（1914）が日向斑竹と命名し、日野・日高（1934）によって宮崎県西諸県郡高原村（現、高原町）の発生地が確認され、その斑紋はマダケ稈に本菌が寄生して生じることが明らかになった。斑竹の中でもっとも美しいことで知られたが、伐採などにより現在では生品が見られることは極めてまれとなり、第 3 次レッドリスト作成のための調査では絶滅とされたが、2010 年に宮崎県にて再発見された。

基礎情報

【形態】

稈上の表生菌糸は褐色、分枝して拡がり、幅は 3～5 μm、楕円形で輪紋状の斑紋を形成する。子嚢子座は偏平楯型で外周は円形、子座壁は黒色、放射状の菌糸組織からなり、直径 100～400 μm。子嚢は楕円形、26～48×22～31 μm、8 個の胞子を含む。子嚢胞子は卵球形、2 細胞、褐色、16～21×9～11 μm。

【生活史】

子嚢胞子が飛散し発芽して侵入・感染すると考えられるが、詳細は不明。人工培養はできない。

【生育環境】

マダケ稈に寄生する。竹林の北側の一部に見られ、その発生には微妙な環境要因が影響するようで、他の場所へ移植すると斑紋は消失したという。2010 年の発生地は、当時の採集者によれば、1 エリアに 2 カ所あったが、1 カ所は道路建築で消失、あと 1 カ所はなんとか残っているとのこと。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

宮崎県のタイプ標本産地からのみ発生が知られていた。過去、宮崎県西諸県郡高原町の 3 地点で発生していた記録がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

現在、宮崎県からのみ知られる。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

生育地でのマダケ群落減少。

要因の区分：	(過去)	基質・基物の減少及び消失
	(現在)	基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* I.Hino & Hidaka	CR+EN
第４次 2019:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* I.Hino & Hidaka	CR+EN
第４次 2018:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* I.Hino & Hidaka	CR+EN
第４次 2017:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* I.Hino & Hidaka	CR+EN
第４次 2015:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* I.Hino & Hidaka	CR+EN
第４次:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* I.Hino & Hidaka	CR+EN
第３次:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* Hino & Hidaka	EX
第２次:	ヒュウガハンチクキン	*Asterinella hiugensis* Hino et Hidaka	EX
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA 類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 朝比奈康彦（編），1939．日向班竹菌.日本隠花植物図鑑，291，三省堂，東京.
- Hino, I., 1938. Illustrationes *fungorum* bambusicolorum. Bulletin of Miyazaki College of Agriculture and Forestry, 10: 55-64.
- Hino, I., 1961. *Asterinella hiugensis*., 216, The Fuji Bamboo Garden, Gotenba.
- 日野　巌・日高　醇，1934．日向班竹について．植物及動物，2: 1187-1195.
- 日野　巌・日高　醇，1950．日向班竹．山口大学農学報，1: 21-28.
- 坪井伊助，1914．坪井竹類図譜，101 葉.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Asterinella hiugensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Asterinella hiugensis* is listed as DD under criteria ②④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ②Habitats are highly limited. ④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

ホネタケ目 Onygenales　ホネタケ科 Onygenaceae

ホネタケ

Onygena corvina

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

本種は培養下で子実体形成が可能であり、土壌菌として分布域も広いと考えられるが、天然では羽毛や骨などの特殊な環境でしか子実体形成が見られない。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　鳥羽毛、嘴などケラチン等の硬蛋白質性の基質を分解する大型子実体を作る種として極めてまれな種である。

基礎情報

【形態】

子実体は柄と頭部からなり、基質から直立、柄は白色から微クリーム色、繊維質で 1～2.5×0.1 cm。成熟時に皮層は破れ、全体が粉状となる。子嚢は不規則に頭部内に配列し、球形～卵形で 10～12 μm、8 個の胞子を含み、子嚢壁は消失性。子嚢胞子は楕円形で 6～8×3～3.5 μm、平滑、無色～淡黄色、2 個の油球を持つ。

【生活史】

夏～秋に発生。無性生殖によって、分節型およびアレウロ型分生子を形成。潜在的には土壌微小菌として生活するものと考えられる。

【生育環境】

フクロウの嘴、イタチの頭骨、鳥の羽毛、哺乳類の頭骨などケラチン等の硬蛋白質性の基質上に発生。培養可能。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では北海道、宮城県、山形県、奈良県。ヨーロッパには多数の情報がある（GBIF,2024/4/13 確認）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では、北海道、宮城県、山形県、奈良県などで発生した記録があるが、他地域での発生は不明。地域の開発にともなう発生環境の変化による絶滅が危惧される。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や地域の開発にともなう環境の変化や動物との関係も考えられるが、希少性が高く、直接の原因は不明。

要因の区分：	（過去）	不明, 森林伐採
	（現在）	不明, 森林伐採

特記事項

硬蛋白質性の基質を分解する菌で肉眼的な子実体を形成する種として特異。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第４次 2019:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第４次 2018:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第４次 2017:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第４次 2015:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第４次:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第３次:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. & Schwein.	CR+EN
第２次:	ホネタケ	*Onygena corvina* Alb. et Schwein. : Fr.	CR+EN
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- GBIF. org (13 April 2024) GBIF Occurrence Download https://doi. org/10. 15468/dl. jtb59r
- 佐久間大輔・奥村英世，2012．近畿地方で撮影されたホネタケ属．日本菌学会ニュースレター，2012-3: 1．
- Tubaki, K., 1960. Imperfect stage of *Onygena corvina* and its perithecial formation under culture. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, 46: 36-43.
- 宇田川俊一他，1978．菌類図鑑（上），pp. 353-354，講談社，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Onygena corvina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Onygena corvina* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

チャワンタケ目 Pezizales　アミガサタケ科 Morchellaceae

トガリフカアミガサタケ

Morchella semilibera

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 近年本種に関する採集報告がないため、生育確認が困難なほど、どの生育地においても生育密度が低いのであろうと判断する。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　頭部に小型の天蓋をもつアミガサタケのきのこ。文献的には本種は広く分布するが、国内では希少性が高く、採集例が不足している。一定の観察例はあるようだが、証拠標本数の増加と依存環境の解明が求められる。

基礎情報

【形態】

高さ 4-10 cm、ときに 15 cm に及ぶ。柄は円筒形で中空、基部はやや膨大、表面は粉状、白色あるいは黄土色。頭部は帽状で円錐形、頂端が尖り、下縁部は柄から離れ、縦方向の脈が発達し、連絡脈の発達はわずか、オリーブ味をおびた黄色～褐色。子嚢は円筒形、8 個の胞子を生じ、200-400×19-22 µm。子嚢胞子は楕円形、平滑、無色～黄色味を帯、19-23×12-14 µm。側糸は糸状、先端は球状に膨大。

【生活史】

春に発生する。

【生育環境】

草地および林内に生じる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 草地　【陸域_平地部】森林, 草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

標本による分布地は青森と北海道。日本および北米、ヨーロッパ、オーストラリアに分布が知られる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

最近の報告はない。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S.Imai	DD
第４次 2019:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S.Imai	DD
第４次 2018:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S.Imai	DD
第４次 2017:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S.Imai	DD
第４次 2015:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S.Imai	DD
第４次:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S.Imai	DD
第３次:	トガリフカアミガサタケ	*Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S. Imai	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）] 富山県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Imai, S., 1954 Elvellaceae Japoniae. Sci. Rept. Yokohama Nat. Univ. Sect. II 3: 1-37.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Morchella semilibera has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Morchella semilibera* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

チャワンタケ目 Pezizales　ピロネマキン科 Pyronemataceae　　日本固有

アカハナビラタケ

Ascosparassis shimizuensis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 希少性が高く、採集例が不足している。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　カリフラワーを思わせるような花弁状の特徴的な子実体を形成する子嚢菌類のきのこである。当初ササ林地上から得られたが、その後の標本は、倒木や切り株などから得られている。希少性が認められるが分布域は広く、生態に関する情報が不足している。

基礎情報

【形態】

直径 5-7 cm のカリフラワー状の子実体が束生して生じ、強靭な肉質、淡紅色。側糸は糸状で細く、分枝せず、先端が湾曲。子嚢は円筒形、先端のヨード反応は陰性、74-80×5-6 μm。子嚢胞子は 5.5-6.5×3.5-4 μm、円筒形、無色、油球 2 個を含む。

【生活史】

7～12 月に発生。

【生育環境】

ブナ切り株、アカマツ、ササ林など、生育環境の一貫性が不明。北日本での分布が示唆されるが、標本数が少ない。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

青森県、山形県、宮城県、東京都。

現在の生育状況

【分布域の現況】

不明。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

調査によって、採集される場合もある。証拠標本数の増加と依存環境の解明が求められる。

存続を脅かす要因

森林伐採など。

要因の区分：	（過去）	不明, 森林伐採
	（現在）	不明, 森林伐採

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第４次 2019:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第４次 2018:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第４次 2017:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第４次 2015:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第４次:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第３次:	アカハナビラタケ	*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[最重要希少野生生物（A ランク）] 栃木県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kobayasi, Y., 1960. *Ascosparassis*, a new genus of discomycetes. Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, 51: 44-46.
- 丸山厚吉・安藤洋子，2000. アカハナビラタケ *Ascosparassis shimizuensis* カラー図. 日菌報，41: 61-62.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ascosparassis shimizuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ascosparassis shimizuensis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

チャワンタケ目 Pezizales　ベニチャワンタケ科 Sarcoscyphaceae

ヒュウガサラタケ

Aurophora dochmia

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 現時点では、九州の 1 箇所からしか知られていない。国内での採集品は 1 点のみで、その後の追加例がなく、消長など、生育環境などについて、十分な評価ができない。肉眼的な大きさなので、継続的・探索的な調査によって、新たな産地が発見される可能性がある。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

1999 年の宮崎県での採集例以来、報告がない希少な菌類である。

基礎情報

【形態】

子嚢盤は直径 9-13 mm、短い柄を有し、皿型で白色。子嚢は 8 胞子性、棍棒形で先端はメルツァー試薬で染色されない。子嚢胞子は 22.5-27.5×10-15 μm。楕円形～レモン型。表面に 4-6 本の条線を持ち無色で、1-2 個の油滴を含む。側糸は糸状、先端は複数に分枝する。

【生活史】

不明。

【生育環境】

腐朽材に発生。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

九州の暖温帯林からの 1 例のみ。海外ではオーストラリア、ブラジル、コスタリカ、メキシコなどからの報告例がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では宮崎県のみ。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A.Curtis) Seaver	DD
第４次 2019:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A.Curtis) Seaver	DD
第４次 2018:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A.Curtis) Seaver	DD
第４次 2017:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A.Curtis) Seaver	DD
第４次 2015:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A.Curtis) Seaver	DD
第４次:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A.Curtis) Seaver	DD
第３次:	ヒュウガサラタケ	*Phillipsia dochmia* (Berk. & M.A. Curtis) Seaver	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 長尾幸英・黒木秀一，2001．宮崎県および隣接域の盤菌類(1)．宮崎県総合博物館研究紀要，22: 143-151．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aurophora dochmia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aurophora dochmia* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

タフリナ目 Taphrinales　タフリナ科 Taphrinaceae

タンポポ浮腫病菌

Protomyces pachydermus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 【判断理由】 宿主はカントウタンポポである。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　京都市で採集されたシロバナタンポポに発生したが、1955 年の採集以降は報告がなく、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

酵母型。造嚢細胞（40～50×37～45 μm）より発芽した子嚢（45～100×30～60 μm）は円筒形、内部には出芽増殖をする多数の子嚢胞子が形成される。

【生活史】

浮腫内には造嚢細胞が充満する。造嚢細胞より発芽した子嚢から出芽胞子が放出され、赤色の酵母様コロニーを形成する。

【生育環境】

5 月に、タンポポの葉および花梗に浮腫を生じる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】草地　【陸域_平地部】草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道、東京都、神奈川県、長野県に知られる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

京都市での採集以降は正式な報告がない。いずれも標本は 1955 年以前に採集されたもので、近年の採集例はない。セイヨウタンポポの増加にともない、寄主となる在来種のタンポポ類およびその発生環境の減少による絶滅が危惧される。現状の分布を確認するための調査の実施と発生地を緊急に保全する施策が望まれる。

【生育地の現況】

タンポポの葉および花梗。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

地域の開発などにともなって寄主となる在来種のタンポポ類が減少すること。

要因の区分：	（過去）	基質・基物の減少及び消失
	（現在）	基質・基物の減少及び消失

特記事項

タンポポに浮腫をつくる本属菌のまれな種である。ただし、観察例の減少は、観察者の減少によるところも大きいと推察される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thüm.	CR+EN
第４次 2019：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thüm.	CR+EN
第４次 2018：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thüm.	CR+EN
第４次 2017：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thüm.	CR+EN
第４次 2015：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thüm.	CR+EN
第４次：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thüm.	CR+EN
第３次：	タンポポ浮腫病菌	*Protomyces pachydermus* Thuem.	CR+EN
第２次：	タンポポ浮腫病菌（新称）	*Protomyces pachydermus* Thuem.	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 伊藤誠哉，1964．*Protomyces pachydermus* Thuemen．日本菌類誌，3: 194-195．
- Thümen, F. von, 1874. Eine neue *Protomyces* species. Hedwigia, 13: 97-98.
- Tubaki, K., 1957. Biological and cultural studies of three species of *Protomyces*. Mycologia, 49: 44-54.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Protomyces pachydermus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Protomyces pachydermus* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland

Threat types:	Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

タフリナ目 Taphrinales　タフリナ科 Taphrinaceae　　日本固有

シイノキ類葉ぶくれ病菌

Taphrina kusanoi

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 過去の採集例から、基質はシイに限定されており、採集例も限られる。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　東京都付近のシイノキで多く発生する日本固有種。1954 年の採集以降は報告がなく絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

子嚢は円筒形で脚胞を持たず、36～80×12～20 μm。子嚢胞子および子嚢胞子からの出芽細胞（2～5×2～3 μm）で充たされる。

【生活史】

主に初夏～夏に発生。酵母型の無性生殖時代を持つ。シイの葉に紅緑色の光沢のある浮腫を作り、表面に子嚢を裸出する。

【生育環境】

照葉樹林。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

東京都、千葉県、神奈川県、静岡県で発生が知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

茨城県、東京都、神奈川県、静岡県に分布が知られるが、最近の関東近郊での観察例はない。現在、生品が検出されず、照葉樹林の伐採や地域の開発にともなって絶滅が危惧される。

【生育地の現況】

スダジイ（葉ぶくれ病）。

【個体数の現況】

1955 年以降、採集されていない。

存続を脅かす要因

照葉樹林の伐採や地域の開発によるホストの減少。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 基質・基物の減少及び消失
	（現在）	森林伐採, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第４次 2019：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第４次 2018：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第４次 2017：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第４次 2015：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第４次：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第３次：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第２次：	シイノキ類葉ぶくれ病菌	*Taphrina kusanoi* Ikeno	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ikeno, S., 1903. Die Sporenbildung von Taphrina-Arten. Flora, 92: 1-31.
- 伊藤誠哉，1964．*Taphrina kusanoi* Ikeno．日本菌類誌，3: 211-212．
- 周藤靖雄．1998．シイノキ類葉ぶくれ病．岸國平（編）日本植物病害大辞典 p.1136．全国農村教育協会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Taphrina kusanoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Taphrina kusanoi* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest

Threat types:	Logging and wood harvesting, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	細矢剛（国立科学博物館） Tsuyoshi Hosoya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

オニノケヤリタケ

Queletia mirabilis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

唯一の採集例がある長野県小諸市においても、標本数は 1 点のみである。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

国内で知られる唯一の採集地が長野県小諸市の 1 地点のみである。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は 1986 年に長野県から記録されているが、その後の発見例はなく、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

子実体は幼菌時球形、約 2.5～4 cm、黄白色、地中や木片内に埋生。成熟すると中実繊維質の柄が伸長し高さ約 10 cm となる。柄の先端に頭部があり、はじめ白～黄白色、担子胞子の成熟とともに殻皮が不規則に剥落し、褐色の胞子塊が露出する。頭部と柄部は離れやすい。

【生活史】

不明。

【生育環境】

唯一の確認地点は長野県小諸市の木材置き場であり、当時（1986 年）とは状況が大きく変化している。1986 年から存在していた製材所は市内に 2 か所あり、それらを中心とした継続調査が必要である。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】その他　【陸域_平地部】住宅地, 商業・工業施設, 市街緑地
国土地域区分：	（3）都市地域

【分布域】

北米、欧州に分布する。日本では 1986 年に長野県小諸市で初めて採集され、それ以降記録がない。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1986 年以降発見例が無く、分布の実態や生育環境も不明な点も多い。現在知られている発生地の環境が失われれば消滅する可能性が高い。

【生育地の現況】

日本における唯一の採集地は、長野県小諸市の材木置場である。市内には現在も数か所の製材所があるものの、採集当時とは環境が大きく異なっている可能性がある。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

元々局所的な分布を示していたことに加え、発生環境における木材基質の存在が発生に適していた可能性がある。現在の環境は最後の発生以来、激変している可能性が高く、今後消滅する危機にある。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	（現在）	分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第４次 2019：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第４次 2018：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第４次 2017：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第４次 2015：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第４次：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第３次：	オニノケヤリタケ	*Queletia mirabilis* Fr.	CR+EN
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Coker, W. C. and J. N. Couch, 1928. The Gasteromycetes of the Eastern United States and Canada. Univ. North Carolina Press. 201pp. pls. 1-123.
- 今関六也・本郷次雄（編著），1989．原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪．315pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Queletia mirabilis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Queletia mirabilis* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Other 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Residential area, Commercial area/Industrial area, Urban green area
Threat types:	Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館） Kentaro Hosaka

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

ケシボウズタケ

Tulostoma brumale

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌と同定された標本は、本州の関東地方から近畿地方、さらに四国に至る全国各地より得られており、本菌の国内における分布の範囲そのものは広いことが推察される。一方で、近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の産地は局地的であり、各産地における標本数も限定的であることから、どの生育地においても生育密度が低く希少であると判断される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　子実体は粉状の胞子塊が充満した頭部と、木質で硬い柄からなる。頭部の表面を覆う内皮は平滑～あばた状となる。本州および四国にかけての広い地域の砂浜海岸に分布するが、本菌と形態的に類似するアバタケシボウズタケとの識別や両者の異同について不明確な点が多く、日本産ケシボウズタケについては分類学的な再検討が必要である。

基礎情報

【形態】

子実体は球形～類球形の頭部と、木質で硬い柄からなる。幼時は地中生で、成長に伴い柄が伸長して地表に露出する。頭部の表面は外皮と内皮からなる。外皮は砂粒が密に付着し、黄褐色～赤褐色、膜質で消失性、子実体が成熟すると断片化して頭部から容易に剥落するが、頭部と柄の接合面付近では剥落しにくく残存する。内皮は紙質、平滑～あばた状でクリーム色～灰白色、成熟すると頂部に孔口が開く。孔口は円筒形で突出する。頭部の内部には粉状で黄褐色～さび色の胞子塊が充満する。柄はほぼ上下同大で基部はやや膨らみ、表面は淡褐色の鱗片に覆われるが、のちに白色を帯びる。本菌は、形態的に類似するアバタケシボウズタケ *T. adhaerens* とは孔口の直径の大きさや、担子胞子の表面構造の違いにより識別できるとされるが、両者の異同は不明確であり、日本産ケシボウズタケについては分類学的な再検討が必要である。

【生活史】

ほぼ年間を通して海岸の砂地に発生するが、詳しい生活史は不明である。

【生育環境】

イネ科やカヤツリグサ科などの植物が繁茂する砂浜海岸に、ほぼ年間を通して発生する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

茨城県・千葉県・静岡県・愛知県・三重県・兵庫県・徳島県など。分布は全国的だが、各生育地点は局地的である。ただし、本菌と形態的に類似するアバタケシボウズタケとの識別は不明確であり、両者が混同されている可能性もある。国外では、北アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌は、本州の関東地方から近畿地方、さらに四国に至る全国各地より得られており、本菌の国内における分布の範囲そのものは広いことが推察される。一方で、近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の産地は局地的である。また、本菌と形態的に類似するアバタケシボウズタケとの識別や両者の異同は不明確であるため、分布状況の正確な把握は困難である。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は開発や海岸侵食による影響を受けており、海浜環境の変化、特に海浜植生の継続的な縮小に伴って減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成などに起因した産地局限。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，土地造成，分布・産地局限
	（現在）	海岸開発，土地造成，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第４次 2019：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第４次 2018：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第４次 2017：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第４次 2015：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第４次：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第３次：	ケシボウズタケ	*Tulostoma brumale* Pers.	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

大阪府[NT] 兵庫県[要調査種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Asai, I. and Y. Asai, 2008. New records of two *Tulostoma* species from Japan. Mycoscience, 49: 399-402.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tulostoma brumale has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tulostoma brumale* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	―

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

ナガエノホコリタケ

Tulostoma fimbriatum* var. *campestre

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

近年、本菌と同定された標本は、北海道から九州に至る日本各地で得られており、本菌は日本列島において広範囲に分布すると推察される。一方で、近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本菌として正確に同定された標本の既存の産地は局地的で、海岸植物が繁茂する砂地に限られており、かつ各生育地における標本数も少ない。これらのことから、本菌の生育密度は日本国内において低く、希少であると判断される。なお、本菌の生活史や分類学的な位置づけ、特に、本菌の基準種であるアラナミケシボウズタケとの識別について不明確な点が多く、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る既知情報が少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は粉状の胞子塊が充満した頭部と、木質で硬い柄からなる。北海道から九州に至る広い地域の砂浜海岸に分布するが、本菌の基準種であるアラナミケシボウズタケとの識別や両者の異同について不明確な点が多く、分類学的な再検討が必要である。

基礎情報

【形態】

子実体は球形～類球形の頭部と、木質で硬い柄からなる。幼時は地中生で、成長に伴い柄が伸長して地表に露出する。頭部の表面は外皮と内皮からなる。外皮は砂粒が密に付着し、淡褐色～黄褐色、膜質で消失性。内皮は紙質、平滑でクリーム色～黄土色あるいは灰褐色、成熟すると頂部に孔口が開く。孔口は乳頭状にやや突出し、周囲は淡褐色～灰褐色でしわのある膜状。頭部の内部には粉状でさび色～黄土色の胞子塊が充満する。柄の表面は赤褐色～暗褐色の鱗片に覆われ、基部はやや膨らむ。本菌の基準種であるアラナミケシボウズタケは、孔口が平坦あるいは不規則にやや隆起し周囲が綿毛状になるとされるが、形態に基づく両者の識別は困難である。

【生活史】

ほぼ年間を通して海岸の砂地に発生するが、詳しい生活史は不明である。

【生育環境】

イネ科やカヤツリグサ科などの植物が繁茂する砂浜海岸に、ほぼ年間を通して発生する。

生育環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】草地, 市街緑地, 砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (3) 都市地域, (5) 沿岸域

【分布域】

日本では北海道、茨城県、千葉県、新潟県、富山県、石川県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、香川県、愛媛県、大分県、鹿児島県において本菌と同定された標本が採集され報告されている。ただし、本菌の基準種であるアラナミケシボウズタケとの識別は不明確である。国外では、南極大陸をのぞく世界各地に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道から九州にかけての、イネ科やカヤツリグサ科などの植物が繁茂する良好な砂浜海岸に分布する。本菌は、国内の広い範囲に分布すると推察されるが、その基準種であるアラナミケシボウズタケとの識別や両者の異同は不明確であるため、分布状況の正確な把握は困難である。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は開発や海岸侵食による影響を受けており、海浜環境の変化、特に海浜植生の継続的な縮小に伴って減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成などに起因した産地局限。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，土地造成，分布・産地局限
	（現在）	海岸開発，土地造成，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G.Moreno	DD
第４次 2019：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G.Moreno	DD
第４次 2018：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G.Moreno	DD
第４次 2017：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G.Moreno	DD
第４次 2015：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G.Moreno	DD
第４次：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G.Moreno	DD
第３次：	ナガエノホコリタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G. Moreno	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

千葉県[要保護生物（C）] 三重県[VU] 京都府[絶滅寸前種] 大阪府[VU] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 松田一郎，1965．新潟砂丘に見出された 2 種のケシボウズタケ *Tulostoma*．日本菌学会会報，6: 17-19．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tulostoma fimbriatum var. *campestre* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain Beach】Grassland, Urban green area, Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©糟谷大河（慶應義塾大学）



©糟谷大河（慶應義塾大学）

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

アラナミケシボウズタケ

Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

近年、本菌と同定された標本は、関東の太平洋沿岸および北陸の日本海沿岸で得られており、本菌は本州においては広い範囲に分布すると推察される。一方で、近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本は相対的に少なく、既存の産地も局地的で、かつ各生育地における標本数も少ない。これらのことから、本種の生育密度は日本国内において低く、希少であると判断される。なお、本菌の生活史や分類学的な位置づけ、特に、本種の種内分類群（変種）であるナガエノホコリタケとの識別について不明確な点が多く、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る既知情報が少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　子実体は粉状の胞子塊が充満した頭部と、木質で硬い柄からなる。本州の広い地域の砂浜海岸に発生するが、本種の種内分類群（変種）であるナガエノホコリタケとの識別や両者の異同について不明確な点が多く、分類学的な再検討が必要である。

基礎情報

【形態】

子実体は球形～類球形の頭部と、木質で硬い柄からなる。幼時は地中生で、成長に伴い柄が伸長して地表に露出する。頭部の表面は外皮と内皮からなる。外皮は砂粒が密に付着し、淡褐色～黄褐色、膜質で消失性。内皮は紙質、平滑でクリーム色～黄土色あるいは灰褐色、成熟すると頂部に孔口が開く。孔口は平坦あるいは不規則にやや隆起し褐色で綿毛状。頭部の内部には粉状でさび色～黄土色の胞子塊が充満する。柄の表面は赤褐色～暗褐色の鱗片に覆われ、基部はやや膨らむ。本種の種内分類群（変種）として扱われているナガエノホコリタケは、孔口が乳頭状にやや突出するとされるが、形態に基づく両者の識別は困難である。

【生活史】

ほぼ年間を通して海岸の砂地に発生するが、詳しい生活史は不明である。

【生育環境】

イネ科やカヤツリグサ科などの植物が繁茂する砂浜海岸に、ほぼ年間を通して発生する。

生育環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】草地, 砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

日本では茨城県、千葉県、新潟県、富山県において本種と同定された標本が採集され報告されている。石川県、静岡県、愛知県、三重県、京都府、大阪府、愛媛県からの記録は、本種の種内分類群（変種）として扱われているナガエノホコリタケとの識別が不明確である。国外では、南極大陸をのぞく世界各地に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

茨城県、千葉県、新潟県、富山県ではイネ科やカヤツリグサ科などの植物が繁茂する良好な砂浜海岸に分布する。本菌は、本州においては広い範囲に分布すると推察されるが、本種の種内分類群（変種）として扱われているナガエノホコリタケとの識別が不明確な状況もあり、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の産地はやや局所的である。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は開発や海岸侵食による影響を受けており、海浜環境の変化、特に海浜植生の継続的な縮小に伴って減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成などに起因した産地局限。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，土地造成，分布・産地局限
	（現在）	海岸開発，土地造成，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *fimbriatum*	DD
第４次 2019：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *fimbriatum*	DD
第４次 2018：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *fimbriatum*	DD
第４次 2017：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *fimbriatum*	DD
第４次 2015：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *fimbriatum* [= *Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum* Fr.]	DD
第４次：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *fimbriatum* [= *Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum* Fr.]	DD
第３次：	アラナミケシボウズタケ	*Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum* Fr.	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

茨城県[絶滅危惧Ⅱ類] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 松田一郎，1965．新潟砂丘に見出された 2 種のケシボウズタケ *Tulostoma*．日本菌学会会報，6: 17-19.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tulostoma fimbriatum var. *fimbriatum* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain Beach】Grassland, Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©糟谷大河（慶應義塾大学）　©糟谷大河（慶應義塾大学）

執筆者:	糟谷大河（慶應義塾大学）
Author:	Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

ウロコケシボウズタケ

Tulostoma squamosum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①④

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌は関東以西に広域に分布するものの、既知のいずれの生育地においても発生数は少なく、継続的な発生例はほとんどないことから、生育密度が低く希少と判断される。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

本菌は石灰岩地や、石灰あるいはセメントを集積した環境などに特異的に発生するといった特殊な環境条件に生育を依存している。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は粉状の胞子塊が充満する類球形の頭部（径 10～15 mm）と、木質で硬く、表面が鱗片状にささくれる柄（長さ 50～100 mm）からなる。本州（関東以西）から四国、九州にかけて、主に石灰岩質の土壌の森林内などに発生するが、各地域における分布は局所的で、かつ森林伐採などによる生育地の環境悪化により分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体は類球形の頭部と、木質で硬い柄から成る。幼時は地中生で、成長に伴い柄が伸長して地表に露出する。頭部の表面は外皮と内皮からなり、外皮は赤褐色～暗褐色の膜質で消失性であるが、特に頭部の下部では老成しても鱗片状に一部が残存し、内皮は紙質、淡褐色～黄褐色で平滑、外皮が剥落した部分があばた状となることもある。成熟すると、頭部の頂端に小型で筒状に顕著に突出した孔口が開く。頭部の内部には粉状で黄土色～さび色の胞子塊が充満する。柄の表面は赤褐色～暗褐色で鱗状にささくれる。

【生活史】

子実体は主に夏～秋にかけて発生するが、詳しい生活史は不明である。

【生育環境】

石灰岩地や、森林内の道路の縁の石灰やセメントを集積した環境に特異的に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林, 田地・畑地, 市街緑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (3) 都市地域

【分布域】

日本では群馬県、神奈川県、長野県、愛知県、三重県、京都府、大阪府、高知県、熊本県の石灰岩地や、森林内の道路の縁の石灰やセメントを集積した環境に発生することが知られている。国外ではヨーロッパや北アメリカなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌は、本州（関東以西）から九州に至る広い地域に分布し、その国内における分布の範囲自体は広いと推察される。一方で、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の生育地は局所的であり、その一部は森林伐採や、道路開発などに伴う土地造成による悪影響を受けており、現在知られている発生地の環境が失われれば減少が懸念される。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は森林伐採や、道路開発などに伴う土地造成による悪影響を受けており、現在知られている発生地の環境がそれらにより失われれば減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

土地造成、道路建設などを目的とした森林伐採。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* Pers.	VU
第４次 2019：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* Pers.	VU
第４次 2018：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* Pers.	VU
第４次 2017：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* Pers.	VU
第４次 2015：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* Pers.	VU
第４次：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* J.F.Gmel.	VU
第３次：	ウロコケシボウズタケ	*Tulostoma squamosum* Pers.	VU
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

三重県[EN] 京都府[絶滅寸前種]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 山本幸憲・山本理佐恵，2007．四国産腹菌類(1)．高知県の植物，20: 91-125.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tulostoma squamosum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tulostoma squamosum* is listed as DD under criteria ①④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies. ④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ハラタケ科 Agaricaceae

ウネミケシボウズタケ

Tulostoma striatum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌と同定された標本は、北海道、本州から九州に至る全国各地より得られており、本菌の国内における分布の範囲そのものは広いことが推察される。一方で、近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の産地は局地的であり、各産地における標本数も少ないことから、どの生育地においても生育密度が低く希少であると判断される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　子実体は粉状の胞子塊が充満した頭部と、木質で硬い柄からなり、担子胞子の表面が筋状～うね状の隆起に覆われる特徴を持つ。北海道、本州から九州に至る広い地域の砂浜海岸に発生するが、各地域における分布は局所的である。

基礎情報

【形態】

子実体は球形～類球形の頭部と、木質で硬い柄からなる。幼時は地中生で、成長に伴い柄が伸長して地表に露出する。頭部の表面は外皮と内皮からなり、外皮は砂粒が密に付着し、膜質で消失性。内皮は紙質、クリーム色～黄土色あるいは灰褐色、成熟すると頂部に孔口が開く。頭部の内部には粉状で黄土色の胞子塊が充満する。柄の表面は黄褐色～灰褐色。担子胞子の表面に筋状～うね状の隆起がある。

【生活史】

ほぼ年間を通して海岸の砂地に発生する。

【生育環境】

イネ科やカヤツリグサ科などの植物が繁茂する砂浜海岸に、ほぼ年間を通して発生する。

生育環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】草地, 砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (5) 沿岸域

【分布域】

日本では北海道、青森県、福島県、茨城県、千葉県、新潟県、富山県、石川県、宮崎県などの砂浜海岸に分布する。国外ではアジア、オセアニア、南アフリカ、南北アメリカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌は、北海道、本州から九州に至る全国各地の砂浜海岸に分布し、その国内における分布の範囲自体は広いことが推察される。一方で、近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の産地は局地的である。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は開発や海岸侵食による影響を受けており、海浜環境の変化、特に海浜植生の継続的な縮小に伴って減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

海岸開発、土地造成などに起因した産地局限。

要因の区分：	(過去)	海岸開発, 土地造成, 分布・産地局限
	(現在)	海岸開発, 土地造成, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G.Cunn.	DD
第４次 2019：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G.Cunn.	DD
第４次 2018：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G.Cunn.	DD
第４次 2017：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G.Cunn.	DD
第４次 2015：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G.Cunn.	DD
第４次：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G.Cunn.	DD
第３次：	ウネミケシボウズタケ	*Tulostoma striatum* G. Cunn.	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

福島県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅱ類] 千葉県[要保護生物（C）] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 糟谷大河・星野保・竹橋誠司・内田暁友，2011．北海道東部の海浜から新たに採集された海浜生担子菌類 2 種，ウネミケシボウズタケとヒメカンムリツチグリ．知床博物館研究報告，32: 19-24.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tulostoma striatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tulostoma striatum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain Beach】Grassland, Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　テングタケ科 Amanitaceae

コササクレシロオニタケ

Amanita squarrosa

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

原記載による生育地はアカマツ・コナラ林という里山林であるため本種の生育可能な環境は減少していると推定される。現在知られている発生地は，原記載地（鳥取県・滋賀県）に加え、公開されている標本の採集地（京都府）のみであるため、発生環境についての情報は少なく、採集例も非常に少ないことから、発生頻度の低い、かなり希な種と考えられる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　全体が白色のテングタケ類で、傘表面に角形のいぼ、柄にささくれ状鱗片、内被膜は綿毛状の内被膜を持つ外生菌根菌で、アカマツ・コナラ林という里山的な環境に発生する種であるため本種の生育可能な環境は減少していると推定される。採集例が非常に少なく、生息環境はやや不明であり、発生が知られている森林環境の維持・保全が必要である。

基礎情報

【形態】

傘は 30-45 mm、楕円形から饅頭形、平らに開く、条線を欠く、角形のいぼをもつ。ひだは離生、密。柄は 75-120×5-10 mm、上方に細まり、基部は紡錘状に膨らむ（～20 mm）、柄の表面にはいちじるしいささくれを生じる。つばは綿質-クモの巣状、消失性。

ともに綿質・クモの巣状の内被膜をもつ形態が類似するコシロオニタケとは、胞子形態（本種：コシロオニタケ）＝（類球形から広楕円形・8-10×7-9 µm：長楕円形・8.5-12×5.5-7 µm）と，柄の表面の様子（下半分においてさかむけ状のいちじるしいささくれを生じる：ささくれ状の鱗片を欠く）で区別できる。

【生活史】

生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

生育環境については不明である。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

滋賀県・鳥取県・京都府。

現在の生育状況

【分布域の現況】

採集例が非常に少ないため不明。

中国ではテングタケ属の総合的な調査がおこなわれているが（Cui et al. 2018），本種の記録はない。しかし他のブナ科等と共生するテングタケ属種と同様、東アジアのシイ・カシ林に分布する種である可能性もある。

【生育地の現況】

既知の生育地であるアカマツ・コナラ林という里山的な環境は，常に伐採や管理放棄の危機にさらされており，加えて近年マツ枯れが全国的に進行しているため，本種の生育可能な森林は減少していると推定される。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

森林伐採、宅地開発、里山の管理放棄、ナラ枯れ、マツ枯れ。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

	（現在）	森林伐採，土地造成，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第４次 2019：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第４次 2018：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第４次 2017：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第４次 2015：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第４次：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第３次：	コササクレシロオニタケ	*Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Nagasawa, E. and T. Hongo, 1984. New taxa of *Amanita*: Three new species and one new form from western Japan. Trans. mycol. Soc. Japan, 25: 367-376.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Amanita squarrosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Amanita squarrosa* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　テングタケ科 Amanitaceae　　日本固有

ムニンヌメリカラカサタケ

Limacella olivaceobrunnea

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③				
基準 A:　－	基準 B:　データ不足	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 【判断理由】 小笠原諸島のみから知られる固有種。母島の 1 地点のみで確認されている。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

小笠原諸島の母島・庚申塚で 1977 年に採集されて以来、信頼のおける再発見例がない。森林内の地上に発生すること以外には生態的特徴も不明である。

基礎情報

【形態】

傘は径 5-6 cm、粘性があり、オリーブブラウン、表面は茶色で粘性のある鱗片に覆われる。ヒダは離生、白色、密。柄は長さ約 7 cm、太さ頂部で 8-10 mm、基部で 11-15 mm、表面は粘性。つばは消失性。胞子は広楕円形で 6.5-7.5×5.5-7 μm、非アミロイド。

【生活史】

不明。唯一の標本は 1977 年 11 月 30 日に採集されている。

【生育環境】

湿潤な森林内の地上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都。小笠原諸島母島庚申塚で 1977 年に 1 回採集されて以来、信頼のおける再発見例はない。

現在の生育状況

【分布域の現況】

不明である。

【生育地の現況】

最初に採集された 1970 年代の環境は保たれている。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

森林における外来樹種の増加や森林伐採などが考えられるが、詳細は不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第４次 2019:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第４次 2018:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第４次 2017:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第４次 2015:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第４次:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第３次:	ムニンヌメリカラカサタケ	*Limacella olivaceobrunnea* Hongo	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo, T., 1978. Higher fungi of the Bonin Islands II. Rept. Tottori Mycol. Inst., 16: 59-65.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Limacella olivaceobrunnea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Limacella olivaceobrunnea* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者:	保坂健太郎（国立科学博物館） Kentaro Hosaka

Author:

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　カヤタケ科 Clitocybaceae　　日本固有

ハチマキイヌシメジ

Clitocybe vittatipes

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 【判断理由】 分布が知られているのは小笠原諸島の母島、石門山（東京都）であるが 1976 年に採集されたあと、発生が確認されていない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

小笠原母島石門山から 1939 年に記載された日本固有種。子実体はカヤタケ形、緑褐色を帯び小形。1976 年に母島石門山から再度採集されたが（報告は 1980 年）、小笠原母島以外の分布は確認されていない。

基礎情報

【形態】

傘は径約 5 cm、中央はくぼむ、表面は暗淡黄白色、やや繊維状あるいはほとんど無毛、縁は薄く淡色、内側に巻く。肉は水潤状灰色、無味無臭。ひだは垂生、白色、やや疎から中程度に密、ひだの縁は波状あるいは鋸歯状、柄に垂生する部分は帯褐灰色からオリーブ褐色。柄は 4×0.5 cm、上下同大、オリーブ灰色、類軟骨質、表面は繊維状、中空。担子胞子は類球形、平滑、4-5 μm、胞子紋は白色。

【生活史】

秋に発生することが知られているが、生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

小笠原諸島、母島の林内の地上。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原諸島、母島）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布が知られているのは小笠原諸島の母島、石門山（東京都）であるが，1939 年に記載され，1976 年に再度同じ地点で採集されたあと、発生が確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S.Ito & S.Imai	DD
第４次 2019:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S.Ito & S.Imai	DD
第４次 2018:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S.Ito & S.Imai	DD
第４次 2017:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S.Ito & S.Imai	DD
第４次 2015:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S.Ito & S.Imai	DD
第４次:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S.Ito & S.Imai	DD
第３次:	ハチマキイヌシメジ	*Clitocybe vittatipes* S. Ito & S. Imai	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo, T., 1980. Higher fungi of the Bonin Islands Ⅲ. Reports of The Tottori Mycological Institute, 18: 149-155.
- Ito, S. & S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 9-20.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Clitocybe vittatipes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clitocybe vittatipes* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　イッポンシメジ科 Entolomataceae

ワカクサウラベニタケ

Entoloma incanum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 新産報告の生育地はアカマツやコナラが混じる里山林であるため広く西日本の各地に分布している可能性があるが、現在知られている発生地は少なく、発生頻度が非常に低いと考えられる。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　落葉落枝などから発生する腐生性の菌だが、コナラやアカマツが見られる里山的な環境に発生する菌であり、里山的な環境が減少しつつある現在、年々個体数は減少していると推定される。

基礎情報

【形態】

子実体の傘は径 1-3 cm、丸山形または頂部の切断された円錐形からほぼ平らに開く、傘表面はオリーブ緑色、オリーブ褐色、黄緑色、黄色、湿時やや放射状の条線をあらわす、中央部は細鱗片におおわれ、時に多少へそ状にくぼむ。ひだは直生またはやや垂生し、疎、白色からやや緑色をおび，のちピンク色となる。柄は 2-6 cm×2-3 mm、傘とほぼ同色で、手で触れると速やかに青緑色にかわる（特に下部)。肉はオリーブ緑色、傷をつけると青変する。

【生活史】

生活史については不明である。

【生育環境】

牧草地や山林内の路傍。最初の報告（福井県）ではアカマツ・コナラ林内の小径わき，夏に発生。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】草地　【陸域_平地部】森林, 草地
国土地域区分：	(1）奥山自然地域,(2）里地里山・田園地域

【分布域】

千葉県・東京都・福井県・兵庫県。欧州、ロシア、北米・南米，オーストラリア。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種が発生するとされているアカマツ林やアカマツ・コナラ林（里山林）は、西日本を中心に広く見られるが、人間の生活圏にあり常に伐採の対象となっている。加えて近年マツ枯れやナラ枯れが全国的に進行している。以上のような理由で、本種の分布域は年々減少しつつあると考えられる。

【生育地の現況】

生育地は人間の生活圏にあり常に伐採の対象となっている。また近年マツ枯れやナラ枯れが全国的に進行しているため、生育環境は悪化している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、宅地開発、里山の管理放棄、ナラ枯れ、マツ枯れ。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 草地開発, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採, 草地開発, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/

		自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第４次 2019:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第４次 2018:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第４次 2017:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第４次 2015:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第４次:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第３次:	ワカクサウラベニタケ	*Entoloma incanum* (Fr.) Hesler	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

兵庫県[B ランク]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hesler, L. R., 1967. *Entoloma* in Southeastern North America. Beihefte zur Nova Hedwigia, 23: 1-196.
- 本郷次雄，1997．日本菌類誌資料（50）．日本菌学会報告，38: 99-100.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Entoloma incanum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Entoloma incanum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Land development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヌメリガサ科 Hygrophoraceae　　日本固有

クロゲキヤマタケ

Hygrocybe hahashimensis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 【判断理由】 小笠原諸島、母島、桑ノ木山（東京都）から 1 回のみ採集されている日本固有種の可能性が高い種。日本の他の地域からの情報は不明。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

小笠原母島で 1977 年に採集され 1978 年に記載された日本固有種。子実体は傘に暗褐色の微細な繊維状鱗片を帯びる点が特徴。小笠原母島以外の分布は確認されていない。

基礎情報

【形態】

傘は径約 5 cm、丸山形、のち平らに開く、表面には粘性なく、黄色から黄橙色、暗褐色で繊維状の細鱗片に覆われ、特に中央部に著しい。傘の縁は波打ち、古くなると浅裂し、湿時条線がみられる。肉は黄色、無味無臭。ヒダは上生から離生、厚く、ろう質、幅 4-7 mm、淡黄色、ひだ縁はややきざぎざ。柄は 4.5-5 cm×約 8 mm、上下同大、円柱状からやや偏圧されており、表面は繊維状、黄色、中実から中空。

【生活史】

生活史については不明である。

【生育環境】

小笠原諸島、母島の、湿潤な陰った森林内の地上に単生。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島、母島、桑ノ木山（東京都）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布が知られているのは小笠原諸島の母島（東京都）であるが 1977 年に採集されたあと、発生が確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、土地造成。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成
	（現在）	森林伐採, 土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2019:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2018:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2017:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2015:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第３次:	クロゲキヤマタケ	*Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo, T., 1978. Higher fungi of the Bonin Islands Ⅱ. Rept. Tottori Mycol. Inst., 16: 59-65.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hygrocybe hahashimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hygrocybe hahashimensis* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館）
Author:	Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヌメリガサ科 Hygrophoraceae　　日本固有

ネッタイアカヌメリガサ

Hygrocybe hypohaemacta

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 【判断理由】 分布が知られているのは小笠原諸島の母島、桑ノ木山（東京都）であるが 1977 年に採集されたあと、発生は確認されていない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

小笠原母島産標本により 1980 年に記載された。変種とするにあたり、基本種の記載者 E.J.H. Corner に小笠原標本を送り相談、形態が異なる点（傘径が大きい、ひだの色が深みを帯びる、担子胞子がやや大形）から、変種あつかいとした。基本種 *Hygrocybe hypohaemacta* と同一種とする考え方もあるが、更なる検討が必要である。国内では小笠原母島以外の分布は確認されていない。

基礎情報

【形態】

傘は 1.8-4.5 cm、丸山形から平らに開く、時に傘中央はくぼむ、表面は平滑、粘性があり、赤色から朱色、古くなると周辺から黄色から淡色となる、傘周は湿時条線がある。肉は赤-朱色、内部は淡色、無味無臭。ヒダは上生から離生・隔生、赤みを帯び、縁は淡色、幅 3-5 mm、厚い。柄は 2-4 cm×3-6 mm、上下同大、あるいは下にむかって細まる、粘性があり、上部は傘と同色、下部は淡色、中実-中空。担子胞子は大小の 2 形があり、卵形-広楕円形。

【生活史】

生活史については不明である。

【生育環境】

小笠原諸島、母島、桑ノ木山、森林内の陰になった地上。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原諸島、母島・桑ノ木山）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布が知られているのは小笠原諸島の母島、桑ノ木山（東京都）であるが 1977 年に採集されたあと、発生が確認されていない。詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、土地造成。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成
	（現在）	森林伐採, 土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2019：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2018：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2017：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次 2015：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第４次：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第３次：	ネッタイアカヌメリガサ	*Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo, T., 1980. Higher fungi of the Bonin Islands Ⅲ. Rept. Tottori Mycol. Inst., 18: 149-155.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hygrocybe hypohaemacta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hygrocybe hypohaemacta* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category. ③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ホコリタケ科 Lycoperdaceae

ハマベダンゴタケ

Bovista dryina

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

近年、日本の砂浜海岸における菌類相の調査は全国各地で行われており、日本の砂浜海岸の菌類多様性や分布状況が把握されつつあるが、これまでに本種として正確に同定された標本は、千葉県富津市産の 1 標本のみである。このことから，本種の生育地は日本国内において局限している可能性が推察される。一方で、既知の標本は 1 点のみであるため、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る採集事例や既知情報が著しく少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は類球形で、黄褐色～灰褐色のとげ状突起からなる外皮と、赤褐色～暗褐色で紙質の内皮に覆われる。これまでに、千葉県富津市の砂浜海岸の 1 地点でのみ採集されており、海浜植物が繁茂する良好な自然の砂浜海岸に依存する可能性がある。

基礎情報

【形態】

子実体は類球形で、径 18～25 mm、表面は外皮と内皮の 2 層からなる。外皮は黄褐色～灰褐色で脱落性のとげ状突起よりなり、内皮は紙質で赤褐色～暗褐色、成熟すると頂部に径 3～5 mm 程度の孔口が開く。子実体の内部には基本体が充満し、成熟すると黄褐色で粉状となる。基本体の下部には小型の無性基部がある。子実体の基部には白色で砂粒が密に付着した菌糸束を持つ。担子胞子は球形～類球形、径 4～5.5 µm、表面には微細ないぼ状突起が散在し、短い小柄がある。

【生活史】

詳細については不明である。

【生育環境】

海浜植物が繁茂する砂浜海岸の地上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

日本での既知の生育地は千葉県富津市のみである。2003 年に標本が採集されて以降、その後の採集例はなく、日本での分布の実態は不明である。国外では南北アメリカ、カナリア諸島より知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌の生育に適した、海岸植物が繁茂し自然で良好な砂浜海岸の多くは、開発や海岸侵食などにより消滅が懸念されているため、本種の生存が脅かされていると推察される。ただし、本菌の既知の生育地は国内では 1 地点のみであり、継続的な採集例もないため、分布状況の正確な把握を進める必要がある。

【生育地の現況】

日本では千葉県富津市の砂浜海岸のみで知られているが、2003 年に採集されて以降、その後の採集例はない。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

海岸開発。

要因の区分：	(過去)	海岸開発

	（現在）	海岸開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第４次 2019：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第４次 2018：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第４次 2017：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第４次 2015：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第４次：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第３次：	ハマベダンゴタケ	*Bovista dryina* (Morgan) Demoulin	DD
第２次：	－	－	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

千葉県[要保護生物（C）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kasuya, T., 2004. Gasteromycetes of Chiba Prefecture, Central Honshu, Japan. I. The family Lycoperdaceae. Journal of Natural History Museum and Institute, Chiba, 8: 1-11.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Bovista dryina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bovista dryina* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ホコリタケ科 Lycoperdaceae　　日本固有

トゲホコリタケ

Lycoperdon yasudae

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

2000 年代以降の調査で、本種として同定された標本は、北海道夕張郡栗山町産の 1 標本のみである。このことから、本種の生育地は日本国内において局限している可能性が推察される。一方で、近年得られた既知の標本は 1 点のみであるため、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る採集事例や既知情報が著しく少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は球形～扁球形で、暗褐色～黒色のとげ状突起からなる外皮と、淡褐色で膜質の内皮に覆われる。本種は現在のところ日本固有とされるが、近年の調査では北海道栗山町の 1 地点でのみ採集されており、分布域、生育環境や生態的特性などに関する情報が不足している。

基礎情報

【形態】

子実体は球形～扁球形、径 18～28 mm、高さ 15～22 mm、基部は狭小となり菌糸束を持つ。子実体の表面は外皮と内皮の 2 層からなる。外皮は暗褐色～黒色で、先端がしばしば湾曲した円錐形のとげ状突起よりなり、老成すると外皮は脱落して内皮の表面に円形の脱落痕を表す。内皮は膜質で淡褐色、成熟すると頂部に孔口が開く。子実体の内部には基本体が充満し、成熟すると暗褐色で粉状となる。基本体の下部には狭小な無性基部がある。担子胞子は球形、径 4～5 μm、表面はとげ状突起に覆われ、脱落性の小柄（長さ 10～16 μm）がある。

【生活史】

詳細については不明である。

【生育環境】

林内の腐植土壌に発生する。近年の調査ではトドマツ林に生える例が報告されているが、詳しい生育環境は不明である。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

既知の生育地は北海道、青森県、宮城県である。現在のところ日本固有とされる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年では、1993 年に青森県で、1999 年に北海道で採集されている。また、2000 年代以降には北海道栗山町で採集されているが、その後の発見例はなく、日本での分布の実態は不明であり、分布状況の正確な把握を進める必要がある。本菌は既知の分布域における継続的な採集例もないため、現在知られている発生地の環境が開発などにより失われれば消滅が懸念される。

【生育地の現況】

北海道、青森県、宮城県の森林のみで知られているが、いずれの地点でも継続的な採集例はなく、詳細については不明である。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

土地造成や、道路など交通インフラ建設を目的とした森林伐採。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第４次 2019：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第４次 2018：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第４次 2017：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第４次 2015：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第４次：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第３次：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) Kreisel	VU
第２次：	トゲホコリタケ	*Lycoperdon yasudae* (Lloyd) KreiselSyn. *Bovistella yasudae* Lloyd	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也・本郷次雄，1989．日本新菌類図鑑(II)．315 pp. 保育社，大阪．
- 安田　篤，1922．菌類雑記（一二七）．植物学雑誌，36: 177-179．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lycoperdon yasudae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lycoperdon yasudae* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　シメジ科 Lyophyllaceae

ナガエノヤグラタケ

Asterophora parasitica

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

ベニタケ科のベニタケ属（クロハツ、シロハツ、コゲイロハツタケ）やチチタケ属（ケシロハツ）などの古い子実体上に発生することから、これらの種が菌根共生するブナ科やマツ科の里山的な林に広く見られもよいはずだが、既知の発生地はほんのわずかで、非常に希な種と考えられる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　ベニタケ科のベニタケ属やチチタケ属などの古い子実体上に、やや寄生的に発生する非常に希な種。本種の個体群は厚壁胞子として森林の土壌中に維持されていると考えられる。既知の発生地はほんのわずかであるため、本種が発生依存するベニタケ科の種が発生する里山的発生環境の保全と同時に、厚膜胞子の感染源が維持されていると考えられる既知の発生地を現状維持・保全していく必要がある。

基礎情報

【形態】

傘は径 2-3 cm、円錐状鐘形、のち丸山形から扁平、鈍中丘を有する、表面は初め白色のち灰色あるいは帯菫灰色、絹状繊維あり、白粉を被むり、乾時永く銀色を保つ。肉は汚灰褐色、薄く、柔軟、味温和、弱い不快臭有。ヒダは灰白色、のち褐色、疎、狭幅、厚い。柄は管状で長く、3-5×0.1 -0.2 cm、同幅、あるいは上方に細まる、白色から灰白色、表面粉状、基部に毛を有し、中空。担子胞子は楕円、卵状、平滑、5 -6×3-4 μm。厚膜胞子はひだに多く、紡錘状楕円形あるいは卵形、厚壁、平滑、淡褐色、12-16×7-10 μm。

【生活史】

担子胞子のほか表面平滑な厚膜胞子を形成する。しかし生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

ベニタケ科のベニタケ属（シロハツ、コゲイロハツタケ）やチチタケ属（ケシロハツ）などの古い子実体上に発生。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・栃木県・長野県・岐阜県・京都府。欧州、ロシア、北米、中米。

現在の生育状況

【分布域の現況】

大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、宅地開発、里山の管理放棄、ナラ枯れ、マツ枯れ。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull.) Singer	DD
第４次 2019：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull.) Singer	DD
第４次 2018：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull.) Singer	DD
第４次 2017：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull.) Singer	DD
第４次 2015：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull.) Singer	DD
第４次：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull.) Singer [= *Asterophora parasitica* (Bull. ex Pers.) Singer]	DD
第３次：	ナガエノヤグラタケ	*Asterophora parasitica* (Bull. ex Pers.) Singer	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Buller, A. H. R., 1924. Researches on Fungi 3. Longmans Green and Co., London. 611 pp.
- 伊藤誠哉，1959．日本菌類誌 第二巻 担子菌類 第五号 マツタケ目・腹菌目．養賢堂，東京．599 pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Asterophora parasitica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Asterophora parasitica* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　シメジ科 Lyophyllaceae

シロタモギタケ

Hypsizygus ulmarius

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

日本での発生状況は、北海道に於いてハルニレなどの落葉広葉樹の倒木あるいは樹幹上（あるいはオヒョウニレ倒木等上）に 9-10 月にかけて（長沢・有田 1988）、あるいはブナ倒木等に発生するとされているが、このような落葉広葉樹の倒木や樹幹が豊富に存在する森林が年々減少している。また国内で報告されている標本の生育環境をみるかぎり、発生条件や環境はあいまいであり、本種の発生も非常に希である. 欧州ではニレ属やブナ属に加え、コナラ属、ハコヤナギ属、ヤマハンノキ属、カバノキ属の倒木や枯れ木に発生することも知られており、日本でも既知のニレ属やブナ属以外の倒木等に発生している可能性もある。長沢・有田（1988）は「本種の生態および分布については調査が不十分である」と述べており、現在においても特定森林の占有面積から本種の分布状況を推定することは困難である。そのため本種の日本における発生状況について定量的に示すことは現段階では困難であり、今回の評価は DD とした。

評価分科会：　菌類分科会

概要

ブナシメジに形態や生態が類似し、ともに優秀な食用菌。ニレ属やブナの材上にキシメジ型の肉質のきのこを形成する。元来発生は希であり，ホストとなるニレ属やブナなどの落葉広葉樹の倒木などが豊富に見られる森林が減少していることから、年々個体数は減少しつつあると推定される。

基礎情報

【形態】

傘径は 5-14 cm、丸山形からほぼ平らに開き、ときにやや中高、表面は黄褐色、あるいは中央で灰褐色を帯び、周辺にむかって淡黄色からほぼ白色、またはときに全体的にほぼ白色となる、表面は平滑で内生繊維状、ときに圧着した微細な鱗片を生じる。肉は白色で厚く、やや強靭。多少穀粉臭があるが、特有な味はない。ひだは湾性から直生、幅広（-18 mm）、やや密、ほぼ白色のち淡黄色。柄は通常中心生、ときに著しく偏心性、しばしば一方に湾曲し、繊維状肉質で比較的強靭、2-10ｃm、上下同大、基部で多少太まり、ときに偽根状となる。表面は白色または基部に向かってほぼ傘と同色となり、初め多少綿毛状、のち平滑、内部は充実し白色。担子胞子は 5-6.5×4-5 μm、亜球形から広楕円形、やや厚膜、胞子紋は淡クリーム色。

【生活史】

生活史については不明である。

【生育環境】

ハルニレなどのニレ属あるいはブナなどの落葉広葉樹の倒木あるいは樹幹上に、9-10 月にかけて発生する。欧州および北米に分布し、欧州ではニレ属（*Ulmus*）、ブナ属（*Fagus*）、コナラ属（*Quercus*）、ハコヤナギ属（*Populus*）、ヤマハンノキ属（*Alnus*）、カバノキ属（*Betula*）などの樹木の枯れ木や生立木の幹に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・宮城県・福島県・群馬県・東京都・石川県・山梨県・京都府・鳥取県。欧州・ロシア・北米。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

発生する樹木の立ち枯れや倒木などが豊富に存在する森林が年々減少している。また生育可能な環境であっても、発生は非常に希である。

【個体数の現況】

分布域及び生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

森林伐採。土地造成。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第４次 2019：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第４次 2018：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第４次 2017：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第４次 2015：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第４次：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第３次：	シロタモギタケ	*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 栃木県[情報不足] 兵庫県[B ランク] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Imai, S., 1938. Studeis on Agaricaceae of Hokkaido I. Journal of the faculty of Agriculture, Hokkaido imperial Univ.（北海道帝国大学農学部紀要）, 43: 1-178.
- 長沢栄史・有田郁夫，1988．*Hypsizygus ulmarius*（シロタモギタケ）および *H. marmoreus*（ブナシメジ）について．菌蕈研究所研究報告，26：71-78.
- Redhead, S. A., 1984. Mycological observation 13-14: *Hypsizygus* and *Tricholoma*. Transactions of the Mycological Society of Japan, 25: 1-9.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hypsizygus ulmarius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hypsizygus ulmarius* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　チャダイゴケ科 Nidulariaceae　　日本固有

カバイロチャダイゴケ

Cyathus badius

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

潜在的な生育適地（リュウキュウマツ林）は小笠原諸島全域に広く分布するが、過去 10 年以内に確認されているのは母島船木山で採集された 1 標本のみである。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

現状では小笠原諸島のみから分布が確認されており、かつ過去 10 年以内に確認されているのは母島船木山の 1 地点のみである。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は 1936 年に小笠原諸島で採集されて以来、再発見例がない状態であったが、2015 年に母島で採集され、エピタイプ指定された。潜在的には小笠原諸島全域に広く分布している可能性がある。

基礎情報

【形態】

子実体は類円筒形か類釣り鐘型で、高さ 8～10 mm、幅 6～8 mm。外皮は暗褐色の毛状リン被からなり、小塊粒は 15～25 個、鏡玉形、直径約 2 mm、網状粗面で光沢があり、粘液に埋まり黒色となる。菌紐は白色。胞子は卵形、平滑、15～18×11～13 μm、無色。本種は茶褐色の外皮面はハタケチャダイゴケ（*C. stercoreus*）に似るが、口縁に直立房毛があり、担子胞子はハタケチャダイゴケよりも小さい。北アメリカに産する *C. rugispermus* (Schw.) de Toni およびキューバとハワイに産する *C. earlei* Lloyd と近縁と考えられるが、殻壁の色が暗色で、また他の形態的特徴から別種にされている。

【生活史】

不明。

【生育環境】

日本では砂にまみれた木材基質上に発生した例があるが、詳しい生育環境は不明。ただし、2015 年に小笠原諸島母島で再発見された個体はリュウキュウマツ林の落枝に発生した（Cruz et al., 2018）。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 草地　【陸域_海岸部】砂浜・礫浜
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有。1936 年に小笠原諸島父島清瀬で採集された（Kobayasi, 1937）他は、2015 年に小笠原諸島母島船木山にて再発見された（Cruz et al., 2018）のが唯一の採集例である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

タイプローカリティは現在おもに住宅地になっていることから、現在確実に生育しているのは母島船木山のみである。しかし、母島の新規発生地はリュウキュウマツ混じりの広葉樹林であり、同じような環境は小笠原諸島全域に広く分布する。

【生育地の現況】

母島船木山の環境は保護されている。

【個体数の現況】

母島船木山の 1 地点で採集されている他は、近年の採集例は無い。

存続を脅かす要因

タイプローカリティは現在おもに住宅地になっていることから、存続をおびやかす要因として土地造成、道路建設とそれらに伴う森林伐採、草地開発による発生適地の減少が考えられる。しかし、母島の新規発生地はリュウキュウマツ混じりの広葉樹林であ

り、同じような環境は小笠原諸島全域に広く分布する。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設
	（現在）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設

特記事項

採集例は乏しいものの、母島の新規発生地はリュウキュウマツ混じりの広葉樹林であり、同じような環境は小笠原諸島全域に広く分布する。そのため、潜在的な発生適地は小笠原諸島のほぼ全域（父島、母島、兄島など）に及ぶ。今後の追加調査による確認が必要であるが、生育環境の悪化による分布域の減少は限定的であると思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	DD
第４次 2019：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第４次 2018：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第４次 2017：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第４次 2015：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第４次：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第３次：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第２次：	カバイロチャダイゴケ	*Cyathus badius* Kobayasi	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Cruz, R. H. S. F., 2018. Rediscovery of *Cyathus badius*, an 'extinct' species from the Bonin Islands, Japan. Mycoscience, 59: 193-199.
- 伊藤誠哉，1959．日本菌類誌，2(5): 536.
- Kobayasi, Y., 1937. Fungi Austro-Japoniae et Micronesiae. I. Bot. Mag. Tokyo, 51: 749-758.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cyathus badius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyathus badius* is listed as DD under criteria ①③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館） Kentaro Hosaka

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　チャダイゴケ科 Nidulariaceae

ハゲチャダイゴケ

Cyathus pallidus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

2000 年代以降の調査で、本種として正確に同定された標本は、茨城県つくば市産の 1 標本のみである。このことから、本種の生育地は日本国内において局限している可能性が推察される。一方で、近年得られた既知の標本は 1 点のみであるため、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る採集事例や既知情報が著しく少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は鐘形で、外皮は褐色の軟毛に覆われ、毛ははじめ密生するが、のちにやや疎となる。内皮は赤みを帯びた灰色で、平滑～わずかに扇だたみ状。小塊粒は灰褐色～黒色。本種は近年の採集例に乏しく、分布域、生育環境や生態的特性などの情報が不足しており、さらなる調査が望まれる。

基礎情報

【形態】

子実体は鐘形で、高さと幅はそれぞれ 5 mm 程度。外皮は褐色の軟毛に覆われ、毛ははじめ密生し、のちにやや疎となる。内皮は赤みを帯びた灰色、平滑～わずかに扇だたみ状。小塊粒は一つの子実体あたり 8～9 個存在し、鏡玉形、径約 2 mm、灰褐色～黒色。担子胞子は類球形～楕円形、まれに卵形、表面は平滑。

【生活史】

詳細については不明である。

【生育環境】

腐木上、腐植上および地上に発生するが、詳しい生育環境は不明である。

生育環境区分：	【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本では本州で記録があるが、2000 年代以降では茨城県つくば市の 1 地点でのみ標本が採集されている。その後の採集例はなく、日本での分布の実態は不明である。国外では中国、タイ、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、西インド諸島、アフリカより知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本州で記録があるが、採集点数や生育地点数は少ない。2000 年代以降では茨城県つくば市の森林内で 1 標本が採集されているが、その後の採集例はない。本菌の既知の生育地は限られ、継続的な採集例もないため、分布状況の正確な把握を進める必要がある。

【生育地の現況】

2000 年代以降に知られる生育地は茨城県つくば市の森林内の 1 地点のみであるが、継続的な採集例はなく、詳細については不明である。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

土地造成による発生適地の減少に加え、元々の局所的な分布。

要因の区分：	(過去)	土地造成, 分布・産地局限
	(現在)	土地造成, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A.Curtis	CR+EN
第４次 2019:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A.Curtis	CR+EN
第４次 2018:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A.Curtis	CR+EN
第４次 2017:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A.Curtis	CR+EN
第４次 2015:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A.Curtis	CR+EN
第４次:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A.Curtis	CR+EN
第３次:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. & M.A. Curtis	CR+EN
第２次:	ハゲチャダイゴケ	*Cyathus pallidus* Berk. et M. A. Curtis	VU
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Cruz, R. H. S. F, Assis, N. M., Silva M. A., Baseia, I. G., 2014. Revision of the genus *Cyathus* (Basidiomycota) from the herbaria of northeast Brazil. Mycosphere, 5: 531-540.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cyathus pallidus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyathus pallidus* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest

Threat types:	Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ヒラタケ科 Pleurotaceae

ツバヒラタケ

Pleurotus dryinus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 北海道を中心に東北地方や長野県などにみられ、広葉樹（ときに針葉樹）の材幹や倒木などに発生するが、生育可能な環境であっても、発生は非常に希である。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　ヒラタケの仲間であるが薄い内被膜（つば）を持つことで他の種と区別できる。北海道や東北や長野県などの、主に広葉樹（ときに針葉樹）に発生するが、非常に希であるため、発生が知られている森林の保全は重要である。

基礎情報

【形態】

傘は径 5-15 cm、あるいはそれ以上、半円形から類円形、丸山形から扁平、表面は類白色あるいは灰白色、ときに黄色を帯びる、初め密な灰色微細軟毛に被われ、のち傘表皮は鱗状片に裂け、あるいは灰色から褐色の綿状鱗片に密に被われる、傘縁は最初内巻し、内被膜の裂片が付着する。肉は白色、厚く、緻密、臭いは穀粉様、味は温和。ひだは垂生、白色、のち帯黄色、やや疎、幅はやや広く、ひだの縁は全縁あるいはわずか波状。柄は偏生から側生、2-12×1-3 cm、丈夫で短い、白色あるいは黄色を帯び、細密軟毛あるいは綿状被膜を被る、中実、柄の上部には綿状・膜質・早失性のつばをもつ、柄の下部には分生子（厚膜胞子）を形成する。担子胞子は 9-14×3.5-5 µm、長楕円形。培養すると褐色の分生子（厚膜胞子）をつくる。食用美味。ヒラタケの仲間であるがツバを持つことで他の種と区別できる。

【生活史】

生活史については不明である。

【生育環境】

広葉樹（ときに針葉樹）の材幹や倒木などに 9 月から 11 月に発生、ときに栽培のリンゴなどの果樹にも発生する。美味な食用菌であるため栽培されている。分布域内の生育可能な環境にあっても、発生は非常に希である。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・長野県・広島県。欧州、ロシア、北米-中米。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

発生は極めて希な種であることから発生個体数の増減の推定は困難であるが、本種は元来北方系の種であることから地球温暖化の影響を受けやすく、発生個体数は減少傾向にあると推定される。

存続を脅かす要因

森林伐採。土地造成。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P.Kumm.	DD
第４次 2019：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P.Kumm.	DD
第４次 2018：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P.Kumm.	DD
第４次 2017：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P.Kumm.	DD
第４次 2015：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P.Kumm.	DD
第４次：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P.Kumm.	DD
第３次：	ツバヒラタケ	*Pleurotus dryinus* (Pers.) P. Kumm.	DD
第２次：	―	―	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Imai, S., 1938. Studeis on Agaricaceae of Hokkaido I. Journal of the faculty of Agriculture, Hokkaido imperial Univ.（北海道帝国大学農学部紀要）, 43: 1-178.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pleurotus dryinus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pleurotus dryinus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　ウラベニガサ科 Pluteaceae

キヌオオフクロタケ

Volvariella bombycina

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 本菌は広域に分布するが、既知のいずれの生育地においても子実体発生は散発的であり、継続的な発生例は北海道を除きほとんど認められないことから、生育密度が低く希少と判断される。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　かさの表面が白色でふさふさとした絹糸状の毛で覆われ、柄の下部は膨らみ、基部には膜質で袋状のつぼを有する。北海道から西日本にかけて広く分布し、広葉樹の腐朽木上に発生するが、各地域における分布は局所的で、かつ森林伐採などによる生育地の環境悪化により分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

かさは黄白色で、表面は白色でふさふさとした絹糸状の毛と小鱗片に覆われ、縁はひだの端から突出してピンク色を帯びる。柄は白色だが基部は黄色を帯び、表面には繊維状の条線があり、下方に向かい太くなり、基部には膜質で袋状のつぼを有する。ひだはやや疎～密、離生、初め白色で、のちに肉色、縁部はやや黄色を帯びる。担子胞子は卵形～楕円形、ピンク色を帯び、表面は平滑、厚壁。

【生活史】

子実体は夏～秋にかけて発生するが、詳しい生活史は不明である。

【生育環境】

ハルニレ、ミズナラ、コナラなどの広葉樹の腐朽木上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では北海道、茨城県、群馬県、埼玉県、千葉県、石川県、京都府などで記録があり、国外ではユーラシア大陸、南北アメリカ大陸、オーストラリアなど広域に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌は北海道から西日本にかけて分布し、その国内における分布の範囲自体は比較的広いと推察される。一方で、これまでに本種として正確に同定された標本の既存の生育地は局所的であり、その一部は森林伐採や、道路開発などに伴う土地造成による悪影響を受けており、現在知られている発生地の環境が失われれば減少が懸念される。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は森林伐採や、道路開発などに伴う土地造成による悪影響を受けており、現在知られている発生地の環境がそれらにより失われれば減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採や、道路開発などを目的とした土地造成。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成
	（現在）	森林伐採, 土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第４次 2019:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第４次 2018:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第４次 2017:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第４次 2015:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第４次:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第３次:	キヌオオフクロタケ	*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer	DD
第２次:	－	－	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）] 富山県[情報不足] 大阪府[DD] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 竹橋誠司・星野保・糟谷大河，2010．北海道産ハラタケ類の分類学的研究：特にザラミノシメジ属，ツエタケ属，ビロードツエタケ属，フクロタケ属，ウラベニガサ属．145 pp. NPO 法人北方菌類フォーラム，札幌.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Volvariella bombycina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Volvariella bombycina* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae　　日本固有

チチシマシメジ

Porpoloma boninense

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①③

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

小笠原諸島父島、母島の数地点において過去 10 年以内に採集例がある。ただし子実体の発生数は少なくかつ散発的であることから、生育密度は低く、個体数は減少傾向にある可能性があるものの、現時点でカテゴリーを判定することは困難である。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

分布は小笠原諸島父島、母島に限定されている。

評価分科会：　菌類分科会

概要

落葉の間に生える紫がかった灰色のキノコ。1936 年に小笠原で採集され、1939 年に報告された。その後、小笠原母島で 1977 年に再び発見された他、2014 年以降複数回の採集例が報告されている。しかし、発生する子実体数は少なく散発的である。

基礎情報

【形態】

子実体は孤生。傘は径 4～6 cm、丸山形、後にやや偏平となる。表面乾燥、中央菫灰色で縁辺帯白色、やや紛状で内屈する。肉は白色、乾時やや赤色となり、厚く固く、においなく、味はわずかに苦い。ヒダは湾生あるいはやや直生ではなはだ密、狭幅。柄は 3.5～6.5×0.5～0.8 cm、ほとんど同幅で白色、頂部にわずかにヒダの垂下線あり、上部粉状、下部繊維状、中実。担子胞子は楕円形あるいは類球形、平滑、6.5～7×4～5 μm。胞子は白色。

【生活史】

秋、林内地上に発生する。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

過去 10 年以内に、小笠原諸島の父島で計 6 地点、母島で計 2 地点から採集されており、父島・母島ともに広く分布している可能性がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

過去 10 年以内においては、父島の計 6 地点（旭山：2014 年、2015 年；東平：2015 年、2016 年；中央山：2018 年）、母島の計 2 地点（大沢海岸：2015 年；桑ノ木山：2018 年）から採集が確認されている。いずれのコレクションも散発的で発生子実体数も少ないものの、1970 年代以前の採集地点（父島・旭山、母島・桑ノ木山）以外の地域も含め、比較的安定的に採集されており、分布域の減少は認められない。

【生育地の現況】

いずれの生息地も保護されており、明確な環境悪化は認められない。ただし、桑ノ木山のアカギ、中央山のリュウキュウマツなどの外来樹木の存在およびそれらの駆除対策による影響は考慮する必要がある。

【個体数の現況】

父島、母島のいずれの採集地点においても、1 回の採集で確認されているのは少数の子実体のみである。

存続を脅かす要因

不明だが、現在のところ知られている分布域が小笠原諸島父島および母島のみであることから、分布は局所的であると考えられる。また、いずれの発生地点も森林環境であり、林道沿いで採集されていることから、森林伐採および人の踏みつけが存続を脅かす要因となっている可能性がある。		
要因の区分：	（過去）	不明，森林伐採，人の踏みつけ
	（現在）	不明，森林伐採，人の踏みつけ

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S.Ito & S.Imai) Hongo	CR+EN
第４次 2019：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S.Ito & S.Imai) Hongo	CR+EN
第４次 2018：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S.Ito & S.Imai) Hongo	CR+EN
第４次 2017：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S.Ito & S.Imai) Hongo	CR+EN
第４次 2015：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S.Ito & S.Imai) Hongo	CR+EN
第４次：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S.Ito & S.Imai) Hongo	CR+EN
第３次：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S. Ito & S. Imai) Hongo	CR+EN
第２次：	チチシマシメジ	*Porpoloma boninense* (S. Ito et Imai) HongoSyn. *Tricholoma boninense* S. Ito et Imai	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo T., 1980. Higher fungi of the Bonin Islands III. 菌蕈研究所研究報告, 18: 149-155.
- 保坂健太郎，2018．小笠原諸島および周辺地域に分布するきのこ類（担子菌門ハラタケ亜門）の分布情報．国立科学博物館専報，52: 17-37.

- Ito S. and S. Imai, 1939. Fungi of the Bonin Islands. III. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 9-20.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Porpoloma boninense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Porpoloma boninense* is listed as DD under criteria ①③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, Human trampling
Law designation status for conservation	—



執筆者: 保坂健太郎（国立科学博物館）
Author: Kentaro Hosaka

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae

シモコシ

Tricholoma auratum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

主に海岸砂地のマツ林、あるいは内陸部でもマツがみられるようなところに発生する。全国的に、依存する植生である海岸や内陸のマツ林は、マツ枯れ、里山環境の減少などにより減少し、本種の生育適地・発生量は減少している。ただし、国内で従来からキシメジやシモコシ等の和名で区別されてきたグループが、分類学的に未整理であるため、本種の発生状況について定量的に示すことができず、今回の評価は DD とした。

評価分科会：　菌類分科会

概要

海岸のマツ林に霜が降りる頃の晩秋に発生することから「霜越」とよばれ、古くから食用の対象として親しまれてきた。近年、欧州で本種（あるいは近縁種）と思われるきのこが原因とされる中毒事故が発生し、注目されるようになった。クロマツなどのマツ属に依存し共生する外生菌根菌であり、依存する植生である海岸や内陸のマツ林は、マツ枯れ、里山環境の減少などにより生息地の存続がおびやかされている状況にある。

協力者:　青木渉（国立医薬品食品衛生研究所）

基礎情報

【形態】

傘は径 5-10 cm、饅頭形から開いて中高の平らとなる。表面は黄色（いおう色）、中央部は赤褐色を帯び、湿っているときは粘性があり、ほとんど平滑、また中央部付近にしばしば灰褐色の小鱗片を生じる。肉はほとんど白色、表皮下は多少黄色を帯び、緻密、無味。ひだは湾生またはほとんど離生し、黄色（いおう色）、密。柄は 4-7 cm×7-15 mm，幼菌時はそろばん玉状、のち棍棒状またほぼ上下同大となり、表面は繊維状、下部は黄色（いおう色）を帯びるが、上部はほとんど白色、中実または一部中空。

【生活史】

詳細については不明。

【生育環境】

主にマツ科樹木と共生する外生菌根菌で、主に海岸砂地のマツ林に発生する。内陸部でもマツがみられるようなところに、主に秋から冬にかけて発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部 海岸部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (5) 沿岸域

【分布域】

北海道・青森県・岩手県・山形県・宮城県・福島県・茨城県・千葉県・群馬県・山梨県・埼玉県・新潟県・石川県・山梨県・長野県・愛知県・滋賀県・京都府・奈良県・兵庫県・岡山県・鳥取県・島根県・鹿児島県からの標本記録があり、おそらく北海道から鹿児島までの日本各地で見られる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道から鹿児島までの日本各地のマツ林で見られるが、詳細については不明。

【生育地の現況】

主に海岸砂地のマツ林、あるいは内陸部でもマツがみられるようなところに発生するが、依存する植生である海岸や内陸のマツ林は、マツ枯れ、里山環境の変化などにより、全国的に生育環境が減少している。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

海岸開発や土地造成による砂地海岸マツ林という環境の減少など。

要因の区分：	（過去）	海岸開発, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

	（現在）	海岸開発，土地造成，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

【学名について】従来、本種はシモコシ *Tricholoma auratum* Gillet として、キシメジ *Tricholoma flavovirens* (Pers.) S.Lundell. と、共生する植物、発生時期、味覚等の特徴により国内では区別されてきた。一方、近年発生した欧州での食中毒事故原因菌と考えられている *Tricholoma equestre* (L.) P. Kumm. と、これらの 2 種を同一種とする欧州での説をうけ、従来食用とされてきたシモコシを毒菌としてあつかう図鑑等もある。専門家による遺伝子をつかった研究もすすめられているが、欧州の近縁グループと日本産種の類縁についての明瞭な結論は出されていない。以上の事情をふまえ、今回、本種の学名は従来のシモコシにあてられてきた *Tricholoma auratum* Gillet のままとした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	NT
第４次 2019：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	NT
第４次 2018：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	NT
第４次 2017：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	NT
第４次 2015：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	NT
第４次：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	NT
第３次：	シモコシ	*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet	DD
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅱ類] 千葉県[一般保護生物（D）] 長野県[情報不足（DD）] 静岡県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 三重県[VU] 京都府[準絶滅危惧種] 大阪府[VU] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 福岡県[情報不足] 佐賀県[絶滅危惧Ⅱ類種] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 青木渉，2023．カキシメジ類を含む日本産 *Tricholoma* 属の資源探索とその利用可能性に関する研究．信州大学審査学位論文．

- 本郷次雄，1987．キシメジ科．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 I，pp. 56-115．保育社，大阪．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholoma auratum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholoma auratum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain Beach】Forest
Threat types:	Coastal development, Land development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	―

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae

バカマツタケ

Tricholoma bakamatsutake

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 生育地である、ブナ科のシイ・カシ林やコナラ林は、西日本に広く見られるが、発生がみられる地域の林内のどこにでも発生するわけではなく、該当樹林内の、特に生育に適した箇所（斜面の方向、土質、水分条件など）に大きく影響される傾向があり、本種は限定的な箇所に発生する性質がある。いずれの生育地においても発生はまれであり、生育密度が低いと判断する。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

本種が生育のために依存する環境は、ブナ科のシイ・カシ林，コナラ・ミズナラ林等であるが、これら人間の生活圏にあり、常に伐採の対象となっており、また同様の発生環境のコナラ林も維持管理放棄されると発生がみられなくなり、発生環境の減少と悪化により、本種の発生量は毎年減少傾向にある。加えてナラ枯れが全国的に進行しており、生育地における共生樹種の存続が脅かされる状況にある。

基礎情報

【形態】

傘は径 4-10 cm，柄は 6-10 cm×12-16 mm。傘の中央部はくり褐色、周辺部は淡色、全体はやや黄色味をおびる。傘表面は最初繊維状、のち表皮は裂けて繊維状となる。柄は上下同大。マツタケ様の匂いはマツタケより数倍強い。

マツタケとは、子実体形態が全体小形であること、肉質がやや柔らかいこと、匂いがより強いこと、生態的には、マツタケがマツ科と共生することに対し、本種はブナ科と共生すること、発生時期が異なること、などで区別できる。

同様にブナ科と共生するニセマツタケとは、本種が全体黄色味を帯び、柄が上下同大であることに対し、ニセマツタケは子実体全体褐色が強く、柄下部にむかって柄が先細りとなること、など形態的に区別できる。

【生活史】

野外の生態についての研究はおこなわれているが（Terashima et al. 1993; 寺嶋 1997）、生活史の詳細については不明な部分も多い。

【生育環境】

ブナ科樹木（スダジイ、マテバシイ、ウバメガシ、コナラ、ミズナラ）と共生し，その樹林内に、主に秋に発生する（Hongo 1974）。発生がみられる地域の林内のどこにでも発生するわけではなく、該当樹林内の、特に生育に適した環境条件（斜面の方向、土質、水分条件など）に大きく影響される傾向があり、本種は限定的な箇所に発生する性質がある。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域,（2）里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・茨城県・千葉県・神奈川県・石川県・京都府・山口県・大分県からの標本記録があり、おそらく本州中西部以南のブナ科広葉樹林に広く分布する。国外では、中国（Herrera et al. 2022, Aoki et al. 2022）、ニューギニア（本郷 1987）の分布が知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

本種が発生するブナ科のシイ・カシ林は、西日本に広く見られるが、人間の生活圏にあり、常に伐採の対象となっている。また同様の生育環境である二次林であるコナラ林も維持管理放棄されると発生が見られなくなる。加えて近年ナラ枯れが全国的に進行しており、生育地における共生樹種の存続が脅かされる状況にある。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

伐採、宅地開発、里山の管理放棄、ナラ枯れ。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，管理放棄
	（現在）	森林伐採，土地造成，管理放棄

特記事項

1．人工培地（菌床）による子実体形成（人工栽培）は，民間会社により成功したと報道されている（2018 年）。

2．林地栽培（野外植栽林における人為的な子実体発生促進方法）は，奈良県森林技術センターにより報告されている（2018 年）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	NT
第４次 2019：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	NT
第４次 2018：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	NT
第４次 2017：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	NT
第４次 2015：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	NT
第４次：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	NT
第３次：	バカマツタケ	*Tricholoma bakamatsutake* Hongo	VU
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 千葉県[一般保護生物（D）] 神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 富山県[情報不足] 静岡県[準絶滅危惧（NT）] 三重県[VU] 京都府[絶滅危惧種] 大阪府[DD] 兵庫県[要注目種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Aoki, W., N. Bergius, S. Kozlan, F. Fukuzawa, H. Okuda, H. Murata, T. A. Ishida, L. -M. Vaario, H. Kobayashi, E. Kalmis, T. Fukiharu, S. Gisusi, K. Matsushima, Y. Terashima, M. Narimatsu , N. Matsushita, K. H. Ka, F. Yu, T. Yamanaka, M. Fukuda and A. Yamada, 2022. New findings on the fungal species *Tricholoma matsutake* from Ukraine, and revision of its taxonomy and biogeography based on multilocus phylogenetic analyses. Mycoscience, 63: 197-214.
- Herrera M., R. Wang, P. Zhang and F. -Q Yu, 2022. The ectomycorrhizal association of *Tricholoma matsutake* and two allied species, *T. bakamatsutake* and *T. fulvocastaneum*, with native hosts in subtropical China. Mycologia, 114: 303-318.
- Hongo, T., 1974. Notes on Japanese larger fungi (21). J. Jap. Bot., 10: 294–305.
- 本郷次雄，1987．キシメジ科．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 I，pp. 56-115．保育社，大阪．
- Terashima, Y., K. Tomiya, M. Takahashi and H. Iwai, 1993. Distribution and characteristics of shiros of *Tricholoma bakamatsutake* in a mixed forest of *Pasania edulis* and *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*. Trans. Mycol. Soc. Japan, 34: 229-238.
- 寺嶋芳江，1997．シイ林における外生菌根菌バカマツタケの生活様式に関する研究．千葉県林業試験場特別研究報告，1: 1-76.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholoma bakamatsutake has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholoma bakamatsutake* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Abandonment of management
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae

ニセマツタケ

Tricholoma fulvocastaneum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　データ不足	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 生育地である、ブナ科のシイ・カシ林やコナラ林は、西日本に広く見られるが、発生がみられる地域の林内のどこにでも発生するわけではなく、該当樹林内の、特に生育に適した箇所（斜面の方向、土質、水分条件など）に大きく影響される傾向があり、本種は限定的な箇所に発生する性質がある。いずれの生育地においても発生はまれであり、生育密度が低いと判断する。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　マツタケに類似する種類だが、外生菌根菌としてブナ科と共生する点、子実体の形態などで区別できる。依存する環境は、ブナ科の森（シイ・カシ林、コナラ等）であるため、人間の生活圏にあり、常に伐採の危機にさらされている。また二次林であるコナラ林も維持管理放棄されると本種の発生はみられなくなる。またナラ枯れが全国的に進行しており、生育地における共生樹種の存続が脅かされる状況にある。

基礎情報

【形態】

傘は径 6-10 cm、柄は 6-10.5 cm×18-25 mm。傘は褐色、傘表面は最初繊維状、のち表皮は裂けて繊維状となる。柄も傘同様褐色、下部が細くなる。マツタケ様の匂いはないか微弱。

マツタケとは、特有のマツタケの香りを欠くこと、生態的には、マツタケがマツ科と共生することに対し、本種はブナ科と共生すること、などで区別できる。

バカマツタケとは、本種の子実体には香りを欠くこと、全体褐色が強いこと、下部向かって柄が先細りとなること、などで区別できる（バカマツタケは、強い香りがあり、黄色味を帯び、柄は上下同大）。

【生活史】

詳細については不明。

【生育環境】

ブナ科（スダジイ、コナラなど）と共生し、その樹林内に、主に秋に発生する。発生がみられる地域の林内のどこにでも発生するわけではなく、該当樹林内の、特に生育に適した環境（斜面の方向、土質、水分条件など）に大きく影響される傾向があり、本種は限定的な箇所に発生する性質がある。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

千葉県・石川県・京都府・広島県・鳥取県・宮崎県・鹿児島県からの標本記録があり、おそらく本州中西部以南のブナ科広葉樹林に広く分布する。国外では、中国、タイ（Sanmee et al. 2007）、ラオス（Aoki et al. 2022）の分布が知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

本種が発生するブナ科のシイ・カシ林は、西日本に広く見られるが、人間の生活圏にあり、常に伐採の対象となっている。また同様の生育環境である二次林であるコナラ林も維持管理放棄されると発生が見られなくなる。加えて近年ナラ枯れが全国的に進行しており、生育地における共生樹種の存続が脅かされる状況にある。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

伐採、宅地開発、里山の管理放棄、ナラ枯れ。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，管理放棄
	（現在）	森林伐採，土地造成，管理放棄

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第４次 2019：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第４次 2018：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第４次 2017：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第４次 2015：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第４次：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第３次：	ニセマツタケ	*Tricholoma fulvocastaneum* Hongo	NT
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

千葉県[一般保護生物（D）] 富山県[情報不足] 三重県[NT] 兵庫県[要注目種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Aoki, W., N. Bergius, S. Kozlan, F. Fukuzawa, H. Okuda, H. Murata, T. A. Ishida, L. -M. Vaario, H. Kobayashi, E. Kalmis, T. Fukiharu, S. Gisusi, K. Matsushima, Y. Terashima, M. Narimatsu , N. Matsushita, K. H. Ka, F. Yu, T. Yamanaka, M. Fukuda and A. Yamada, 2022. New findings on the fungal species *Tricholoma matsutake* from Ukraine, and revision of its taxonomy and biogeography based on multilocus phylogenetic analyses. Mycoscience, 63: 197-214.
- Hongo, T. 1960. Notes on Japanese larger fungi (15). J. Jap. Bot., 35: 83-90.

- Sanmee R., B. Dell, P. Lumyong and S. Lumyong, 2007. First record of *Tricholoma fulvocastaneum* from Thailand. Mycoscience, 48:131-133.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholoma fulvocastaneum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholoma fulvocastaneum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Abandonment of management
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae

シロマツタケモドキ

Tricholoma radicans

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

生育環境であるアカマツやコナラが混じる林は国内に広く見られるが、発生が確認された地域林内のどこにでも発生するわけではなく、特に生育に適した箇所の条件（斜面の方向、土質、水分条件など）や共生樹種の樹齢等に大きく影響される傾向がある。本種が採集・観察された例は非常に少なく、どの生育地においても生育密度は低く希少であると考えられる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

マツタケに類似する種類だが、子実体の形態等により他種と明瞭に区別できる。マツ科（アカマツなど）やブナ科（コナラ等）と共生し、主に里山環境に依存する種であるため，常に伐採や管理放棄の危機にさらされている。加えてマツ枯れやナラ枯れが全国的に進行しており、年々個体数は減少していると推定され、既知の発生地における保全が重要である。

基礎情報

【形態】

傘は径 3-4(7) cm、丸山型から平らに開く、白色、表面に鱗片がある。肉は白色、時にややマツタケ臭がある。柄は 6-7 cm、表面は白色，やや便腹形，つばがあり、小鱗片を備え，根元はやや細くなり、根状となって地中に伸びる。ひだは柄に多少垂生する、白色。担子胞子は 5.5-6.5×3.5-4 μm，楕円形から卵形。縁・側シスチジアを欠く。

他種との区別点：全体が白色を帯び、ひだは柄に多少垂生する点で他のマツタケの仲間と区別できる。

【生活史】

生活史については不明である。

【生育環境】

マツ科やブナ科樹木と共生する外生菌根菌で、主にマツ林、アカマツ・コナラ林、雑木林（コナラが混じる里山林など)，ときにブナ林等にも、秋（9 月下旬から 10 月）に発生する。発生がみられる地域林内のどこにでも発生するわけではなく、本種は特にマツの老齢林に発生するという報告もあり、本種は生育可能な林内であっても、限定的な箇所に発生する性質がある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1）奥山自然地域,(2）里地里山・田園地域

【分布域】

茨城県・栃木県・石川県・山梨県・長野県・鳥取県・広島県・山口県・香川県・宮崎県・大分県。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年マツ枯れやナラ枯れの進行、および伐採や管理放棄により、本種の分布域は減少していると推定される。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

分布域及び生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

森林伐採、宅地開発、里山の管理放棄、マツ枯れ。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

	（現在）	森林伐採，土地造成，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第４次 2019：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第４次 2018：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第４次 2017：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第４次 2015：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第４次：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第３次：	シロマツタケモドキ	*Tricholoma radicans* Hongo	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 富山県[情報不足] 長野県[情報不足（DD）] 三重県[VU]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hongo, T., 1968. Notulae Mycologicae (7). 滋賀大学教育学部紀要, 18: 47-52.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholoma radicans has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholoma radicans* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ハラタケ目 Agaricales　キシメジ科 Tricholomataceae

マツタケモドキ

Tricholoma robustum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

生育環境であるマツ科樹林（アカマツなど）は国内に広く見られるが、発生が確認された地域林内のどこにでも発生するわけではなく、生育条件（斜面の方向、土質、水分条件など）等に大きく影響される傾向がある。どの生育地においても生育密度は低く本種は希少であると考えられる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　マツタケやその類縁種に類似する種だが、子実体の形態・生態などで明瞭に他種と区別されてきた。マツ科（アカマツなど）と共生する種であるため、依存する環境は、常に伐採や管理放棄の危機にさらされており、加えてマツ枯れが全国的に進行しているため、既知の生育地における共生樹種の存続が脅かされており、個体数は年々減少していると推定される。なお、近年の研究により、本和名でよばれてきた日本産種には複数種が含まれる可能性があることが指摘されており、今後日本産種については精査していく必要がある。

基礎情報

【形態】

傘は 4−10 cm，傘の色は赤褐色をおび，表面の鱗片は小形でしばしばささくれ状となる。柄は 3−10 cm×1−2 cm、基部は急に細まり下端はとがる。ヒダは始め白く、次第に褐色をおびる。肉は香りにとぼしく、白色、煮ると黒ずむ。担子胞子は 6−7×3.5−4 μm，楕円形。

類縁種のマツタケとはマツタケ臭を欠くことや形態で明瞭に区別でき、ブナ科樹種と共生するバカマツタケやニセマツタケとは、マツ科と共生すること、形態などで明瞭に区別されてきた。

青木（2023）による研究により、本和名でよばれてきた日本産種には複数種が含まれる可能性があることが指摘されており、今後日本産種については精査していく必要がある。

【生活史】

生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

マツ科樹木と共生する外生菌根菌で、亜高山帯から高山帯の針葉樹林（マツ属、ツガ属、モミ属など）、および低地のマツ林に発生する。この生育環境を異にする 2 群は別種の可能性があることが指摘されており、今後の研究が必要である。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・岩手県・宮城県・群馬県・石川県・山梨県・長野県・鳥取県・広島県。北半球温帯以北に分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種が依存するマツ科の樹林のうち、江戸時代以降に日本列島各地で里山林として植栽・育成・管理されてきた低地のマツ林は、マツ枯れや里山林の管理不足による林床環境の悪化等により戦後激減しており、低地マツ林分の布域は縮小していると考えられる。一方、本種のもう一つの分布域である、高山・亜高山帯のマツ科（マツ属、モミ属、ツガ属など）樹林については、自然環境保全基礎調査によれば、これらの植生は現在減少傾向にないことが分かっている。したがって、後者の分布域に関して大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

本種の生育地はマツ科樹林であるが、第一の分布域である人里のアカマツ林では、里山の管理不足やマツ枯れにより生息環境が悪化・減少している。本種のもう一つの分布

域と考えられる高山・亜高山帯のマツ科（マツ属、モミ属、ツガ属など）樹林の生育環境について詳細は不明である。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、発生個体数も減少していると推定される。

存続を脅かす要因

低地の里山林におけるマツ林：森林伐採、宅地開発、里山の管理放棄、マツ枯れ。高山・亜高山帯のマツ科樹林：地球温暖化や各種開発行為により生育地の存続がおびやかされている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, スキー場, 土地造成, 交通インフラ建設, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採, スキー場, 土地造成, 交通インフラ建設, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

青木（2023）による日本産キシメジ属の分子系統と形態に基づく研究によると、マツタケモドキの和名でよばれている分類群には、亜高山帯から高山帯にかけて分布する種と、低地マツ林に分布する別の種（複数種）の 2 群の存在が指摘されている。このため、従来マツタケモドキとして報告されてきた標本や報告には以上のような複数種のものが含まれていると考えられ、今後日本産種についてさらに調査していく必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第４次 2019：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第４次 2018：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第４次 2017：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第４次 2015：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第４次：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第３次：	マツタケモドキ	*Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 三重県[EN] 京都府[準絶滅危惧種] 兵庫県[要注目種] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 青木渉，2023．カキシメジ類を含む日本産 *Tricholoma* 属の資源探索とその利用可能性に関する研究．信州大学審査学位論文.
- 今関六也，1951．マツタケモドキについて．植物研究雑誌，26: 8-10.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholoma robustum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholoma robustum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Ski resort development, Land development, Transportation infrastructure construction, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　イグチ科 Boletaceae

アキノアシナガイグチ

Aureoboletus viscosus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

現在国内から確認されている標本数は 16 点で、その内訳は、沖縄県（西表島 4 点、石垣島 4 点）、広島県（4 点）、山口県（1 点）、滋賀県（2 点）、東京都（御蔵島 1 点）である。分布地域における発生情報は、南西諸島から本州において、きわめて限定的な発生地点に限られている。いずれの生育地においても発生はまれであり、生育密度が低いと判断する。

評価分科会：　菌類分科会

概要

傘や柄の表面は著しい粘質物におおわれ、粘性で膜質の内被膜（つば）があるという特異的な形態的特徴をもつイグチ類。南西諸島から西日本にかけてのブナ科シイ・カシの老齢林に産する稀産種で、中国南部にも見られ、東アジア暖温帯の常緑のシイ・カシ林に特異的に分布する外生菌根菌。シイ・カシ林は人間の生活圏にあり常に伐採の対象となっており、生育地における共生樹種の存続が脅かされる状況にある。

基礎情報

【形態】

子実体の傘径は 2.5-5 cm、茶褐色。柄長は 15-30 cm、淡褐色。傘や柄の表面は著しい粘質物におおわれ、粘性で膜質の内被膜がある。肉の変色性はない。

【生活史】

生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

ブナ科のシイ・カシ林（スダジイ、オキナワウラジロガシ等）と共生する外生菌根菌。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

現在国内から確認されている標本数は 16 点で、その内訳は、沖縄県（西表島 4 点、石垣島 4 点)、広島県（4 点)、山口県（1 点)、滋賀県（2 点)、東京都（御蔵島 1 点）である。分布地域における発生情報は、南西諸島から本州において、きわめて限定的な発生地点に限られている。国外からはタイプ産地からの発生も含め、中国南部からの発生が知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1990 年代以降に発生が確認されている地点と標本情報は合計 12 件：沖縄県（5 件：石垣市石垣島、西表島)、広島県（4 件：広島市東区 広島県緑化センター)、山口県（1 件：山口市徳地町大原湖)、滋賀県（2 件：大津市瀬田大江町 龍谷大学周辺/龍谷の森）のみである。

【生育地の現況】

過去確認されている生育地である常緑ブナ科という樹林は、人里と重なる地域が多いため常に伐採の危機にさらされており、本種の生育可能な森林は減少していると推定される。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、限定的な地域にのみ発生している。

存続を脅かす要因

シイ・カシ林の減少。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成
	（現在）	森林伐採, 土地造成

特記事項

【学名の変更について】日本産アキノアシナガイグチは、最初 *Aureoboletus longicollis*（≡ *Boletellus longicollis*）と報告された（長沢, 1987; 本郷ほか，1996）。しかし寺嶋ほか（2016）は沖縄産標本とマレーシア産 *A. longicollis*（Corner 1972; Pegler & Young 1981）を比較し、顕微鏡的形態が異なるとして日本産を *Aureoboletus liquidus* ヌメリアシナガイグチとして新種記載した。一方、Wu et al.,（2016）は、日本産種を中国で 1982 年に記載された *Aureoboletus viscosus* (C.S. Bi & Loh) G. Wu & Zhu L. Yang と、分子系統・形態情報により同種と判断した。以上の結果をふまえ、日本産種の和名は広島産（安芸）標本に対して与えられた経緯を考慮しアキノアシナガイグチ、学名は Wu et al.,（2016）に従い *Aureoboletus viscosus* とした。しかし国内産種については、分子系統をふまえた更なる検討が必要であると思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K.Young	DD
第４次 2019：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K.Young	DD
第４次 2018：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K.Young	DD
第４次 2017：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K.Young	DD
第４次 2015：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K.Young	DD
第４次：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K.Young	DD
第３次：	アキノアシナガイグチ	*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K. Young	DD
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

長野県[情報不足（DD）] 和歌山県[情報不足（DD）] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 佐賀県[準絶滅危惧種] 沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Corner, E. J. H., 1972. *Boletus* in Malaysia. The Botanic Gardens Singapore, Singapore. 263 pp., 23 pls.
- 本郷次雄・金城典子・竹友直生・黄年来・呉経綸・林津添，1996．東アジアの常緑ガシ林におけるハラタケ目菌類．日本菌学会報，37: 63-64．
- 長沢栄史，1987．オニイグチ科．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 I．pp. 273-285．保育社，大阪．
- Pegler, D. N. & T. W. K. Young, 1981. A Natural arrangement of the Boletales, with reference to spore morphology. Transactions of the British Mycological Society, 76: 103-146.
- 寺嶋芳江・高橋春樹・種山裕一，2016．南西日本菌類誌．東海大学出版部，東京．350 pp.
- Wu, G., Y. C. Li, X. T. Zhu, K. Zhao, L. H. Han, Y. Y. Cui, F. Li, J. P. Xu and Z. L. Yang, 2016. One hundred noteworthy boletes from China. Fungal Diversity, 81: 25-188.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aureoboletus viscosus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aureoboletus viscosus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—





執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　イグチ科 Boletaceae

ヤマドリタケ

Boletus edulis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本種の生育の中心地は，北海道や本州の標高の高い針葉樹林帯（トウヒ林、ドイツトウヒ林、トドマツ林、エゾマツ林、シラビソ、コメツガ林など)、ブナ科林（ミズナラ林)、カバノキ科林（シラカンバ）などであり、同様な環境に広く分布していると推測されるが、現在得られている調査や標本等による発生情報は限られており、どの生育地においても生育密度が低いと判断される。各種開発行為により生育地の存続がおびやかされている状況にあるが、本種の減少度合いについて明瞭に推測することができず、今回の評価は DD とした。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　欧米ではいわゆるポルチーニとよばれるきのこの代表種で、日本では北海道や中部山岳地帯の標高 1000 m 以上の地域にみられ、主にマツ科やブナ科樹種と共生する外生菌根菌。人間の生活圏とはやや異なる森林に依存する種類であるが、その生息地は国内のごく限られた地域であり、各種開発行為により生息地の存続がおびやかされている状況にある。

基礎情報

【形態】

子実体の傘表面は平滑で粘性があり径は 5-20 cm，褐色から淡褐色。柄の長さ 10-20 cm、上半部には網目模様がある。管孔は最初白色の菌糸でおおわれ、のち淡黄色から帯オリーブ緑色。日本ではヤマドリタケモドキと混同されてきたが、後者は主にブナ科樹林に発生し、柄全体に網目をもち、幼時傘表面に短細毛をもつ点で異なる。

【生活史】

生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

トウヒ属、モミ属などのマツ科針葉樹林、またブナ科のミズナラ林、カバノキ科のシラカンバ林にも発生する外生菌根菌。北半球に分布し、日本では本州中部以北の山岳地、ミズナラ、シラカンバ、シラビソ林、またトウヒ林にみられる。具体的には、長野県の乗鞍岳や八ヶ岳では、別荘地やスキー場周辺の開けたミズナラ林、その上部の亜高山帯針葉樹林に見られ、夏から秋（8-9 月）にかけて発生する。北海道ではトドマツ林、エゾマツ林などに発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道・青森県・福島県・茨城県・山梨県・長野県・岐阜県・京都府・鳥取県などのトウヒ林、ドイツトウヒ林、トドマツ林、エゾマツ林、シラビソ・コメツガ林など、またブナ科のミズナラ林、カバノキ科のシラカンバ林にも発生する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明である。

【生育地の現況】

北海道や中部山岳地帯の標高の高いマツ科樹林などに発生するが、人間の生活圏とはやや異なる森林に依存する種であるため情報は少なく、詳細については不明である。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採　スキー場　土地造成　道路建設

要因の区分：	（過去）	森林伐採, スキー場, 土地造成, 交通インフラ建設, 気候変動

	（現在）	森林伐採，スキー場，土地造成，交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第４次 2019：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第４次 2018：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第４次 2017：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第４次 2015：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第４次：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第３次：	ヤマドリタケ	*Boletus edulis* Bull.	DD
第２次：	－	－	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 長野県[情報不足（DD）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 長沢栄史，1989．イグチ科．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 II，pp. 1-44．保育社，大阪.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Boletus edulis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Boletus edulis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Ski resort development, Land development, Transportation infrastructure construction, Climate change
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　イグチ科 Boletaceae

トライグチ

Strobilomyces mirandus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

現在日本で確認されている標本情報は 4 件、すべて宮崎県延岡市のスダシイ・イチイガシ・ウラジロガシ混交林であり、その情報は日本新産論文（2005 年）に掲載された 2002 年、2003 年、2004 年のもの、及び 2011 年の同場所での標本である。このように、国内での発生地はきわめて限定的である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

鮮やかな黄色に濃い褐色の模様がはいる特異的な特徴をもつイグチ類。マレーシアで記載され、日本では宮崎県延岡市のイチイガシ・スダジイ・ウラジロガシ林で 2002 年に採集されたものが日本新産として報告された。外生菌根菌で、暖温帯のシイ・カシ老齢林に強く依存すると思われるが、近年になって記録された種で生態や分布の実態が不明であり、引き続き調査が必要である。

協力者:　黒木秀一（宮崎県総合博物館）

基礎情報

【形態】

子実体の傘の径は 3-6 cm、柄は 4-7 cm、傘と柄は鮮黄色-黄褐色の綿毛状の小鱗片で被われる。柄の上部に網目模様があり、傘縁には脱落性の被膜の名残が見られる。管孔は灰白色、傷をつけると赤変、のち黒変する。鮮やかな黄色の地に濃い褐色の模様がはいる特異的な特徴から他のイグチ類と明快に区別することができる形態をもつ。

【生活史】

生活史の詳細については不明である。

【生育環境】

マレー半島ジョホール産の標本をもとに記載された種である。宮崎県の発生地では、スダシイ・イチイガシ・ウラジロガシ混交林に発生しており、外生菌根菌として東アジア暖温帯の常緑のシイ・カシに強く依存する種と思われる。希少性が高く、分布の実態が不明であり、引き続き調査が必要である。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域,(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

現在日本で確認されている標本情報は 4 件、すべて宮崎県延岡市のスダシイ・イチイガシ・ウラジロガシ混交林であり、その情報は日本新産論文（2005 年）に掲載された 2002 年、2003 年、2004 年のもの、及び 2011 年の同場所での標本である。このように、国内での発生地はきわめて限定的である.

現在の生育状況

【分布域の現況】

現在日本で確認されている標本情報は 4 件、すべて宮崎県延岡市のスダシイ・イチイガシ・ウラジロガシ混交林であり、その情報は日本新産論文（2005 年）に掲載された 2002 年、2003 年、2004 年のもの、及び 2011 年の同場所での標本である。このように、国内での発生地はきわめて限定的である.

【生育地の現況】

危険性の主要因である、伐採、植林、地域開発等の理由での伐採は現在予定されていない。

【個体数の現況】

生育地の現況と関連する状況にあり、限定的な地域にのみ発生している。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第４次 2019：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第４次 2018：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第４次 2017：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第４次 2015：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第４次：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第３次：	トライグチ	*Strobilomyces mirandus* Corner	DD
第２次：	－	－	―
第１次：	―	―	―

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA 類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Corner, E. J. H., 1972. *Boletus* in Malaysia. The Botanic Gardens Singapore, Singapore. 263 pp., 23 pls.
- Sato, H., T. Hattori, S. Kurogi and T. Yumoto, 2005. *Strobilomyces mirandus* Corner, a new record from Japan. Mycoscience, 46: 102-105.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Strobilomyces mirandus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Strobilomyces mirandus* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　ショウロ科 Rhizopogonaceae

ホンショウロ

Rhizopogon luteolus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌と同定された標本は、茨城県から愛媛県に至る本州と四国の各地、ならびに小笠原諸島父島より得られており、本菌の国内における分布の範囲そのものは広いことが推察される。一方で、近年、日本のアカマツ、クロマツやリュウキュウマツ林における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本は少なく、既存の産地も局地的であるため、本種の生育密度は日本国内において低く、希少であると判断される。なお、既知の標本、特に 2000 年代以降に得られた例は石川県能美市と愛媛県松山市の 2 地点からのみであるため、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る採集事例や既知情報が少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は地下生～半地下生で、球形、扁球形～卵形。殻皮は白色から淡黄色～淡赤褐色となり、触れたりこすったりしても赤色に変化しない。殻皮の表面には黄褐色を帯びる菌糸束が付着する。本州、四国と小笠原諸島父島に広く分布し、主にアカマツ，クロマツやリュウキュウマツなどのマツ科林内に発生する。各地域における分布は局地的で、かつ森林伐採などによる生育地の環境悪化により分布域の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体は地下生～半地下生で、球形、扁球形～卵形、不快臭がある。殻皮は幼時白色、成長に伴い淡黄色、淡橙黄色～淡赤褐色となるが、表面を指で触れたりこすったりしても赤色に変化しない。殻皮の表面には黄褐色を帯びる菌糸束が付着する。殻皮に水酸化カリウム水溶液を滴下すると赤ワイン色に変色する。基本体は子実体の内部に充満し、微細な腔室からなり、幼時は淡オリーブ色、成熟するにつれて褐色となる。担子胞子は長楕円形～紡錘形で小柄を有し、表面は平滑。

【生活史】

詳細については不明である。

【生育環境】

アカマツ，クロマツやリュウキュウマツなどのマツ科林内の砂礫地に発生し、これらの樹木と外生菌根を形成する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林, 砂地・礫地, 砂浜・礫浜
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (5) 沿岸域

【分布域】

茨城県・東京都・石川県・愛知県・滋賀県・京都府・大阪府・鳥取県・愛媛県などの、アカマツ、クロマツやリュウキュウマツ等のマツ科林内の砂礫地に発生する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2000 年代以降の標本を伴った分布記録は石川県能美市と愛媛県松山市で知られるのみであるが、本菌は日本列島に広く分布するアカマツ、クロマツやリュウキュウマツに菌根を形成するため、既存の生育地以外にも日本国内に未知の生育地が多数ある可能性がある。

【生育地の現況】

本菌はアカマツ、クロマツやリュウキュウマツ等のマツ科林内の砂礫地に発生するが、そのような森林が伐採、造成や植生遷移の進行等に伴い衰退傾向にあり、それに伴い減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採や、道路開発などを目的とした土地造成、さらに遷移の進行に伴う植生の変

化。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第４次 2019：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第４次 2018：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第４次 2017：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第４次 2015：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第４次：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第３次：	ホンショウロ	*Rhizopogon luteolus* Fr.	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 京都府[絶滅寸前種] 大阪府[DD] 島根県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 愛媛県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 池田良幸，2013．新版北陸のきのこ図鑑．306 pp. 橋本確文堂，金沢．
- Kobayasi, Y., 1937. Fungi Austro-Japoniae et Micronesiae. II. The Botanical Magazine, Tokyo, 51: 797-804.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rhizopogon luteolus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rhizopogon luteolus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

イグチ目 Boletales　ニセショウロ科 Sclerodermataceae

ツチグリカタカワタケ

Scleroderma polyrhizum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌は西南日本を中心に比較的広域に分布するが、既知の生育地のほとんどで子実体発生は散発的であり、広島市の 1 地点を除き継続的な発生が認められないことから、生育密度が低く希少であると判断される。このように、本種の安定的な生育地は少なく、全体的には減少傾向にあると推察されるが、一方で、本種は都市公園のような人工的な緑地に発生することがあるなど、その生育環境に不明な点が多く、減少の度合いを定量的に評価することが現状では困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は扁球形～類球形で直径 10 cm 程度に達し、成熟すると頂部から殻皮が放射状に裂け、星形に開いて中心部に基本体が露出する。殻皮の表面は平滑あるいはささくれ状～鱗片状、黄白色～黄褐色。本州から四国、九州にかけての西南日本を中心に広く分布し、主にブナ科の樹下、時にマツ科の樹下に発生する。既知の生育地のほとんどで子実体発生は散発的で、安定的な生育地は少ない。

基礎情報

【形態】

子実体は幼時、地下生～半地下生で、扁球形～類球形、直径 10 cm 程度に達し、成長に伴い地表に露出し、殻皮が星形に裂けて中心部に基本体が露出する。殻皮の表面は平滑あるいはささくれ状～鱗片状、黄白色～黄褐色で、こすったり切断したりしても変色しない。殻皮は厚く堅固で、成熟すると頂部から放射状に裂け目が生じ、星形に裂開する。基本体は子実体の内部に充満し、はじめ白色で肉質、成熟するにつれて黄土色～褐色の粉状となる。子実体が裂開すると粉状の胞子塊となった基本体が露出し、担子胞子を飛散させる。担子胞子は球形～類球形、表面は微細な針状突起と不完全で不規則な網目状隆起が混在する。

【生活史】

夏から秋にかけて子実体が発生するが、詳細については不明である。

【生育環境】

ブナ科の広葉樹下、時にマツ科の針葉樹下の、主として砂礫地に発生する。都市公園のような人工的な緑地に発生することもある。

生育環境区分：	【陸域_平地部】森林, 市街緑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (3) 都市地域

【分布域】

神奈川県・静岡県・兵庫県・広島県・山口県・愛媛県・大分県などにおいて、ブナ科の広葉樹下や、時にマツ科の針葉樹下の、主として砂礫地に発生する。国外では北アメリカとヨーロッパに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌は本州から四国、九州にかけての西南日本を中心に比較的広域に分布し、日本列島に広く分布するブナ科やマツ科の樹下に発生するため、既存の生育地以外にも日本国内に未知の生育地が多数ある可能性がある。

【生育地の現況】

既知の生育地のほとんどで本菌の子実体発生は散発的であり、継続的な発生が認められないことから、安定的な生育地は少ないと推察される。一方で、本種は都市公園のような人工的な緑地に発生することがあるなど、その生育環境には不明な点が多い。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採や土地造成。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F.Gmel.) Pers.	DD
第４次 2019：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F.Gmel.) Pers.	DD
第４次 2018：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F.Gmel.) Pers.	DD
第４次 2017：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F.Gmel.) Pers.	DD
第４次 2015：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F.Gmel.) Pers.	DD
第４次：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F.Gmel.) Pers.	DD
第３次：	ツチグリカタカワタケ	*Scleroderma polyrhizum* (J.F. Gmel.) Pers.	DD
第２次：	ツチグリカタワタケ	*Scleroderma polyrhizum* Pers.	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

愛媛県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kasuya, T., Imai, K., Hosaka, K., 2023. First report of a subhypogeous basidiomycete, *Scleroderma yunnanense* (Boletales) from Japan. Truffology, 6: 1-6.
- 吉見昭一，2002．日本産ニセショウロ属．日本菌学会会報，43: 3-18.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Scleroderma polyrhizum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Scleroderma polyrhizum is listed as DD under criteria ①. The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

コウヤクタケ目 Corticiales　コウヤクタケ科 Corticiaceae　　日本固有

ヘゴノコウヤクタケ

Leptocorticium cyatheae

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②				
基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 小笠原諸島内のヘゴ生育地だけに分布する。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　コウヤクタケ型の背着生のきのこ。ヘゴ上に発生する。小笠原諸島の父島および母島から報告されたが、近年は記録がない。文献上はフランス領レユニオン島からの記録がある。

基礎情報

【形態】

背着生で子実層面は類白色。担子胞子は円筒形。子実層にデンドロハイフィディアとレプトシスチジアを持つ。

【生活史】

不明。

【生育環境】

小笠原諸島のヘゴの葉柄上に発生。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

小笠原諸島父島、母島。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年確認されておらず、現在の生育状況は不明。

【生育地の現況】

生息地の環境は概ね安定している。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

分布が小笠原諸島に局在する。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S.Ito & S.Imai) Hjortstam & Ryvarden　DD

第４次 2019：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S.Ito & S.Imai) Hjortstam & Ryvarden	DD
第４次 2018：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S.Ito & S.Imai) Hjortstam & Ryvarden	DD
第４次 2017：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S.Ito & S.Imai) Hjortstam & Ryvarden	DD
第４次 2015：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S.Ito & S.Imai) Hjortstam & Ryvarden	DD
第４次：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S.Ito & S.Imai) Hjortstam & Ryvarden	DD
第３次：	ヘゴノコウヤクタケ	*Leptocorticium cyatheae* (S. Ito & S. Imai) Hjortstam & Ryvarden	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Maekawa N, 1993. Taxonomic study of Japanese Corticiaceae (Aphyllophorales) I. Reports of the Tottori Mycological Institute, 31: 1-149.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Leptocorticium cyatheae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leptocorticium cyatheae* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ラッパタケ目 Gomphales　ラッパタケ科 Gomphaceae　　日本固有

ササナバ

Phaeoclavulina campestris

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　②

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。
②生育地が局限されている。
【判断理由】
日本国内における分布地域は広いものの、各地点は散在しており、かつ生育に適した環境のひとつであるネザサ草地の分布も局所的である。ただし、その他の森林環境からも発生は確認されており、潜在的な分布適正地域は広い。最大の分布域である大分県においては、証拠標本に裏付けられている記録以外にも、広い地域での分布が確認されている。ただし、発生量の増減については情報に乏しく、現段階ではカテゴリーを判定することは困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

大分県を中心とした九州のネザサ草原などに生育するキノコ。野焼きなどによって維持されており、管理放棄などによる減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体はサンゴ型で円筒状の基部から樹枝状に分岐、傘はつくらない。淡黄色～黄褐色。傷つけると紫色に変色する。担子胞子は子実体表面に形成され、長楕円形で黄褐色、表面に細かいとげを帯びる、11～14×5～7 μm。

【生活史】

不明。

【生育環境】

おもにネザサ草原の地上に生じる。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 草地　【陸域_平地部】森林, 草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

栃木県、石川県、大分県など。大分県を中心とした九州のネザサ草原等 10 数ヶ所から確認されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年の調査では九州中北部～栃木県に至る広い地域で発生が確認されており、また発生環境はネザサ草原に限らず、杉林などからも報告がある。

【生育地の現況】

生育地の多くは人為的な野焼き等によって維持されており、面積が減少しつつある。今後、生育地の管理状況によっては激減する可能性がある。ネザサ草原は減少傾向にあるが、その他潜在的な発生環境である森林環境は日本全体に広く分布する。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

野焼き等の管理の放棄による環境の変化およびそれにともなう自然遷移。

要因の区分：	(過去)	草地開発, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	(現在)	草地開発, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H.Petersen	VU
第４次 2019：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H.Petersen	VU
第４次 2018：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H.Petersen	VU
第４次 2017：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H.Petersen	VU
第４次 2015：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H.Petersen	VU
第４次：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H.Petersen	VU
第３次：	ササナバ	*Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H. Petersen	VU
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

栃木県[絶滅危惧Ⅱ類（B ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Giachini, A. J; Castellano, M. A. 2011. A new taxonomic classification for species in *Gomphus* sensu lato. Mycotaxon. 115:183-201.
- 今関六也・本郷次雄，1989．原色日本新菌類図鑑(II)．保育社，大阪．315pp.
- 栃木県立博物館編，2018．レッドデータブックとちぎ 2018．随想社，宇都宮．992pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phaeoclavulina campestris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Phaeoclavulina campestris is listed as DD under criteria ②. The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Grassland development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・服部力（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae

エヒメウスバタケ

Hymenochaete odontoides

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

既存の生育地いずれにおいても採集例が極めて少ない。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

子実体は比較的特徴的であり、また野外において短命ではないにもかかわらず、確認された記録地が極めて限定的である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

北米東部と東アジアに分布する。国内では数カ所から記録されているが、近年報告がない。

基礎情報

【形態】

子実体は半背着生で基質上に広く広がり、不完全な傘を形成する。全体に黄褐色で、下面に針状の子実層托を形成する。

【生活史】

不明。

【生育環境】

暖温帯のナラ類の枯枝や倒木に発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

愛知県・岐阜県・愛媛県。

現在の生育状況

【分布域の現況】

愛知県、岐阜県に分布する。

【生育地の現況】

詳細不明。

【個体数の現況】

詳細不明であるが確認数が極めて少ない。近年は確実な報告がない。

存続を脅かす要因

主にナラ類に発生すると見られるが、存続を脅かす要因は不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A.Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD

第４次 2019：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A.Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD
第４次 2018：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A.Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD
第４次 2017：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A.Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD
第４次 2015：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A.Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD
第４次：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A.Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD
第３次：	エヒメウスバタケ	*Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A. Curtis ex Fr.) Ryvarden	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

愛媛県[絶滅（EX）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- He, S-H. and Y-C. Dai, 2012. Taxonomy and phylogeny of *Hymenochaete* and allied genera of Hymenochaetaceae (Basidiomycota) in China. Fungal Diversity, 56: 77-93.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hymenochaete odontoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hymenochaete odontoides* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest

Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae

アラゲカワウソタケ

Inonotus cuticularis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①②

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

いずれの生育地においても確認数が極めて少ない。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

子実体は比較的特徴的かつ野外において短命ではないにもかかわらず、これまで限られた地域からしか記録がない。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は東アジアや北米の温帯域に分布するが、国内では原生的照葉樹林で稀に見られる。国内での生育地は少なく、暖温帯老齢林減少による絶滅が懸念される。

基礎情報

【形態】

子実体は無柄、全体に褐色～黄褐色。傘は半円形、幅 3～10 cm、最初表面に短毛を持つが老成すると無毛で粗面になる。傘肉は黄褐色、強靭な繊維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。傘表面には分岐した剛毛状菌糸を持つ。担子胞子は短楕円形、黄褐色、6～8×4.5～5.5 μm。

【生活史】

子実体は一年生であるが、同一の基質から数年に渡って発生する。

【生育環境】

照葉樹老齢林に依存する。カシ類などの広葉樹枯木上に発生。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

北米および東アジアに分布。北米では普通種であるが、国内では奈良県、大分県などの暖温帯老齢林でまれに見られる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

照葉樹老齢林の減少より生育地が著しく減少している。

【生育地の現況】

生息地の一部でナラ枯れにより宿主となるカシ類の大径木が減少。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

暖温帯老齢林の伐採。ナラ枯れによる宿主となるカシ類大径木の減少。

要因の区分：	（過去）	宿主の減少，基質・基物の減少及び消失
	（現在）	森林伐採

特記事項

過去の標本同定に間違いが多く、国内での発生は数ヶ所のみ。暖温帯の老齢林減少による影響が懸念される。生育地の一部でナラ枯れにより、カシ類の大径木が減少している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P.Karst.	VU
第４次 2019:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P.Karst.	VU
第４次 2018:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P.Karst.	VU
第４次 2017:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P.Karst.	VU
第４次 2015:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P.Karst.	VU
第４次:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P.Karst.	VU
第３次:	アラゲカワウソタケ	*Inonotus cuticularis* (Bull.) P. Karst.	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Gilbertson, R. L. and L. Ryvarden, 1986. *Inonotus cuticularis*. North American Polypores, p. 368-369. Fungiflora, Oslo.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Inonotus cuticularis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Inonotus cuticularis* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest

Threat types:	Decrease in hosts, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae

ヤエヤマキコブタケ

Inonotus pachyphloeus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

子実体は極めて大型になり発生の確認は比較的容易と考えられるが、国内における発生記録は数例であり、どの生育地においても生育密度が著しく低い。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種はタバコウロコタケ科の種としては最大級の子実体を形成する種であり、アジア、アフリカ、南北アメリカおよびオーストラリアの亜熱帯、熱帯地域に分布する。日本では石垣島および西表島の数ヶ所から報告されているに過ぎない。

基礎情報

【形態】

子実体は多年生で、無柄。傘は半円形～丸山形～馬蹄形、傘の表面は黄褐色～灰褐色～暗褐色。傘幅は 50 cm、厚さは 15 cm に至る。傘肉は黄褐色～暗褐色。裏面は管孔状、灰褐色～暗褐色で、孔口は極めて微細（孔口：8～10 個/mm）。

【生活史】

子実体は大型であるが一年生～数年生と見られる。大型の倒木等に発生し、数年～数十年に渡り材中で生存する可能性がある。

【生育環境】

広葉樹の枯れ木または生木上に発生し、材の白腐れを起こす。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

アジア、アフリカ、南北アメリカおよびオーストラリアの亜熱帯、熱帯地域に分布し、日本では石垣島、西表島に分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

八重山諸島の照葉樹老齢林に分布する。生育地の環境は安定していると思われるが、生育地数が少なく、詳細は不明である。近年採集例がない。

【生育地の現況】

生息地の環境は安定しているが、生息地数がすくない。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

森林の伐採や地域開発などによる生育場所である原生林の減少および森林生態系の破壊。また、産地が局限している。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限
	（現在）	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

現時点で八重山諸島における生育域が本種分布域北限の可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤエヤマキコブタケ	*Inonotus pachyphloeus* (Pat.) T. Wagner & M. Fisch.	VU
第４次 2019：	ヤエヤマキコブタケ	*Inonotus pachyphloeus* (Pat.) T. Wagner & M. Fisch.	VU
第４次 2018：	ヤエヤマキコブタケ	*Inonotus pachyphloeus* (Pat.) T. Wagner & M. Fisch.	VU
第４次 2017：	ヤエヤマキコブタケ	*Inonotus pachyphloeus* (Pat.) T. Wagner & M. Fisch.	VU
第４次 2015：	ヤエヤマキコブタケ	*Phellinus pachyphloeus* (Pat.) Pat.	VU
第４次：	ヤエヤマキコブタケ	*Phellinus pachyphloeus* (Pat.) Pat.	VU
第３次：	ヤエヤマキコブタケ	*Phellinus pachyphloeus* (Pat.) Pat.	VU
第２次：	ヤエヤマキコブタケ	*Phellinus pachyphloeus* (Pat.) Pat.	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 青島清雄，1988．沖縄のサルノコシカケの種と分布．日本菌学会第 32 回大会講演要旨集，p. 4.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Inonotus pachyphloeus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Inonotus pachyphloeus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest

	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タバコウロコタケ目 Hymenochaetales　タバコウロコタケ科 Hymenochaetaceae

ナンバンオオカワウソタケ

Inonotus patouillardii

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

子実体は大型で野外において比較的腐りにくいにもかかわらず、記録は限定的であることから、希少と判断できる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　照葉樹林のカシ類大径木にまれに生じるサルノコシカケ型のきのこ。ナラ枯れなどによるカシ類大径木の減少により減少の危険性がある。

基礎情報

【形態】

子実体は無柄、全体に褐色～暗褐色、傘は半円形、幅 20 cm に達する。傘表面ははじめ微毛を持つが後に無毛でひびわれる。傘肉は褐色、強靭な繊維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。管孔には剛毛状菌糸を持つ。担子胞子は短楕円形、褐色、5～7×3.5～5 μm。

【生活史】

子実体は一年生であるが、同一の基質から数年に渡り発生する。

【生育環境】

カシ類の大径生木または枯木上に重なって発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

熱帯地域に広く分布するが、国内での発生はまれで、南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域の数ヶ所（神奈川県、静岡県、鹿児島県、沖縄県等）から知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

暖温帯のカシ類老齢林に分布するが、記録は稀。

【生育地の現況】

生息地の一部でナラ枯れにより宿主となるカシ、シイ大径木が減少している。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

ナラ枯れによる宿主の減少。

要因の区分：	（過去）	宿主の減少，基質・基物の減少及び消失
	（現在）	森林伐採

特記事項

関東以西の照葉樹林のカシ類大径木から記録されているがまれ。生育地の一部でナラ枯れにより、宿主となるカシ類大径木が減少する可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第４次 2019:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第４次 2018:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第４次 2017:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第４次 2015:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第４次:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第３次:	ナンバンオオカワウソタケ	*Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 愛媛県[情報不足（DD）] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ryvarden, L. and I. Johansen, 1980. *Inonotus patouillardii*. A preliminary polypore flora of East Africa, p126-127. Fungiflora, Oslo.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Inonotus patouillardii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Inonotus patouillardii* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Decrease in hosts, Reduction or loss of substrate

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

スッポンタケ目 Phallales　ツマミタケ科 Lysuraceae

キアミズキンタケ

Lysurus periphragmoides

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

国内における分布は石垣島に限定されている。現在の確実な分布は石垣島米原および川平のみであるが、近年はサトウキビなどの畑周辺における発生が確認されており、同様の環境は島内に広く存在することから、島内における潜在的な発生適地は広い。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は黄色の托と網目状の頭部を持ち、コナガエノアカカゴタケと良く似た形態をしているものの、いくつかの点で大きな違いがある。本種の日本における唯一の分布地は沖縄県石垣島にあり、遊歩道の建設などにより生育地の環境は大きく損なわれている。

基礎情報

【形態】

菌蕾は類球形～卵形、白色、成熟し托が伸長すると高さ 5～10 cm、クリーム色～淡い黄色。托の上部には淡い黄色～黄色で網目・カゴ状で類球形の頭部を持つ。グレバは粘液状で頭部に形成され、オリーブ色～褐色。腐った果実臭を発する。コナガエノアカカゴタケ *Simblum sphaerocephalum* のシノニム扱いとする見解もあるが、両者には色や形で明確な違いが見られ、かつ分子系統学的にも明らかに別種である（Caffot et al., 2018）。

【生活史】

不明である。

【生育環境】

ヤシ科植物が優占する湿潤な亜熱帯林に発生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 草地　【陸域_平地部】田地・畑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

インド洋西部のモーリシャス島で記載された種で、インド、セイロン、ジャワ島、タイ、台湾等に分布する。日本では沖縄県石垣島の米原（1993 年、1 標本）、御神崎（1989 年、1992 年、計 3 標本）の他、近年は石垣島の米原および川平で大量発生した記録がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

沖縄県石垣島米原のヤエヤマヤシ林は、すでに林道開発による悪影響を受けており近年の発生は確認されていない。この環境が今後さらに悪化することによる消滅が懸念される。近年は島内の近隣数地点（主にサトウキビ畑）から発生が報告されており、写真および標本の記録が残されている。安定的に発生しているかは不明だが、一回における発生子実体数は多い。

【生育地の現況】

ヤエヤマヤシ林は保護されているものの、林道の整備などによる発生地点の環境悪化がある。新規報告値はサトウキビ畑および草地であり、サトウキビの搾りかすおよびその周辺に大量に発生する。同じような環境は島内各地に存在するが、確実な発生例が確認されているのは石垣島米原および川平のみ。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採、道路建設に加え、局所的な分布。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，分布・産地局限，基質・基物の減少及び消失
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，分布・産地局限，基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第４次 2019：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第４次 2018：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第４次 2017：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第４次 2015：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第４次：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第３次：	キアミズキンタケ	*Simblum periphragmoides* Klotzsch	CR+EN
第２次：	－	－	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Caffot, M. L. H., K. Hosaka, L. S. Domínguez and C. Urcelay, 2018. Molecular and morphological data validate the new combination of *Lysurus sphaerocephalum* from Argentina, with some additional records on *Phallales* (Agaricomycetes). Mycologia, 110: 419-433.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lysurus periphragmoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lysurus periphragmoides* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—



執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館） Kentaro Hosaka

公表年月：2025 年 3 月

スッポンタケ目 Phallales　スッポンタケ科 Phallaceae

ウスキキヌガサタケ

Phallus luteus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌は西南日本に比較的広域に分布するが、既知の産地における子実体の発生は散発的であり、生育密度は低いと判断される。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は幼時、淡ピンク色～赤褐色を帯びた球形～卵形の菌蕾で、成熟するにつれてその頂部から類白色、クリーム色～淡黄色で海綿状の托が伸長し、托の上部には粘液状のグレバが付着した円錐形～釣鐘形の傘を備え、傘の下端からは黄色～橙黄色でレース状の菌網が下部に向かい広がる。本州から四国、九州にかけての西南日本に比較的広く分布するが、子実体の発生は散発的で、生育密度は低い。

基礎情報

【形態】

菌蕾は類球形～卵形、淡ピンク色～赤褐色で、基部に長く伸び、分枝し、ピンク色～赤褐色を帯びる菌糸束を持つ。菌蕾の頂部からは、成熟するにつれて高さ 7～22 cm 程度で、類白色、クリーム色～淡黄色を帯びる、海綿状の托が上部に向かい伸長する。托の上部に円錐形～釣鐘形で、淡黄色～橙黄色、高さ 25～40 mm の傘を備え、傘の表面は網目状で頂部は截断状。傘の表面にはオリーブ色～黒緑色の粘液状のグレバが付着し、刺激臭を発する。傘の下端からは長さ 6～16 cm 程度で、黄色～橙黄色のレース状の菌網が下部に向かって広がる。菌網の網目は多角形～円形。担子胞子は広楕円形～円筒形、表面は平滑。

【生活史】

日本においては夏～秋、特に 6～7 月と 9～10 月に発生するが、詳細については不明である。

【生育環境】

スギ・ヒノキ林内、モウソウチク林内や、ブナ科コナラ属やシイ属などからなる森林内の腐植上あるいは地上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本では滋賀県、京都府、広島県、山口県、愛媛県、高知県、福岡県、宮崎県などに分布する。国外では韓国、中国、インド、メキシコから報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本菌は本州から四国、九州にかけての西南日本に比較的広域に分布し、既存の生育地以外にも日本国内に未知の生育地が多数ある可能性があり、分布状況の正確な把握が必要である。

【生育地の現況】

既存の生育地は西南日本の比較的広域に知られるが、いずれにおいても子実体の発生は散発的であり、生育密度は低いと判断されるため、現在知られている生育地の環境が開発などにより失われれば消滅が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

土地造成などに伴う森林伐採。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ウスキキヌガサタケ	*Phallus luteus* (Liou & L. Hwang) T. Kasuya	DD
第４次 2019：	ウスキキヌガサタケ	*Phallus luteus* (Liou & L. Hwang) T. Kasuya	DD
第４次 2018：	ウスキキヌガサタケ	*Phallus luteus* (Liou & L. Hwang) T. Kasuya	DD
第４次 2017：	ウスキキヌガサタケ	*Phallus luteus* (Liou & L. Hwang) T. Kasuya	DD
第４次 2015：	ウスキキヌガサタケ	*Dictyophora indusiata* f. *lutea* (Liou & L.Hwang) Kobayasi	DD
第４次：	ウスキキヌガサタケ	*Dictyophora indusiata* f. *lutea* (Liou & L.Hwang) Kobayasi	DD
第３次：	ウスキキヌガサタケ	*Dictyophora indusiata* f. *lutea* (Liou & L. Hwang) Kobayasi	DD
第２次：	ウスキキヌガサタケ	*Dictyophora indusiata* (Vent. : Pers.) Fischer f. *lutea* (Liou et Hwang) Kobayasi	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

長野県[準絶滅危惧（NT）] 京都府[絶滅種] 愛媛県[準絶滅危惧（NT）] 福岡県[情報不足] 佐賀県[準絶滅危惧種] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kasuya, T., 2008. *Phallus luteus* comb. Nov., a new taxonomic treatment of a tropical phalloid fungus. Mycotaxon, 106: 7-13.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Phallus luteus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Phallus luteus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

スッポンタケ目 Phallales　プロトファルス科 Protophallaceae

ニカワショウロ

Protubera borealis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　―	基準 B:　データ不足	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本菌と同定された標本は、北海道から九州（大分県・長崎県対馬）に至る全国各地より得られており、本菌の国内における分布の範囲そのものは広いことが推察される。一方で、近年、日本の森林における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本は相対的に少なく、既存の産地も局地的であるため、本種の生育密度は日本国内において低く、希少であると判断される。なお、本菌の生育環境や生活史、分類学的な位置づけに不明確な点が多く、「絶滅危惧」カテゴリーを判定するに足る既知情報が少ないことから、現状ではカテゴリーの判定は困難である。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は球形～扁球形で直径 10 cm 程度に達する。外皮は灰褐色～暗褐色で、子実体の内部は半透明の寒天質の組織が充満し、オリーブ色の基本体が子実体の中心から縁に向かい放射状に配列する。北海道から九州にかけて広く分布し、主に山地のブナ・ミズナラ林などの広葉樹林内で、腐朽した材の周辺などの地上に発生する。各地域における分布は局地的で、かつ森林伐採などによる生育地の環境悪化により分布域の減少が懸念される。なお、ニカワショウロと呼ばれている菌は複数種が混同されている可能性が高く、分類学的な再検討が必要である。

基礎情報

【形態】

子実体は球形～扁球形で直径 10 cm 程度に達し、基部に白色の根状菌糸束を有する。外皮は灰褐色～暗褐色で、子実体の内部には半透明で寒天質の組織が充満し、その合間に基本体が存在する。基本体は扁平な袋状の組織からなり、内部はオリーブ色、子実体の中心から縁に向かい放射状に配列する。担子胞子は長楕円形で表面は平滑。なお、ニカワショウロと呼ばれている菌は複数種が混同されている可能性が高く、分類学的な再検討が必要である。

【生活史】

詳細については不明である。

【生育環境】

主に山地のブナ・ミズナラ林などの広葉樹林内で、腐朽した材の周辺などの地上に発生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北海道、青森県、茨城県、栃木県、愛知県、滋賀県、鳥取県、山口県、大分県、長崎県。現在のところ日本のみで知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道から九州（大分県・長崎県対馬）に至る全国各地に分布し、本菌の国内における分布の範囲そのものは広いことが推察される。一方で、近年、日本の森林における菌類相の調査は全国各地で行われているが、これまでに本種として正確に同定された標本は相対的に少なく、既存の産地も局地的である。ただし、ニカワショウロと呼ばれている菌は複数種が混同されている可能性が高く、分類学的な混乱が認められるため、分布状況の正確な把握は困難である。

【生育地の現況】

既存の生育地の一部は森林伐採や、道路開発などに伴う土地造成による悪影響を受けており、現在知られている発生地の環境がそれらにより失われれば減少が懸念される。

【個体数の現況】

詳細については不明である。

存続を脅かす要因

元々の産地局限に加えて、森林伐採や、道路開発などを目的とした土地造成。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，土地造成，分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S.Imai) S.Imai & Kawam.	DD
第４次 2019：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S.Imai) S.Imai & Kawam.	DD
第４次 2018：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S.Imai) S.Imai & Kawam.	DD
第４次 2017：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S.Imai) S.Imai & Kawam.	DD
第４次 2015：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S.Imai) S.Imai & Kawam.	DD
第４次：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S.Imai) S.Imai & Kawam.	DD
第３次：	ニカワショウロ	*Protuberella borealis* (S. Imai) S. Imai & Kawam.	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

栃木県[情報不足] 鳥取県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 山本航平・大前宗之，2024．栃木のきのこ新図鑑．319 pp. 下野新聞社，宇都宮．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Protubera borealis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Protubera borealis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	糟谷大河（慶應義塾大学） Taiga Kasuya

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　ダクリオボルス科 Dacryobolaceae

ツガマイタケ

Osteina obducta

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

いずれの生育地においても記録数が非常に少なく希少と考えられる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

北半球の冷涼な地域に広く分布。通常針葉樹上に発生するが、広葉樹上の発生記録もある。国内では本州中部の山岳地域を中心に分布する。国内のいずれの生息地においても希少と考えられていたが、一部地域では希少とは言えない可能性があり、検討の継続が必要である。

基礎情報

【形態】

子実体は一年生で、共通の基部から複数の傘が展開。傘表面は薄黄色～淡灰褐色、下面は白色で微小な孔口が形成される。傘肉はやや強靭な肉質。

【生活史】

子実体は一年生であるが、数年に渡って同一基物上に発生する可能性がある。

【生育環境】

カラマツやコメツガなどの倒木や切株上に生育。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、群馬県・埼玉県・栃木県・長野県・静岡県・愛媛県・熊本県

現在の生育状況

【分布域の現況】

中部地方の山岳地域を中心とするカラマツ、コメツガ林などで生育する。

【生育地の現況】

生育地の環境は概ね安定している。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD
第４次 2019：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD

第４次 2018：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD
第４次 2017：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD
第４次 2015：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD
第４次：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD
第３次：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. & Ryvarden	DD
第２次：	ツガマイタケ	*Oligoporus obductus* (Berk.) Gilb. et Ryv.Syn. *Osteina obducta* (Berk.) Donk	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[情報不足（DD）] 静岡県[要注目種（N-Ⅲ 部会注目種）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Aoshima K., Furukawa H., 1963. A note on *Grifola obducta* (Berk.) Aoshima et Furukawa, comb. nov. Transaction of the Mycological Society of Japan, 4: 91-93.
- 小山明人，2018．諏訪地方におけるツガマイタケについて．茅野市八ヶ岳総合博物館紀要，26: 17-19.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Osteina obducta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Osteina obducta* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者:	服部力（森林総合研究所）
Author:	Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　インクルストポリア科 Incrustoporiaceae

ダイダイサルノコシカケ

Skeletocutis albomarginata

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 比較的特徴的な種であるが、どの生育地においても記録が非常に少ない。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

本種は熱帯種であり、アジアおよびアフリカの熱帯域に広く分布する。国内では 1967 年に西表島で採集された標本に基づき、1974 年に日本初産として報告され、その後宮崎県においても発見された。宮崎県における生育域は本種分布域の北限と考えられ、本種の地理的分布を把握する上で重要である。

基礎情報

【形態】

子実体は一年生～多年生で無柄～半背着生。傘は不定形～半円形でオレンジ色がかった茶色、同心円状の溝がある。傘肉はレンガ色。直径は最大 20 cm、肉は厚さ 2～4 cm に達する。裏面の孔口は微細、白色～薄茶色。

【生活史】

比較的大型の倒木に発生することから、数年～10 数年に渡って同一基物上に生息し、胞子散布を繰り返す可能性がある。

【生育環境】

広葉樹に発生。材の白色腐朽を起こす。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

アジアおよびアフリカの亜熱帯から熱帯域に広く分布。国内では宮崎県および沖縄県（西表島）に分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

広葉樹の老齢林に発生するが、生育条件の詳細は不明。宮崎県および西表島浦内川流域から確認されているが、標本数は少ない。ただし、生育地の環境は安定している。

【生育地の現況】

生息地の環境は安定しているが、生息地数が少ない。

【個体数の現況】

生育数は極めて少ない。

存続を脅かす要因

森林の伐採や道路の敷設などの地域開発による老齢林の減少。分布は宮崎県下の 1 地域および西表島浦内川流域と産地が局限している。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限
	（現在）	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

宮崎県における生育域は本種分布域の北限と考えられ、本種の地理的分布を把握する

上で重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第４次 2019：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第４次 2018：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第４次 2017：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第４次 2015：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第４次：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第３次：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvarden	VU
第２次：	ダイダイサルノコシカケ	*Pyrofomes albomarginatus* (Lev.) Ryv.Syn. *Pyropolyporus albomarginatus* (Zippoli ex Lev.) Murrill	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 青島清雄・大宜味朝栄，1974．沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布．国立科博専報，7: 85-88.
- 青島清雄，1988．沖縄のサルノコシカケの種と分布．日本菌学会第 32 回大会講演要旨集，p. 4.
- Du Rui and Y. C. Dai, 2020. A new species and three new combinations of *Skeletocutis* (Incrustoporiaceae, Basidiomycota). Mycosystema, 39: 637–644.

- 黒木秀一，2000．ダイダイサルノコシカケ．宮崎県の保護上重要な野生生物，p. 199．宮崎県環境科学協会，宮崎．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Skeletocutis albomarginata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Skeletocutis albomarginata* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　タマチョレイタケ科 Polyporaceae

チョレイマイタケ

Dendropolyporus umbellatus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 子実体は極めて特徴的であるが、どの生育地においても希少である。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　北半球の冷涼な地域に広く分布する。国内でも冷温帯地域を中心に広く分布するが、稀。食用、薬用として採取されることが多い。菌核は漢方薬の猪苓として用いられる。

基礎情報

【形態】

子実体は地中に形成された菌核から生える。柄は著しく分岐し、先端に円形の傘をつける。傘表面は淡褐色。

【生活史】

子実体は一年生、夏～秋期に発生。菌核から数年にわたって子実体が発生する。

【生育環境】

ブナ、ミズナラ、カエデなどの広葉樹林内地上。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

北海道・青森県・福島県・茨城県・石川県・長野県・静岡県・京都府・鳥取県・広島県・愛媛県。冷涼な地域に広く分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内の冷涼な地域や高標高地の広葉樹林に広く分布。

【生育地の現況】

生育地の環境は概ね安定しているが、いずれの生育地においても非常に稀。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

食用、薬用として重用される。菌核から生じるが、菌核ごと採取されることから、一定の採集圧が存在する危険性がある。

要因の区分：	（過去）	食用・薬用採取
	（現在）	森林伐採, 食用・薬用採取

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第４次 2019：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第４次 2018：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第４次 2017：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第４次 2015：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第４次：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第３次：	チョレイマイタケ	*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Julich	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 福島県[準絶滅危惧（NT）] 茨城県[準絶滅危惧] 静岡県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 鳥取県[準絶滅危惧（NT）] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也．1989．チョレイマイタケ．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 II，p139．保育社，大阪．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dendropolyporus umbellatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dendropolyporus umbellatus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Harvesting of biological resources for food and medicinal use
Law designation status for conservation	—

執筆者:	服部力（森林総合研究所）
Author:	Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　タマチョレイタケ科 Polyporaceae

ヒジリタケ

Lignosus rhinocerotis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①③④

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

子実体は特異な形状を示し、比較的大型、また野外において比較的長命であるにもかかわらず、採集もしくは確認される頻度は非常に低い。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

国内での生育は概ね西表島に限られている。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

天然林の河川周辺の砂地や一部の海岸林に発生が限られる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

本種は熱帯種であり、東南アジアからオーストラリアにかけて分布するが、国内では石垣島と西表島においてのみ生育が確認され、分布域は極めて狭く、また発生はまれである。両島における分布が本種分布域の北限と考えられ、本種の地理的分布を把握する上でも重要である。

基礎情報

【形態】

子実体は有柄。柄は傘の中心につく。傘は円形で表面は淡褐色～灰色、直径は最大 10 cm、肉の厚さ 4 mm、裏面は管孔状（孔口 7～8 個/mm）、白色～クリーム色である。柄の長さは 20 cm くらいまで。中国から記載された *Lignosus hainanensis* B.K. Cui は大型の孔口（3～4 個/mm）を持つことにより、ヒジリタケと識別できるが、国内産種の系統についても再検討が望ましい。

【生活史】

子実体は一年生であるが、地中に形成された菌核から数年に渡って発生すると思われる。

【生育環境】

キノコは地上生で、地中に形成される菌核から発生する。河川沿いの氾濫原周辺の森林地上などに発生する。河川の開発により減少する可能性が大きい。国内生育地は石垣島、西表島のみである。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川上流域, 河川中流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

東南アジア（フィリピン、マレー半島、ボルネオなど）およびニューギニア、オーストラリアの亜熱帯から熱帯に分布する。日本では沖縄県（石垣島、西表島）からのみ知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

これまで、おもに河川氾濫原周辺の林内地上から記録されているが、石垣島ではダム建設などによりこうした環境はほとんど残されておらず、近年石垣島での生育が確認されていない。

【生育地の現況】

河川沿いの氾濫源周辺の森林に発生する。開発により減少する可能性大。西表島の生育地は概ね安定している。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

生息地の一つである石垣島では、ダム建設、河川や海岸の護岸工事などが存続を脅かす要因と考えられる。西表島では深刻な要因は見当たらない。

要因の区分：	（過去）	ダム・河川工作物建設
	（現在）	森林伐採，ダム・河川工作物建設

特記事項

石垣島および西表島における生育域は本種分布域の北限と考えられ、本種の地理的分布を把握する上で重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第４次 2019：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第４次 2018：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第４次 2017：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第４次 2015：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第４次：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第３次：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerus* (Cooke) Ryvarden	CR+EN
第２次：	ヒジリタケ	*Lignosus rhinocerus* (Cooke) Ryv.Syn. *Coriolus rhinocerus* (Cooke) Aoshima	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 青島清雄・大宜味朝栄，1974．沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布．国立科博専報，7: 85-88.
- 青島清雄，1988．沖縄のサルノコシカケの種と分布．日本菌学会第 32 回大会講演要旨集，p. 4.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lignosus rhinocerotis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Lignosus rhinocerotis is listed as DD under criteria ①③④. The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies. ③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range). ④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

タマチョレイタケ目 Polyporales　タマチョレイタケ科 Polyporaceae

ニセカンバタケ

Tomophagus colossus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 子実体は大型で特徴的であるが、記録がほとんどないことから非常に希少と判断できる。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

広葉樹、まれにヤシ類上に生じる。国内では 1947 年以来報告がなく、絶滅したと考えられていたが、愛媛県等で再発見された。

基礎情報

【形態】

子実体は無柄、半円形、丸山形、しばしば大型で幅 50 cm に達する。傘表面は淡黄色～黄褐色でややニス状光沢をもつ。傘肉はやや脆い繊維質で類白色。子実層托は管孔状。担子胞子はマンネンタケ型、12～14.5×9.5～10.5 μm。しばしば傘肉中に厚壁胞子を形成する。

【生活史】

子実体は 1 年生で、主に夏～秋期に発生するが、子実体の発生自体も稀と考えられる。

【生育環境】

広葉樹、まれにヤシ類上に生じる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では宮崎県内で 1947 年に確認後長らく自然環境下での発生がなかったが、2023 年に愛媛県等で発見された。国内の暖温帯以南に広く分布する可能性があるが、いずれの生息地でも極めて稀。熱帯地域に広く分布するが、稀。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では暖温帯地域の数箇所から記録があるだけで、正確な分布域は不明。

【生育地の現況】

生育地は概ね安定と考えられる。

【個体数の現況】

詳細は不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F.Baker	EX
第４次 2019:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F.Baker	EX
第４次 2018:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F.Baker	EX
第４次 2017:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F.Baker	EX
第４次 2015:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F.Baker	EX
第４次:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F.Baker	EX
第３次:	ニセカンバタケ	*Ganoderma colossus* (Fr.) C.F. Baker	EX
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

愛媛県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也，1953．宮崎県下で採集された 2 種の熱帯系の茸．Nagaoa，3: 22-25.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tomophagus colossus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tomophagus colossus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Unknown

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　マンネンハリタケ科 Echinodontiaceae　　日本固有

マンネンハリタケ

Echinodontium tsugicola

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

日本固有種であり、本州中部の山岳地帯のコメツガ等針葉樹林にのみ分布する。

評価分科会：　菌類分科会

概要

子実体は多年生で全体に石のように硬い。日本固有種であり、本州中部山岳地帯のコメツガ等針葉樹林に分布が限られる。

基礎情報

【形態】

子実体は多年生、半背着生～無柄で全体に石のように硬い。傘上面は黒褐色でひび割れる。子実層托は鍾乳石のような先の丸い針状。傘肉はレンガ色。胞子は短楕円形、表面は微細突起に覆われ、アミロイド。

【生活史】

子実体は多年生。コメツガなどの生木の心材内で数十年に渡り生育するとみられる。

【生育環境】

本州の山岳地帯のツガ類など針葉樹林に分布する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

本州中部の山岳地域を中心に分布する。長野県、山梨県、群馬県、栃木県などから記録されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

長野県、山梨県、群馬県、栃木県などに分布、コメツガ、ツガなどから発生が確認されている。

【生育地の現況】

分布域は限られているが、生育地の顕著な劣化などは認められない。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

分布地・産地が本州中部の亜高山帯針葉樹林に局限されている。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限
	（現在）	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第４次 2019：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第４次 2018：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第４次 2017：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第４次 2015：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第４次：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第３次：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. & Shirai) Imazeki	DD
第２次：	マンネンハリタケ	*Echinodontium tsugicola* (Henn. et Shirai) Imazeki	CR+EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

栃木県[情報不足] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也，1989．マンネンハリタケ．今関六也・本郷次雄（編），原色日本新菌類図鑑 II，p110．保育社，大阪.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Echinodontium tsugicola has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Echinodontium tsugicola* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　サンゴハリタケ科 Hericiaceae

フサハリタケ

Hericium cirrhatum

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

形態学的に特徴的であるにもかかわらず、いずれの生育地においても記録が限定的であり、希少と考えられる。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　北半球の冷涼な地域に広く分布するが、国外においても希少。国内では青森県から初めて報告され、その後関東・中部地方の山岳地域などでも見つかっている。

基礎情報

【形態】

全体に類白色～クリーム色、傘表面は粗毛状の突起に被われ、傘下面には針状の子実層托が形成される。胞子は広楕円形で平滑、アミロイド。

【生活史】

子実体は比較的短命であるが、倒木上で数年に渡り子実体を形成すると見られる。

【生育環境】

冷温帯の渓畔林のブナなど広葉樹倒木上に発生。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

北半球の冷涼な地域に広く分布する。国内では、北海道、青森県、宮城県、栃木県、埼玉県、静岡県からの記録がある。潜在的には冷温帯の渓畔林を中心に広く分布する可能性がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

東北～中部地方の冷温帯を中心に広く分布する可能性がある。

【生育地の現況】

生息地の顕著な劣化は認められない。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	不明
	（現在）	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P.Karst.	NT
第４次 2019:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P.Karst.	NT
第４次 2018:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P.Karst.	NT
第４次 2017:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P.Karst.	NT
第４次 2015:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P.Karst.	NT
第４次:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P.Karst.	NT
第３次:	フサハリタケ	*Creolophus cirrhatus* (Pers.) P. Karst.	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 静岡県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 長沢栄史・工藤伸一，1992.日本新産種 *Creolophus cirrhatus*（フサハリタケ－新称）について．菌蕈研究所研究報告，30: 69-74.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hericium cirrhatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hericium cirrhatum* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

Author:

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　ベニタケ科 Russulaceae　　日本固有

オガサワラハツタケ

Lactarius ogasawarashimensis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④				
基準 A:　－	基準 B:　データ不足	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

菌根性でありリュウキュウマツと共生するため、リュウキュウマツ林のみに分布、発生する。ホストであるリュウキュウマツは小笠原においては移入種であり、本種も琉球列島から持ち込まれたと考えられる。琉球列島から本種の報告がされた例はないものの、現地でまだ生存している可能性を鑑み、EX から DD にカテゴリーを変更した。

評価分科会：　菌類分科会

概要

　リュウキュウマツ林中に発生し、藍色の乳液を分泌する。リュウキュウマツは沖縄県から移植された樹種なので、本種も沖縄県から入った可能性がある。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。

基礎情報

【形態】

子実体（キノコ）は孤生あるいは群生。傘は径 3～10 cm、丸山形のち偏平となり、ついに中央が圧低する。表面は粘性、無毛、幼時汚桃色のち帯桃白色、幼時はほとんど環紋なく、のち汚白色および暗色の交互環紋を生じ、白色光沢がある。縁ははじめ無毛。肉は白色で厚く、傷時乳汁によって青色となる。においおよび味なし。乳汁は多くなく藍色。ヒダは垂生、オリーブ白色、密生、基部に時にしわがあり、時に叉状となる。柄は 2.5～6×0.6～1.5 cm、下方狭細あるいはやや同幅、淡青空色あるいは暗青空色で光沢があり、中空。胞子は類球形、有疣、7.5～8.5×7～7.5 µm。胞子紋はクリーム白色。食用になる。

【生活史】

秋、リュウキュウマツ林地上に発生。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_海岸部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

東京都（小笠原）で 2 地点のみ。1936 年に小笠原諸島父島桑ノ木山（11 月 5 日）、父島連珠谷（11 月 9 日）で採集され、1940 年に報告された。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1936 年以降に再発見はされていない。

【生育地の現況】

リュウキュウマツの駆除が一部進んでいるが、まだ本数は多く、分布適地は多く残されている。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 宿主の減少
	（現在）	森林伐採, 宿主の減少

特記事項

菌根性きのこであり外来種のリュウキュウマツと共生していることは明らかである。そのため小笠原諸島固有の種ではなく、リュウキュウマツの植林に伴い琉球列島から持ち込まれた可能性が高い。琉球列島で本種の報告例がないため個体数の推移について推定することは不可能であるが、リュウキュウマツ自生地には本種が現在でも生息している可能性は高い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S.Ito & S.Imai	EX
第３次：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S. Ito & S. Imai	EX
第２次：	オガサワラハツタケ	*Lactarius ogasawarashimensis* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hosaka, K., T. Kobayashi, M. A. Castellano and T. Orihara, 2018. The status of voucher specimens of mushroom species thought to be extinct from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series B (Botany), 44: 53-66.
- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, IV. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 45-56.
- 伊藤誠哉，1959．オガサワラハツタケ．日本菌類誌，2(5): 507．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lactarius ogasawarashimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lactarius ogasawarashimensis* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Decrease in hosts
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・吹春俊光（元千葉県立中央博物館） Kentaro Hosaka and Toshimitsu Fukiharu

公表年月：2025 年 3 月

ベニタケ目 Russulales　ベニタケ科 Russulaceae　　日本固有

オガサワラキハツダケ

Russula boninensis

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④				
基準 A:　－	基準 B:　データ不足	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 【判断理由】 菌根性でありリュウキュウマツと共生するため、リュウキュウマツ林のみに分布、発生する。ホストであるリュウキュウマツは小笠原においては移入種であり、本種も琉球列島から持ち込まれたと考えられる。琉球列島から本種の報告がされた例はないものの、現地でまだ生存している可能性を鑑み、EX から DD にカテゴリーを変更した。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　リュウキュウマツの落葉の間に発生する。イロガワリシロハツ（*R. metachroa* Hongo）に酷似する。1936 年に小笠原で採集され、1940 年に報告された。その後の採集記録はない。原記載も簡単なため、形態、生理、生態の詳細については不明な点が多い。ホストであるリュウキュウマツは小笠原においては移入種であるため、本種も琉球列島から持ち込まれたと考えられるが、琉球列島における分布は未確認である。

基礎情報

【形態】

子実体は群生あるいは孤生。傘は径約 4～7 cm、丸山形のち偏平となり、ついに中央が圧低する。表面は粘性、平滑で帯白色から帯黄色、中央は暗色、外被は剥げやすく、縁辺は後に線条がある。肉は白色で厚く、海綿質、味は辛く、においなし。ヒダは直生、やや等長、はじめ白色のち帯黄色で密。柄は 4～5×1～1.5 cm、同幅、白色で基部は帯黄色、無毛で光沢があり、充塞。胞子は類球形あるいは広楕円形、刺があり、7.4～10×7～8 μm。

【生活史】

不明である。

【生育環境】

リュウキュウマツ林。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

1936 年に小笠原諸島父島の 3 地点で採集されたのが唯一の発見例である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1936 年以降に再発見はされていない。

【生育地の現況】

リュウキュウマツ林は小笠原諸島父島および母島に広く分布しており、生育適地は広い。一部の地域ではリュウキュウマツの駆除対策が進んでいるものの、全体的には良好な状態で保たれている。また、小笠原諸島におけるリュウキュウマツは琉球列島から人為的に植林された移入種であり、本種の本来の分布も琉球列島であると推測される。琉球列島におけるリュウキュウマツ林も広い地域で良好な状態である。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

菌根ホストであるリュウキュウマツ林の減少。

要因の区分：	（過去）	森林伐採
	（現在）	森林伐採

特記事項

小笠原諸島におけるリュウキュウマツは琉球列島から人為的に植林された移入種であり、本種の本来の分布も琉球列島であると推測される。琉球列島におけるリュウキュウマツ林も広い地域で良好な状態である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第４次：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S.Ito & S.Imai	EX
第３次：	オガサワラキハツダケ	*Russula boninensis* S. Ito & S. Imai	EX
第２次：	オガサワラキハツタケ	*Russula boninensis* S. Ito et Imai	EX
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ito, S. and S. Imai, 1940. Fungi of the Bonin Islands, Ⅳ. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 16: 56.
- 伊藤誠也，1959．オガサワラキハツダケ．日本菌類誌，2(5): 458．養賢堂，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Russula boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Russula boninensis* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category. ④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所） Kentaro Hosaka and Hitoshi Neda

公表年月：2025 年 3 月

イボタケ目 Thelephorales　マツバハリタケ科 Bankeraceae

シシタケ

Sarcodon imbricatus

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①				
基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 インターネット情報を含め、本種と断定できるものの情報が非常に限られており、どの生育地でも希少と判断できる。				
評価分科会：　菌類分科会				

概要

　主にトウヒ属などの針葉樹と菌根を形成して生育する。北半球の冷涼な地域に広く分布するが、国内での発生は稀。

基礎情報

【形態】

子実体は漏斗形。傘は径 5～25 cm、表面は薄褐色で、暗色の鱗片に被われる。肉は淡褐色、弾力のある肉質。子実層托は針状で柄に垂生する。針は長さ 1 cm 程度で密生し、はじめ灰白色、のち濃褐色となる。柄は太短く、中心生、中実、強靭、表面は平滑で淡褐色。担子胞子は類球形でイボに被われ、褐色、7～8.5×4.5～5 μm。

【生活史】

子実体は夏～秋期に発生する。トウヒ等の樹木と共生し、数年以上にわたって子実体を形成する。

【生育環境】

トウヒ林等の針葉樹林内地上。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林　【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本、ヨーロッパ、北アメリカに分布。国内では青森県、山形県、福島県、石川県、長野県などから知られる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道や本州の山岳地帯など、トウヒ属の森林を中心に分布すると考えられる。

【生育地の現況】

主要な生育地となるトウヒ林については、顕著な衰退や環境劣化は認められない。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

存続を脅かす顕著な要因は不明。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 管理放棄, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	森林伐採, 管理放棄, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

発生はまれである。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P.Karst.	VU
第４次 2019：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P.Karst.	VU
第４次 2018：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P.Karst.	VU
第４次 2017：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P.Karst.	VU
第４次 2015：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P.Karst.	VU
第４次：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P.Karst.	VU
第３次：	シシタケ	*Sarcodon imbricatus* (L.) P. Karst.	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和４年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[情報不足（DD）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和４年度末時点）

指定なし

参考文献

- 今関六也・本郷次雄，1989．シシタケ．原色日本新菌類図鑑(II)，p 127．保育社，大阪．
- Pegler, D. N., P. J. Roberts and B. M. Spooner, 1997. British Chanterelles and Tooth-Fungi. Royal Botanic Gardens, Kew. 114pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sarcodon imbricatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sarcodon imbricatus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Abandonment of management, Reduction or loss of substrate

Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	服部力（森林総合研究所） Tsutomu Hattori

公表年月：2025 年 3 月

第５次レッドリスト（菌類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種の解説

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ケカビ目	クスダマカビ科
ドウタイクスダマカビ	
Cunninghamella homothallica Komin. & Tubaki	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本種は、原報告以降採集例がない。最近、海外からのオカレンスが報告されているが（GBIF）、これは環境 DNA に基づくもので、採集されたものではない。本種は培養によって得ることが必要な土壌菌であり、積極的な探索がなされない限り消長を議論することができない。このような種をレッドリストに入れること自体を再考する必要がある。なお、本種は、培養株がカルチャーコレクションに保存されている（NBRC 6736）ため、遺伝資源保全上の対応はなされている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第４次 2019:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第４次 2018:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第４次 2017:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第４次 2015:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第４次:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第３次:	ドウタイクスダマカビ	*Cunninghamella homothallica* Komin. & Tubaki	EW
第２次:	ドウタイクスダマカビ（新称）	*Cunninghamella homothallica* Kominami et Tubaki	EW
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　細矢剛（国立科学博物館）

レッドリスト 2020 掲載名	
スッポンタケ目	スッポンタケ科
ツクシタケ	
Lysurus gardneri Berk.	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本菌の近年の採集事例は東京都豊島区からの 1 例のみであり、日本国内における生育環境や地理的分布に関する既知の情報が著しく乏しく、評価することが困難である。このことから、レッドリスト不掲載とした。

なお、本菌の既知の生育地点である豊島区内では、都市部に立地する公園の緑地や路傍といった人為的な影響の強い環境でのみ採集されている。ヨーロッパでは本種を含む複数のツマミタケ属菌が自然分布地域より移入され、分布を拡大させているとの報告（Jahn, 1965; Assyov and Gashtarov, 2007）も存在することから、日本においても、既知の発生環境の特徴より、本種は国外から移入された可能性も推察される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第４次 2019:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第４次 2018:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第４次 2017:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第４次 2015:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第４次:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第３次:	ツクシタケ	*Lysurus gardneri* Berk.	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Assyov, B., Gashtarov, V., 2007. *Lysurus cruciatus*(*Phallales*)-first record in Bulgaria and southeastern Europe. Mycologia Balcanica, 4: 93-94.
- Jahn, H., 1965. Die Gefingerte Stinkmorchel, *Lysurus gardneri* Berk. Westfalische Pilzbriefe, 5: 80-82.

- 糟谷大河，2004．日本より再発見された *Lysurus gardneri*（スッポンタケ目，アカカゴタケ科）について．日本菌学会会報，45: 39-41．

執筆者：　糟谷大河（慶應義塾大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
スッポンタケ目	スッポンタケ科
タヌキノベニエフデ	
Mutinus elegans (Mont.) E.Fisch.	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本菌はこれまで大阪府高槻市の 1 地点でのみ採集されており、国内における生育地や地理的分布に関する情報がきわめて乏しく、希少性を評価できるだけの情報がない。このことから、レッドリスト不掲載とした。

なお、本菌の既知の生育地点である高槻市内では、都市部に立地する寺院境内の緑地や路傍といった人為的な影響の強い環境でのみ採集されている。ヨーロッパでは、本菌は北アメリカから移入され、分布を拡大させているとの報告（Szczepka, 1995）も存在することから、日本においても、既知の発生環境の特徴より、国外から移入された可能性も推察される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E.Fisch.	DD
第４次 2019:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E.Fisch.	DD
第４次 2018:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E.Fisch.	DD
第４次 2017:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E.Fisch.	DD
第４次 2015:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E.Fisch.	DD
第４次:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E.Fisch.	DD
第３次:	タヌキノベニエフデ	*Mutinus elegans* (Mont.) E. Fisch.	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Daniel Guez・長沢栄史, 2000. 日本新産種 *Mutinus elegans*（腹菌類, スッポンタケ科）について. 日本菌学会会報, 41: 75-78.

- Szczepka, M. Z., 1995. Clé de détermination des espèces européennes du genre *Mutinus* Fr. Documents Mycologiques, 25: 453-458.

執筆者：　糟谷大河（慶應義塾大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
スッポンタケ目	ヒステランギウム科
ハハシマアコウショウロ	
Circulocolumella hahashimensis (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	

具体的理由

アイソタイプ標本、文献および新たに採集された標本を基に詳細な観察を行った結果、ハハシマアコウショウロは広域分布種であるヨツデタケ *Clathrus columnatus*（スッポンタケ目）の幼菌であると結論づけられた。ヨツデタケは汎世界的に分布する種であり、日本国内においては小笠原諸島（父島および母島）以外では、本州の数地点（滋賀県および石川県）で標本記録があるのみであるが、潜在的にはより多くの地点に分布すると考えられる。現状では国内における分布情報が不十分であるが、小笠原諸島における環境は良好で、多数の子実体が数年にわたり発生しており、減少傾向は見られない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2019:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2018:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2017:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	EX
第４次 2015:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	EX
第４次:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai	EX
第３次:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S. Ito & S. Imai) S. Ito & S. Imai	EX
第２次:	ハハシマアコウショウロ	*Circulocolumella hahashimensis* (S. Ito et Imai) S.	EX

		Ito et Imai	
第１次:	—	—	—

参考文献

- 折原貴道・保坂健太郎・山本航平・大前宗之・畠山颯太・糟谷大河，2020．環境省レッドリスト掲載地下生菌（スナタマゴタケ，ハハシマアコウショウロ，シンジュタケ）の再探索と分布の現状について．Truffology，3: 17-27.

執筆者：　保坂健太郎（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
チャワンタケ目	アミガサタケ科
オオズキンカブリ	
Ptychoverpa bohemica (Krombh.) Boud.	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

採集頻度は低いが、この 10 年で減少しているという確証はない。森林伐採などは懸念されるが、確実に減少するという定量的な判断はできない。一部の発生地は保全されており、時期とハビタットを考慮して、探索的な採集が可能である。肉眼で容易に認められる種であり、探索的採集によって、採集は可能と考えられる。近年も安定して確認されており、希少ではあるが、安定した出現が認められる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第４次 2019:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第４次 2018:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第４次 2017:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第４次 2015:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第４次:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第３次:	オオズキンカブリ	*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　細矢剛（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
チャワンタケ目	ベニチャワンタケ科
キツネノサカズキ	
Galiella japonica (Yasuda) Y.Otani	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本種はアカマツ林への依存性が高く、アカマツ林縮小によって減少することが予想される。しかしながら、本種に注目した探索的採集（5 月末～7 月上旬）において、比較的広域（青森、新潟、石川、長野、奈良、岡山、広島の各県）から得られており、安定した出現が見られる。比較的希少ではあるものの、採集可能であるため、カテゴリー外と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y.Otani	VU
第４次 2019:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y.Otani	VU
第４次 2018:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y.Otani	VU
第４次 2017:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y.Otani	VU
第４次 2015:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y.Otani	VU
第４次:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y.Otani	VU
第３次:	キツネノサカズキ	*Galiella japonica* (Yasuda) Y. Otani	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　細矢剛（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名		日本固有
ツチダンゴ目	ツチダンゴ科	
コウボウフデ		
Pseudotulostoma japonicum (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara		

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本種については、分類学的位置も分類学的実体も十分検討されている（Asai et al. 2004; Masuya and Asai 2004）。本種の再記載およびその後の調査によれば、本種に注目した探索的採集によって得ることはでき、減少傾向も明瞭ではないことからリストから除外した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara	DD
第４次 2019:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara	DD
第４次 2018:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara	DD
第４次 2017:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara	DD
第４次 2015:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara	DD
第４次:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I.Asai, H.Sato & Nara	DD
第３次:	コウボウフデ	*Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I. Asai, H. Sato & Nara	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Asai, I., H. Sato, H. and T. Nara, 2004. *Pseudotulostoma japonicum*, comb. nov. (= *Battarrea japonica*), a species of Eurotiales, Ascomycota. Bulletin of the National Science Museum Tokyo, Series B, 30: 1-7.
- Masuya, H. and I. Asai, 2004. Phylogenetic position of *Battarrea japonica* (Kawam.) Otani. Bulletin of the National Science Museum Tokyo, Series B, 30: 9-13.

執筆者：　細矢剛（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ニクザキン目	オフィオコルジケプス科
ウスイロヒメフトバリタケ	
Ophiocordyceps carabidicola (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

北海道から近畿地方にかけて、少なくとも 10 か所の発生地がある。発生数は少ないが減少傾向が確認されていない。また、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Ophiocordyceps carabidicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2019:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Ophiocordyceps carabidicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2018:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Ophiocordyceps carabidicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2017:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Ophiocordyceps carabidicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2015:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Ophiocordyceps carabidicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Ophiocordyceps carabidicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第３次:	ウスイロヒメフトバリタケ	*Cordyceps carabidicola* Kobayasi & Shimizu	DD

第２次:	―	―	―
第１次:	―	―	―

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
フトクビクチキムシタケ	
Cordyceps facis Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

北海道から四国にかけて 20 か所以上で確認されており、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。また、本種は国内各地の土壌から分離されている *Tolypocladium inflatum* と同種とされている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2019:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2018:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2017:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2015:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第３次:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi & Shimizu	NT
第２次:	フトクビクチキムシタケ	*Cordyceps facis* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
クサギムシタケ	
Cordyceps hepialidicola Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

第 2 次レッドリスト掲載当時は発見例が非常に少なかったが、その後、中国地方～東北地方にかけて、イタドリ群落内でも発生することが明らかにされ、発見例が増加した。2020 年以降も新たな発生地が確認されており、減少傾向は見られない。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	クサギムシタケ	*Cordyceps hepialidicola* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
ハエヤドリトガリツブタケ	
Cordyceps iriomoteana Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度しか採取されていない種。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価できないことから、レッドリスト不掲載と判断した

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	ハエヤドリトガリツブタケ	*Cordyceps iriomoteana* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
コゴメセミタケ	
Cordyceps minuta Kobayasi	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度しか採取されていない種。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われていない。タイプ標本は存在するが、標本の状態が悪く種の実体の再検討が難しい。したがって、絶滅のおそれを評価するための情報が得られないことから、レッドリスト不掲載と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第４次 2019:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第４次 2018:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第４次 2017:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第４次 2015:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第４次:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第３次:	コゴメセミタケ	*Cordyceps minuta* Kobayasi	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
ナガボノケンガタムシタケ	
Cordyceps obliquiordinata Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

毎年安定して発生する種ではなく、発生の翌年以降、再発生が確認されない場所が多い。しかし全国的には、東北地方から沖縄県までの広範囲で、ほぼ毎年場所を変えながら発生している。現在までに、少なくとも 10 か所で確認され、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	ナガボノケンガタムシタケ	*Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
オグラクモタケ	
Cordyceps ogurasanensis Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本州から北海道にかけて少なくとも 10 か所の産地が存在する。近年の観察から、標高 1000 ~2000 m 付近のやや高標高の産地に多産することが明らかになってきた。これらの事より、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2019:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2018:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2017:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2015:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第３次:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi & Shimizu	NT
第２次:	オグラクモタケ	*Cordyceps ogurasanensis* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
アブヤドリタケ	
Cordyceps ovoideoperitheciata Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度しか採取されていない種。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価できないことから、レッドリスト不掲載と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	アブヤドリタケ	*Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
シロヒメサナギタケ	
Cordyceps pallidiolivacea Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度しか採取されていない種。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価できないことから、レッドリスト不掲載と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2019:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2018:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2017:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2015:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第３次:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次:	シロヒメサナギタケ	*Cordyceps pallidiolivacea* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
トビシマセミタケ	
Cordyceps ramosipulvinata Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

近畿地方から北海道にかけて 10 か所以上の産地があり、特に中部地方、関東地方、北海道に安定して発生する産地が複数存在する。また、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosipulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2019:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosipulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2018:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosipulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2017:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosipulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2015:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosipulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosipulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第３次:	トビシマセミタケ	*Cordyceps ramosopulvinata* Kobayasi & Shimizu	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
エダウチタンポタケ	
Cordyceps ramosistipitata Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

西表島で 2 回確認されているが、1990 年以降発見例がない。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価できないと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosostipitata* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	エダウチタンポタケ	*Cordyceps ramosostipitata* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
ウスアカシャクトリムシタケ	
Cordyceps rosea Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

四国から北海道にかけて多数の発生地がある。発生地では毎年複数の発生が確認されるため、絶滅のおそれが低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2019:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2018:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2017:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2015:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第３次:	ウスアカシャクトリムシタケ	*Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
サキシマヤドリバエタケ	
Cordyceps sakishimensis Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度しか採取されていない種。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われていない。タイプ標本は存在するが、非常に小さい 1 個体のみで、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価するための情報が得られないことから、レッドリスト不掲載と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	サキシマヤドリバエタケ	*Cordyceps sakishimensis* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
ハネカクシヤドリタケ	
Cordyceps staphylinidicola Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

1 度しか採取されていない種。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の状態が悪いため、種の実体の再検討が難しい。したがって、絶滅のおそれを評価するための情報が得られないことから、レッドリスト不掲載と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	ハネカクシヤドリタケ	*Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
エゾハナヤスリタケ	
Elaphocordyceps jezoënsis (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

北海道から四国にかけて 10 か所以上の発生地があり、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。また、発生地では毎年安定して複数の発生が確認される傾向にある。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	エゾハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps jezoënsis* (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2019:	エゾハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps jezoënsis* (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2018:	エゾハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps jezoënsis* (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2017:	エゾハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps jezoënsis* (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2015:	エゾハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps jezoënsis* (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次:	エゾハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps jezoënsis* (S.Imai) G.H.Sung, J.M.B.Sung & Spatafora	VU
第３次:	エゾハナヤスリタケ	*Cordyceps jezoensis* S. Imai	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
ミオモテタンポタケ	
Elaphocordyceps miomoteana (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度のみしか採取されていない種。基準産地は伐採により消失した。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。よって、絶滅のおそれを評価するに足る情報がないと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ミオモテタンポタケ	*Elaphocordyceps miomoteana* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2019:	ミオモテタンポタケ	*Elaphocordyceps miomoteana* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2018:	ミオモテタンポタケ	*Elaphocordyceps miomoteana* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2017:	ミオモテタンポタケ	*Elaphocordyceps miomoteana* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2015:	ミオモテタンポタケ	*Elaphocordyceps miomoteana* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次:	ミオモテタンポタケ	*Elaphocordyceps miomoteana* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第３次:	ミオモテタンポタケ	*Cordyceps miomoteana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
クビナガクチキムシタケ	
Elaphocordyceps subsessilis (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

北海道から中国地方の温帯広葉樹林に発生する。毎年多数の発生が見られる産地が多く、全国的に減少傾向はみられないため、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	クビナガクチキムシタケ	*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2019:	クビナガクチキムシタケ	*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2018:	クビナガクチキムシタケ	*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2017:	クビナガクチキムシタケ	*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2015:	クビナガクチキムシタケ	*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次:	クビナガクチキムシタケ	*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第３次:	クビナガクチキムシタケ	*Cordyceps subsessilis* Petch	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
エリアシタンポタケ	
Elaphocordyceps valvatistipitata (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

山形県内の基準産地は伐採で失われたが、北海道から屋久島までのほとんどの産地で安定した発生が確認されるため、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	エリアシタンポタケ	*Elaphocordyceps valvatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2019:	エリアシタンポタケ	*Elaphocordyceps valvatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2018:	エリアシタンポタケ	*Elaphocordyceps valvatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2017:	エリアシタンポタケ	*Elaphocordyceps valvatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次 2015:	エリアシタンポタケ	*Elaphocordyceps valvatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第４次:	エリアシタンポタケ	*Elaphocordyceps valvatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	VU
第３次:	エリアシタンポタケ	*Cordyceps valvatostipitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第２次:	エリアシタンポタケ	*Cordyceps valvatostipitata* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
クサナギヒメタンポタケ	
Metacordyceps kusanagiensis (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

東北から九州にかけて 15 か所以上の発生地があり、毎年複数の発生が確認されている。2020 年以降も新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	クサナギヒメタンポタケ	*Metacordyceps kusanagiensis* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2019:	クサナギヒメタンポタケ	*Metacordyceps kusanagiensis* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2018:	クサナギヒメタンポタケ	*Metacordyceps kusanagiensis* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2017:	クサナギヒメタンポタケ	*Metacordyceps kusanagiensis* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	DD
第４次 2015:	クサナギヒメタンポタケ	*Metacordyceps kusanagiensis* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	DD
第４次:	クサナギヒメタンポタケ	*Metacordyceps kusanagiensis* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	DD
第３次:	クサナギヒメタンポタケ	*Cordyceps kusanagiensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
カイガラムシツブタケ	
Ophiocordyceps coccidiicola (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

東北から四国にかけて分布し、発生地点数は多い。特に中部～関東地方ではタマアジサイの枝に着生した状態で群生することもある。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	カイガラムシツブタケ	*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2019:	カイガラムシツブタケ	*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2018:	カイガラムシツブタケ	*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2017:	カイガラムシツブタケ	*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2015:	カイガラムシツブタケ	*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次:	カイガラムシツブタケ	*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第３次:	カイガラムシツブタケ	*Cordyceps coccidiicola* Kobayasi	VU
第２次:	カイガラムシツブタケ	*Cordyceps coccidiicola* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
ヤエヤマコメツキムシタケ	
Ophiocordyceps elateridicola (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
奄美大島、徳之島、沖縄島、石垣島、西表島に分布する。特に、奄美大島と西表島の 5 河川ではまとまった数が安定して発生する。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Ophiocordyceps elateridicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2019:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Ophiocordyceps elateridicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2018:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Ophiocordyceps elateridicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2017:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Ophiocordyceps elateridicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2015:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Ophiocordyceps elateridicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Ophiocordyceps elateridicola* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第３次:	ヤエヤマコメツキムシタケ	*Cordyceps elateridicola* Kobayasi & Shimizu	NT
第２次:	—	—	—

第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
タンポヤンマタケ	
Ophiocordyceps odonatae (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	

具体的理由

普通種であるヤンマタケの有性世代であるため（Kobayasi, 1981）、レッドリスト不掲載とした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	タンポヤンマタケ	*Ophiocordyceps odonatae* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2019:	タンポヤンマタケ	*Ophiocordyceps odonatae* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2018:	タンポヤンマタケ	*Ophiocordyceps odonatae* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2017:	タンポヤンマタケ	*Ophiocordyceps odonatae* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次 2015:	タンポヤンマタケ	*Ophiocordyceps odonatae* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第４次:	タンポヤンマタケ	*Ophiocordyceps odonatae* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	VU
第３次:	タンポヤンマタケ	*Cordyceps odonatae* Kobayasi	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Kobayasi, Y., 1981. Revision of the genus *Cordyceps* and its allies 1. Bulletin of the National Science Museum. Series B, Botany, 7: 1-13.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
コゴメカマキリムシタケ	
Cordyceps mantidicola Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

毎年安定して発生する種ではなく、発生の翌年以降、再発生が確認されない場所が多い。しかし全国的には、本州から九州までの広範囲で、ほぼ毎年場所を変えながら発生している。現在までに少なくとも 10 か所で確認され、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。生育適地である低地の湿った二次林は広く存在するため、潜在的にはより多産する可能性が高い。そのため、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	コゴメカマキリムシタケ	*Cordyceps mantidicola* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ニクザキン目	バッカクキン科
カンザシセミタケ	
Cordyceps kanzashiana Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

西表島や石垣島の複数の沢沿いに安定して生育し、発生数も多い。よって絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2019:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2018:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2017:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次 2015:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第４次:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第３次:	カンザシセミタケ	*Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
キビノムシタケモドキ	
Shimizuomyces kibianus Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価できないことから、レッドリスト不掲載と判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2019:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2018:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2017:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2015:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第３次:	キビノムシタケモドキ	*Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
サンチュウムシタケモドキ	
Shimizuomyces paradoxus Kobayasi	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

中部地方から東北地方の約 10 か所で発生が確認されている。2020 年以降も新たな発生地が確認されている。本種の宿主であるヤマカショウやサルトリイバラは国内に広く分布しているため、本種の生育適地も広く、潜在的により多産するものと思われる。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第４次 2019:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第４次 2018:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第４次 2017:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第４次 2015:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第４次:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第３次:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第２次:	サンチュウムシタケモドキ	*Shimizuomyces paradoxus* Kobayasi	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
オガサワラクモタケ	
Torrubiella albolanata Petch	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

国内では母島で一度のみ確認されている。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われていない種で、日本産標本の所在が不明であるため、種の実体の再検討が難しい。そのため、絶滅のおそれを評価できないと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第４次 2019:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第４次 2018:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第４次 2017:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第４次 2015:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第４次:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第３次:	オガサワラクモタケ	*Torrubiella albolanata* Petch	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
シロトガリクモタケ	
Torrubiella farinacea Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度しか採取されていない種。基準産地は伐採され消失した。原記載以降、詳細な分類学的検討が行われておらず、タイプ標本の所在が不明なため、種の実体の再検討が難しい。よって、絶滅のおそれを評価するに足る情報がないと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2019:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2018:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2017:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次 2015:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第４次:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第３次:	シロトガリクモタケ	*Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ニクザキン目	バッカクキン科
クモノオオトガリツブタケ	
Torrubiella globosa Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

東北地方から中国地方にかけて少なくとも 15 か所の発生地がある。減少傾向は見られず、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2019:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2018:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2017:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次 2015:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第４次:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第３次:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi & Shimizu	NT
第２次:	クモノオオトガリツブタケ	*Torrubiella globosa* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ハラタケ目	ヒラタケ科
ヘゴシロカタハ	
Pleurotus cyatheae S.Imai	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	

具体的理由

木性シダから生えるという特異性から、これまで小笠原諸島父島の固有種と考えられてきたが、DNA データに基づく分子系統解析の結果、*Pleurotus djamor* species complex に属することが明らかとなった（Hosaka et al., 2024）。本 species complex には学名の適用が未確定の複数の系統群が見出されているが、ヘゴシロカタハは小笠原諸島母島、南鳥島から近年採集された標本と核 ITS 領域の塩基配列で区別できないことが判明した。また、母島および南鳥島の個体は広葉樹から発生しており、本種の基質特異性は高くないことも示唆された。学名の取り扱いについては保留とするが、以上の理由からカテゴリー外であると判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S.Imai	EX
第４次 2019:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S.Imai	EX
第４次 2018:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S.Imai	EX
第４次 2017:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S.Imai	EX
第４次 2015:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S.Imai	EX
第４次:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S.Imai	EX
第３次:	ヘゴシロカタハ	*Pleurotus cyatheae* S. Imai	EX
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Hosaka, K., K. -O. Nam and T. Kasuya, 2024. DNA Barcoding of *Pleurotus cyatheae*, an “Extinct” Mushroom Species from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series B, Botany, 50: 41-49.

執筆者：　保坂健太郎（国立科学博物館）・根田仁（森林総合研究所）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ヒダナシタケ目	サルノコシカケ科
コカンバタケ	
Piptoporus quercinus (Schrad.) P.Karst.	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	

具体的理由

国内からの記録は複数種を混同している可能性があり（Kautmanova et al., 2021）、分布、採集記録等を根本的に見直す必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P.Karst.	NT
第４次 2019:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P.Karst.	NT
第４次 2018:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P.Karst.	NT
第４次 2017:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P.Karst.	NT
第４次 2015:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P.Karst.	NT
第４次:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P.Karst.	NT
第３次:	コカンバタケ	*Piptoporus quercinus* (Schrad.) P. Karst.	NT
第２次:	コカンバタケ	*Buglossoporus pulvianus* (Pers.) DonkSyn. *Piptoporus quercinus* (Schrad. : Fr.) Karst.	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- Kautmanova, I., A. M. Ainsworth, I. Olariaga Ibarguren, A. Mešić and J. Jordal, 2021. *Buglossoporus quercinus*. The IUCN Red List of Threatened Species 2021, e. T70401726A204094456.

執筆者：　服部力（森林総合研究所）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ヒダナシタケ目	ニンギョウタケモドキ科
ニンギョウタケ	
Albatrellus confluens (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

マツ枯れや自然遷移など、本種の生育環境であるマツ林の減少要因は存在するものの、本種自体は広範囲に安定して生息しており絶滅のおそれはない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第４次 2019:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第４次 2018:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第４次 2017:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第４次 2015:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第４次:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第３次:	ニンギョウタケ	*Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　服部力（森林総合研究所）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ヒダナシタケ目	ボトリオスフェリア科
タブノキキハダカビ	
Allescheriella crocea (Mont.) S.Hughes	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

検討可能な標本は、2001 年に神奈川で採集された国立科学博物館所蔵の標本のみである。第 3 次レッドリスト改訂時に EX から VU になって以来、新たな情報は追加されていない。本種の生育地は海岸部の良好なタブ林であり、微小菌であることから、環境が保全されていれば、容易に絶滅するとは考えにくい。タブノキ大径木を擁する海岸部の良好なタブ林は減少しているとされるが、評価にあたっては、本種に注目した探索的採集が試みられるべきであり、現時点での情報は、分布などを検討するのに十分とはいえない。ただし、その発見には、専門的な観察眼が必要であり、専門家としての実感をもった評価ができないだけでなく、評価できるような人材確保も困難な状況である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S.Hughes	VU
第４次 2019:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S.Hughes	VU
第４次 2018:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S.Hughes	VU
第４次 2017:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S.Hughes	VU
第４次 2015:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S.Hughes	VU
第４次:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S.Hughes	VU
第３次:	タブノキキハダカビ	*Allescheriella crocea* (Mont.) S. Hughes	VU
第２次:	タブノキキハダカビ（新称）	*Allescheriella crocea* (Mont.) Hughes	EX
第１次:	—	—	—

参考文献

- Degawa, Y., Y. Doi, and T. Hosoya, 2006. Records of *Allescheriella crocea* (basidiomycetous anamorphic fungus) from Sagami Bay Coast, Japan. Memoirs of the National Science Museum, 42: 233–238.

執筆者：　細矢剛（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ビンタマカビ目	ビンタマカビ科
ビンタマカビ	
Corynelia uberata Fr.	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

本種で検討可能であったのは、国立科学博物館の高知県由来の標本だけである。いずれも 1930 年代に採集されたものであり、近年の採集品がないため、増減について議論することができない。採集例が少ないのは、それに注目した採集がおこなわれていないのもその一因であると考えられる。一方、絶滅と判断するには、まだ知見と試行が不足しており、評価に足りるデータがあるとはいえない。ただし、本種は微小菌であるため、その発見には、専門的な観察眼が必要であり、専門家としての実感をもった評価ができないだけでなく、評価できるような人材確保も困難な状況である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第４次 2019:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第４次 2018:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第４次 2017:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第４次 2015:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第４次:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第３次:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Fr.	CR+EN
第２次:	ビンタマカビ	*Corynelia uberata* Achar. : Fr.	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　細矢剛（国立科学博物館）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ボタンタケ目	オフィオコルジケプス科
キイロクビオレタケ	
Ophiocordyceps asyuënsis (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

普通種であるサビイロクビオレタケ *Ophiocordyceps ferruginosa* との分類学的同一性に疑義がある（Hodge et al. 1998）。しかし、タイプ標本の所在が不明であり、種の実体を再検討できない。よって、絶滅のおそれを評価できないと判断した

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	キイロクビオレタケ	*Ophiocordyceps asyuënsis* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2019:	キイロクビオレタケ	*Ophiocordyceps asyuënsis* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2018:	キイロクビオレタケ	*Ophiocordyceps asyuënsis* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2017:	キイロクビオレタケ	*Ophiocordyceps asyuënsis* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次 2015:	キイロクビオレタケ	*Ophiocordyceps asyuënsis* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第４次:	キイロクビオレタケ	*Ophiocordyceps asyuënsis* (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	DD
第３次:	キイロクビオレタケ	*Cordyceps asyuensis* Kobayasi & Shimizu	DD
第２次:	−	−	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Hodge, K. T., R. A. Humber and C. A. Wozniak, 1998. *Cordyceps variabilis* and the genus Synglíocladium. Mycologia, 90: 743-753.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	オフィオコルジケプス科
クビオレカメムシタケ	
Ophiocordyceps pentatomae (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

東北地方から中部地方にかけて散発的に発生が見られ、減少傾向は見られない。基準産地は伐採により消失したが、2020 年以降も新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	クビオレカメムシタケ	*Ophiocordyceps pentatomae* (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2019:	クビオレカメムシタケ	*Ophiocordyceps pentatomae* (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2018:	クビオレカメムシタケ	*Ophiocordyceps pentatomae* (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2017:	クビオレカメムシタケ	*Ophiocordyceps pentatomae* (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次 2015:	クビオレカメムシタケ	*Ophiocordyceps pentatomae* (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第４次:	クビオレカメムシタケ	*Ophiocordyceps pentatomae* (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	CR+EN
第３次:	クビオレカメムシタケ	*Cordyceps pentatomae* Koval	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	オフィオコルジケプス科
ヤクシマセミタケ	
Ophiocordyceps yakusimensis (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

2020 年以降、本州（関東地方）で新たな発生地が複数確認された。現在、関東地方から沖縄本島まで広範囲に分布し、特に茨城県、千葉県、八丈島、奄美大島では 2020 年以降も安定した発生が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヤクシマセミタケ	*Ophiocordyceps yakusimensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2019:	ヤクシマセミタケ	*Ophiocordyceps yakusimensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2018:	ヤクシマセミタケ	*Ophiocordyceps yakusimensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2017:	ヤクシマセミタケ	*Ophiocordyceps yakusimensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次 2015:	ヤクシマセミタケ	*Ophiocordyceps yakusimensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第４次:	ヤクシマセミタケ	*Ophiocordyceps yakusimensis* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora	NT
第３次:	ヤクシマセミタケ	*Cordyceps yakusimensis* Kobayasi	NT
第２次:	ヤクシマセミタケ	*Cordyceps yakusimensis* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	オフィオコルジケプス科
ヒメタンポタケ	
Elaphocordyceps delicatistipitata (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

北海道から京都府にかけてこれまで 8 か所で見つかっているが、非常に小さいため発見が困難である。一箇所は自然災害（発生地の崩落）により消失したが、京都府や福島県の産地では複数年に渡り発生が確認されている。近年、宿主のアサヒヒメクロツチダンゴは国内の広範囲（北海道、本州、伊豆諸島）に分布することが明らかにされ（畠山・折原、2020）、本種も潜在的にはより多産する可能性がある。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ヒメタンポタケ	*Elaphocordyceps delicatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	DD
第４次 2019:	ヒメタンポタケ	*Elaphocordyceps delicatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	DD
第４次 2018:	ヒメタンポタケ	*Elaphocordyceps delicatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	DD
第４次 2017:	ヒメタンポタケ	*Elaphocordyceps delicatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	DD
第４次 2015:	ヒメタンポタケ	*Elaphocordyceps delicatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	DD
第４次:	ヒメタンポタケ	*Elaphocordyceps delicatistipitata* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	DD
第３次:	ヒメタンポタケ	*Cordyceps delicatostipitata* Kobayasi	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 畠山颯太・折原貴道，2020．日本各地から 60 年ぶりに発見されたアサヒヒメクロツチダンゴ．Truffology，3: 33-37．
- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp．

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　菌類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	オフィオコルジケプス科
シロハナヤスリタケ	
Elaphocordyceps ophioglossoides f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	○

具体的理由

菌類分科会の基本的事項に則り、種・亜種・変種までを評価の対象としたため、シロハナヤスリタケを普通種であるハナヤスリタケの地域個体群（白色型）として扱い、レッドリスト不掲載とした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	シロハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps ophioglossoides* f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2019:	シロハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps ophioglossoides* f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2018:	シロハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps ophioglossoides* f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2017:	シロハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps ophioglossoides* f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2015:	シロハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps ophioglossoides* f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次:	シロハナヤスリタケ	*Elaphocordyceps ophioglossoides* f. *cuboides* (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora	CR+EN
第３次:	シロハナヤスリタケ	*Cordyceps ophioglossoides* f. *alba* Kobayasi & Shimizu ex Y.J. Yao	CR+EN

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	コルジケプス科
スズキセミタケ	
Cordyceps ryogamimontana Kobayasi	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	

具体的理由

普通種であるセミノハリセンボン *Purpureocillium takamizusanense* の有性世代であることが明らかにされているため（Ban et al., 2015）、レッドリスト不掲載とした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第４次 2019:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第４次 2018:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第４次 2017:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第４次 2015:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第４次:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第３次:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第２次:	スズキセミタケ	*Cordyceps ryogamimontana* Kobayasi	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- Ban, S., Y. Azuma, H. Sato, K. Suzuki and A. Nakagiri, 2015. *Isaria takamizusanensis* is the anamorph of *Cordyceps ryogamimontana*, warranting a new combination, *Purpureocillium takamizusanense* comb. nov. International Journal of Systematic and Evolutionary Microbiology, 65, 2459-2465.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	バッカクキン科
オグラムシタケ	
Cordyceps olivacea Rick	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	○
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

一度のみしか採取されていない種。タイプ標本は海外産だが、それとは別種の未記載種である可能性が高い。分類学的検討が必要で、現時点では絶滅のおそれを評価できるほどの情報がないと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第４次 2019:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第４次 2018:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第４次 2017:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第４次 2015:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第４次:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第３次:	オグラムシタケ	*Cordyceps olivacea* Rick	DD
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ボタンタケ目	バッカクキン科
ウスキタンポセミタケ	
Cordyceps pleuricapitata Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

国内に広く（関東地方～南西諸島）分布し、特に西日本を中心に低地の二次林やスギ植林地で安定した発生が確認されるため、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2019:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2018:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2017:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2015:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pluricapitata* Kobayasi & Shimizu [= *C. pleuricapitata]*	VU
第３次:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi & Shimizu	VU
第２次:	ウスキタンポセミタケ	*Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	バッカクキン科
ミドリクチキムシタケ	
Cordyceps atrovirens Kobayasi & Shimizu	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

東北地方から中国地方にかけて、暖温帯から冷温帯の広葉樹林の 20 地点以上で発生が確認され、毎年安定して発生する場所も多い。山形県では伐採により消滅した産地が 1 地点あるが、2020 年以降も関東地方などで新たな発生地が確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2019:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2018:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2017:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次 2015:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第４次:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第３次:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi & Shimizu	VU
第２次:	ミドリクチキムシタケ	*Cordyceps atrovirens* Kobayasi et Shimizu	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ボタンタケ目	バッカクキン科
ミドリトサカタケ	
Metacordyceps indigotica (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

九州から東北にかけて分布し、特に中国地方～近畿地方の日本海側および東北地方では、イタドリ群落内で安定して発生する。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ミドリトサカタケ	*Metacordyceps indigotica* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2019:	ミドリトサカタケ	*Metacordyceps indigotica* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2018:	ミドリトサカタケ	*Metacordyceps indigotica* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2017:	ミドリトサカタケ	*Metacordyceps indigotica* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2015:	ミドリトサカタケ	*Metacordyceps indigotica* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次:	ミドリトサカタケ	*Metacordyceps indigotica* (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第３次:	ミドリトサカタケ	*Cordyceps indigotica* Kobayasi & Shimizu	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
ボタンタケ目	バッカクキン科
ハヤカワセミタケ	
Metacordyceps owariensis (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

北関東から奄美大島にかけて 20 か所以上の発生地があり、特に京都府や香川県では比較的安定した発生が確認される。基準産地は伐採により消失したが、2020 年以降も関東地方で新たな発生地が複数確認されている。よって、絶滅のおそれは低いと判断した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ハヤカワセミタケ	*Metacordyceps owariensis* (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2019:	ハヤカワセミタケ	*Metacordyceps owariensis* (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2018:	ハヤカワセミタケ	*Metacordyceps owariensis* (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2017:	ハヤカワセミタケ	*Metacordyceps owariensis* (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次 2015:	ハヤカワセミタケ	*Metacordyceps owariensis* (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第４次:	ハヤカワセミタケ	*Metacordyceps owariensis* (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora	CR+EN
第３次:	ハヤカワセミタケ	*Cordyceps owariensis* Kobayasi	CR+EN
第２次:	ハヤカワセミタケ	*Cordyceps owariensis* Kobayasi	CR+EN
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ボタンタケ目	バッカクキン科
シロタマゴクチキムシタケ	
Cordyceps deflectens Penz. & Sacc.	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

沖縄県や奄美大島の生育地では毎年安定した発生が確認されるため、絶滅のおそれは低い。また、本種は *Cordyceps deflectens* とは別種の未記載種と考えられており（日本冬虫夏草の会、2014）、種の実体が定まっていない。よってレッドリスト不掲載とした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第４次 2019:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第４次 2018:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第４次 2017:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第４次 2015:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第４次:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第３次:	シロタマゴクチキムシタケ	*Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.	CR+EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 日本冬虫夏草の会，2014．冬虫夏草生態図鑑．誠文堂新光社，東京．303pp.

執筆者：　山本航平（栃木県立博物館）

公表年月：2025 年 3 月

■学名索引

Agaricus hahashimensis 2
Albatrellus cantharellus 76
Albatrellus confluens (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar 499
Albatrellus ovinus 149
Allescheriella crocea (Mont.) S.Hughes 501
Amanita squarrosa 266
Ascosparassis shimizuensis 226
Asterinella hiugensis 214
Asterophora parasitica 298
Aureoboletus viscosus 347
Aurophora dochmia 230
Baeospora myriadophylla 87
Boletopsis grisea 157
Boletus edulis 352
Bovista dryina 290
Camarophyllus microbicolor 34
Campanella boninensis 53
Chlorophyllum agaricoides 6
Chorioactis geaster 120
Circulocolumella hahashimensis (S.Ito & S.Imai) S.Ito & S.Imai 451
Clitocybe castaneofloccosa 18
Clitocybe vittatipes 274
Collybia matris 22
Coprinus boninensis 10
Cordyceps atrovirens Kobayasi & Shimizu 518
Cordyceps deflectens Penz. & Sacc. 523
Cordyceps facis Kobayasi & Shimizu 459
Cordyceps hepialidicola Kobayasi & Shimizu 460
Cordyceps iriomoteana Kobayasi & Shimizu 461
Cordyceps kanzashiana Kobayasi & Shimizu 490
Cordyceps mantidicola Kobayasi & Shimizu 489
Cordyceps minuta Kobayasi 462
Cordyceps nanatakiensis 173
Cordyceps obliquiordinata Kobayasi & Shimizu 463
Cordyceps ogurasanensis Kobayasi & Shimizu 464
Cordyceps olivacea Rick 516
Cordyceps ovoideoperitheciata Kobayasi & Shimizu 465
Cordyceps pallidiolivacea Kobayasi & Shimizu 467
Cordyceps pleuricapitata Kobayasi & Shimizu 517
Cordyceps polycephala 177
Cordyceps ramosipulvinata Kobayasi & Shimizu 468
Cordyceps ramosistipitata Kobayasi & Shimizu 469
Cordyceps rosea Kobayasi & Shimizu 470
Cordyceps rubiginosistipitata 181
Cordyceps ryogamimontana Kobayasi 515
Cordyceps sakishimensis Kobayasi & Shimizu 471
Cordyceps staphylinidicola Kobayasi & Shimizu 472
Cordyceps termitophila 186
Corynelia uberata Fr. 503
Crepidotus subpurpureus 26
Cunninghamella homothallica Komin. & Tubaki 445
Cyathus badius 306
Cyathus boninensis 57
Cyathus pallidus 310
Dendropolyporus umbellatus 412
Dendrosphaera eberhardtii 165
Desarmillaria ectypa 91
Diplocarpa irregularis 132
Echinodontiellum japonicum 115
Echinodontium tsugicola 424
Elaphocordyceps delicatistipitata (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora 511
Elaphocordyceps jezoënsis (S.Imai) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora 473
Elaphocordyceps miomoteana (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora 475
Elaphocordyceps ophioglossoides f. *alba* (Kobayasi & Shimizu ex Y.J.Yao) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora 513
Elaphocordyceps subsessilis (Petch) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora 477

Elaphocordyceps valvatistipitata (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung & Spatafora 479
Entoloma incanum 278
Entoloma japonense 30
Favolus pseudobetulius 128
Fulvifomes boninensis 79
Fulvifomes imazekii 83
Galiella japonica (Yasuda) Y.Otani 454
Gymnopilus noviholocirrhus 46
Hericium cirrhatum 428
Hygrocybe hahashimensis 282
Hygrocybe hypohaemacta 286
Hygrocybe macrospora 38
Hygrocybe miniatostriata 42
Hymenochaete odontoides 376
Hypsizygus ulmarius 302
Inonotus cuticularis 380
Inonotus obliquus 141
Inonotus pachyphloeus 384
Inonotus patouillardii 388
Lactarius ogasawarashimensis 432
Lentinus lamelliporus 73
Lepiota boninensis 14
Leptocorticium cyatheae 368
Lignosus rhinocerotis 416
Limacella olivaceobrunnea 270
Lycoperdon henningsii 50
Lycoperdon yasudae 294
Lysurus gardneri Berk. 447
Lysurus periphragmoides 392
Lysurus sphaerocephalus 124
Metacordyceps indigotica (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora 519
Metacordyceps kusanagiensis (Kobayasi & Shimizu) Kepler, G.H.Sung & Spatafora 481
Metacordyceps owariensis (Kobayasi) Kepler, G.H.Sung & Spatafora 521
Metarhizium pseudoatrovirens 169
Microporus ochrotinctus 111
Morchella semilibera 222
Mutinus elegans (Mont.) E.Fisch. 449
Neoalbatrellus yasudae 153
Onygena corvina 218
Ophiocordyceps asyuënsis (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 505
Ophiocordyceps carabidicola (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 457
Ophiocordyceps cicadellidicola 194
Ophiocordyceps coccidiicola (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 483
Ophiocordyceps elateridicola (Kobayasi & Shimizu) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 485
Ophiocordyceps gryllotalpae 198
Ophiocordyceps odonatae (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 487
Ophiocordyceps pentatomae (Koval) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 507
Ophiocordyceps uchiyamae 202
Ophiocordyceps yakusimensis (Kobayasi) G.H.Sung, J.M.Sung, Hywel-Jones & Spatafora 509
Osteina obducta 404
Phaeoclavulina campestris 372
Phallus hadriani 103
Phallus luteus 396
Phallus rubicundus 107
Phellodon fuligineoalbus 161
Piptoporus quercinus (Schrad.) P.Karst. 498
Pleurotus cyatheae S.Imai 496
Pleurotus dryinus 314
Pluteus daidoi 61
Pluteus horridilamellus 65
Porpoloma boninense 322
Protomyces pachydermus 234
Protubera borealis 400
Psathyrella boninensis 69
Pseudotulostoma japonicum (Kawam.) I.Asai, H.Sato

& Nara 455
Ptychoverpa bohemica (Krombh.) Boud. 453
Queletia mirabilis 242
Rhizopogon luteolus 360
Rhizopogon togasawarius 95
Rhizopogon yakushimensis 99
Russula boninensis 436
Sanghuangporus sanghuang 145
Sarcodon imbricatus 440
Scleroderma polyrhizum 364
Shimizuomyces kibianus Kobayasi & Shimizu 491
Shimizuomyces paradoxus Kobayasi 492
Skeletocutis albomarginata 408
Strobilomyces mirandus 356
Taphrina kusanoi 238
Tolypocladium inegoense 206
Tolypocladium toriharamontanum 210
Tomophagus colossus 420
Torrubiella albolanata Petch 493
Torrubiella farinacea Kobayasi & Shimizu 494
Torrubiella globosa Kobayasi & Shimizu 495
Trichoderma cerebriforme 190
Tricholoma auratum 326
Tricholoma bakamatsutake 330
Tricholoma fulvocastaneum 335
Tricholoma matsutake 136
Tricholoma radicans 339
Tricholoma robustum 343
Tulostoma brumale 246
Tulostoma fimbriatum var. *campestre* 250
Tulostoma fimbriatum var. *fimbriatum* 254
Tulostoma squamosum 258
Tulostoma striatum 262
Volvariella bombycina 318

■和名索引

アカエノツトノミタケ 181
アカダマスッポンタケ 103
アカダマノオオタイマツ 107
アカハナビラタケ 226
アキノアシナガイグチ 347
アブヤドリタケ 465
アミラッパタケ 76
アラゲカワウソタケ 380
アラナミケシボウズタケ 254
イネゴセミタケ 206
ウスアカシャクトリムシタケ 470
ウスイロヒメフトバリタケ 457
ウスキキヌガサタケ 396
ウスキタンポセミタケ 517
ウネミケシボウズタケ 262
ウロコケシボウズタケ 258
エゾハナヤスリタケ 473
エダウチタンポタケ 469
エダウチホコリタケモドキ 165
エヒメウスバタケ 376
エリアシタンポタケ 479
オオズキンカブリ 453
オオボタンタケ 190
オオミノアカヤマタケ 38
オオメシマコブ 79
オガサワライタチタケ 69
オガサワラキハツダケ 436
オガサワラクモタケ 493
オガサワラツムタケ 46
オガサワラハツタケ 432
オグラクモタケ 464
オグラムシタケ 516
オニノケヤリタケ 242
カイガラムシツブタケ 483
カバイロチャダイゴケ 306
カバノアナタケ 141
カンザシセミタケ 490
カンバタケモドキ 128
キアミズキンタケ 392
キイロクビオレタケ 505
キツネノサカズキ 454
キヌオオフクロタケ 318
キビノムシタケモドキ 491
キリノミタケ 120
クサギムシタケ 460
クサナギヒメタンポタケ 481
クビオレカメムシタケ 507
クビナガクチキムシタケ 477
クモノオオトガリツブタケ 495
クロカワ 157
クロゲキヤマタケ 282
クロミノクチキムシタケ 202
クロムラサキハナビラタケ 132
ケガワタケ属の１種 73
ケシボウズタケ 246
ケラタケ 198
コウボウフデ 455
コウヤクマンネンハリタケ 115
コカンバタケ 498
コゴメカマキリムシタケ 489
コゴメセミタケ 462
コササクレシロオニタケ 266
コナガエノアカカゴタケ 124
コメツブホコリタケ 50
サキシマヤドリバエタケ 471
ササナバ 372
サンチュウムシタケモドキ 492
シイノキ類葉ぶくれ病菌 238
シシタケ 440
シモコシ 326
シロアリタケ 186
シロタマゴクチキムシタケ 523
シロタモギタケ 302
シロトガリクモタケ 494

シロハナヤスリタケ 513
シロヒメサナギタケ 467
シロマツタケモドキ 339
スズキセミタケ 515
スナタマゴタケ 6
タヌキノベニエフデ 449
タブノキキハダカビ 501
タンポエゾゼミタケ 210
タンポポ浮腫病菌 234
タンポヤンマタケ 487
ダイダイサルノコシカケ 408
ダイドウベニヒダタケ 61
チチシマシメジ 322
チチブクチキムシタケ 173
チョレイマイタケ 412
ツガマイタケ 404
ツクシタケ 447
ツチグリカタカワタケ 364
ツバヒラタケ 314
トガサワラショウロ 95
トガリフカアミガサタケ 222
トゲホコリタケ 294
トビシマセミタケ 468
トライグチ 356
トワダミドリクチキムシタケ 169
ドウタイクスダマカビ 445
ナガエノホコリタケ 250
ナガエノヤグラタケ 298
ナガボノケンガタムシタケ 463
ナンバンオオカワウソタケ 388
ニカワショウロ 400
ニセカンバタケ 420
ニセマツタケ 335
ニンギョウタケ 499
ニンギョウタケモドキ 149
ヌメリアイタケ 153
ネッタイアカヌメリガサ 286
ハエヤドリトガリツブタケ 461
ハゲチャダイゴケ 310
ハチマキイヌシメジ 274
ハネカクシヤドリタケ 472
ハハシマアコウショウロ 451
ハハジマモリノカサ 2
ハハノツエタケ 22
ハマベダンゴタケ 290
ハヤカワセミタケ 521
バカマツタケ 330
ヒジリタケ 416
ヒメタンポタケ 511
ヒメハルゼミタケ 177
ヒュウガサラタケ 230
ヒュウガハンチクキン 214
ビンタマカビ 503
フサハリタケ 428
フサベニヒダタケ 65
フジイロアマタケ 87
フタイロコガサタケ 34
フトクビクチキムシタケ 459
ヘゴシロカタハ 496
ヘゴノコウヤクタケ 368
ホネタケ 218
ホンショウロ 360
マツタケ 136
マツタケモドキ 343
マツバハリタケ 161
マンネンハリタケ 424
ミオモテタンポタケ 475
ミドリクチキムシタケ 518
ミドリトサカタケ 519
ムニンキヤマタケ 42
ムニンチヂミタケ 53
ムニンチャダイゴケ 57
ムニンチャモミウラモドキ 30
ムニンヌメリカラカサタケ 270
ムニンヒトヨタケ 10
ムニンヒメカラカサタケ 14

ムニンヒメサカズキタケ 18
ムラサキチャヒラタケ 26
メシマコブ 145
ヤエヤマキコブタケ 384
ヤエヤマコメツキムシタケ 485
ヤクシマセミタケ 509
ヤクタネショウロ 99
ヤチヒロヒダタケ 91
ヤマドリタケ 352
ヨコグラサルノコシカケ 83
ヨコバイタケ 194
ワカクサウラベニタケ 278
ワニスタケ 111

The 5th Red Databook Fungi: Threatened wildlife of Japan

Edited by
Ministry of the Environment, Japan
1-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo
100-8975, JAPAN

第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　菌類

2025 年 3 月　初版　発行

編集／環境省
〒100-8975　東京都千代田区霞が関 1-2-2
電話　03-3581-3351（代表）

The 5th Red Databook Fungi: Threatened wildlife of Japan